

塩野西遺跡群

下荒田遺跡

——長野県北佐久郡御代田町下荒田遺跡発掘調査報告書——

1995

長野県御代田町教育委員会

解

説

1 本書には、1991年に実施した長野県北佐久郡御代田町に所在する下荒田(しもあらた)遺跡発掘調査で出土した遺構・遺物が掲載されている。

2 今回の調査でわかったこと

(1) 縄文時代 (狩猟・採集の時代)

およそ7千年前の縄文時代早期後半の土器がまとまってみつかった。非常に珍しい文様をもち、貴重な資料である。しかし、住居址、墓などの穴はみつからなかった。

(2) 弥生時代 (稻作農耕が始まった時代)

御代田町で細田遺跡に次いで2例目の1千7百年前の弥生時代の農村が発見された。

それは標高820mを越える高冷地にあり、佐久地方の弥生時代の稻作の限界ラインと言われた・標高720mをはるかに越えるものであった。

この村は最終的には5軒程度で構成された小さな村で、土器の顔つきは隣の細田遺跡で出土したものと良くにているため、ほぼ同じ頃村造りが行われたようだ。水田の開発や経営は南側の「ハルキ沢」と呼ばれる現在町内の一等水田地帯で共同作業をしていたようだ。また、古墳時代に至ると下段にある細田・下荒田遺跡の人々は塚田遺跡へ集団で移動し、立ち去るに当たっては村の一部を焼きはらっていった。

村の中では壺・高环・鉢などを赤く彩るなど千曲川流域に特徴的な弥生土器が使用されていた。これらの土器の分析から下荒田遺跡の弥生農村は弥生時代終末（日本列島では古墳の築造が始まったころ）に造られたことがわかった。

(3) 平安時代 (京の都では貴族が華やかな生活を送った時代)

1千年前（9世紀後半～10世紀初頭）と9百年前（11世紀後半）の空白をおいて二期にまたがる平安時代の小さな村がみつかった。9世紀後半から10世紀初頭の村は塩野西遺跡群のあちらこちらで見つかっており、律令制の崩壊に伴う、当時の活発な再開拓状況を見て取れる。又、いったん終焉したかに見えた塩野地区でのムラ造りが浅間火山の活動が活発な11世紀に再び行われていたこともわかった。



下荒田遺跡出土の縄文時代早期第Ⅰ群土器 (1:2 土器右下の数字は図中の番号)

例　　言

- 1 本書は、長野県北佐久郡御代田町所在の下荒田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、北佐久地方事務所の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。
- 3 本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。
- 4 本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

- ◎ 遺物復原　　伴野有希子、小山内玲子、竹原久子、内堀久代、田村朗子、
佐藤夫美子、萩原正子
- ◎ 遺物実測　　鳥居亮、小山岳夫、本橋典子、シン航空写真㈱
- ◎ 遺物拓本　　内堀久代
- ◎ 遺物トレース　　鳥居亮
- ◎ 遺構トレース　　鳥居亮、砂連尾恵美子、神藏惇子
- ◎ 遺構写真　　堤隆、鳥居亮、小山岳夫
- ◎ 遺物写真　　鳥居亮
- ◎ 遺物観察表作成　　小山岳夫
- ◎ 版組み　　小山岳夫

- 5 本書に使用した航空写真については、㈱協同測量社が撮影したものである。
- 6 本書の執筆分担については、文責を目次に明記してある。
- 7 本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、小山岳夫が行った。
- 8 本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配慮を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。　(順不同・敬称略)

土肥孝、毒島正明、領塙正浩、小笠原永隆、阿部芳郎、矢島俊雄、守屋豊人、青村光夫、高柳圭一、高橋龍三郎、石川日出志、大塚達朗、金子直行、原田昌幸、宮下健司、山下誠一、花岡弘、白田武正、寺島俊郎、原明芳、小林眞寿、翠川泰弘、竹原学、市沢英利、下平博行、贊田明、品田高志、石黒立人、石坂俊郎、村田健二、中山誠二、大木紳一郎、黒田晃、坂井隆、小野和之、山口逸弘、若狭謙、伊藤敏行、青木和明、青木一男、神村透、千野浩、飯島哲也、寺島孝典、前島卓、塩崎幸夫、尾見智志、直井雅尚、島田哲男、小熊博史、水沢教子

凡　　例

1 遺構の名称

Y → 弥生時代竪穴住居址 H → 平安時代竪穴住居址 D → 土坑

2 遺構のナンバーは、時代別に付してある。

3 挿図の縮尺

竪穴住居・土坑 = 1 : 80、炉・かまど = 1 : 40、

土器 = 1 : 4。 石器 = 2 : 3、1 : 3

以上が基本的なものである。これ以外のものも含めて挿図中にその縮尺を明示してある。

4 図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真の縮尺については、土器が 1 : 3、小形石器 2 : 3、大形石器 1 : 3 で、その縮尺は図版中に明記してある。

5 遺構面積の計測にはプランニメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

6 弥生・平安時代の出土遺物一覧表<土器>の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、一は不明、() は推定値を示す。単位はcmである。

7 出土遺物一覧表<石器>の法量は、一は不明、() が現存値、() がない場合は完存値を表す。単位は、cm・gである。

8 遺構の層序説明は本文中に記した。

9 土層の色調、遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

10 挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表す。

(1) 遺構

遺構断面 = 斜線

貼り床 = 網点 (細)

焼 土 = 網点 (粗)

(2) 遺物

土器断面 繩文前期 含織維土器断面 = 網点 (細)

土器内外面 土師器 黒色処理 = 網点 (太) 赤色塗彩 (太)

目 次

解 説
口 絵
例 言
凡 例
目 次

I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査の概要	小山岳夫 3
(1) 調査に至る動機	3
(2) 発掘調査の概要	4
(3) 発掘区の設定と遺構の検出	5
(4) 発掘調査の経緯	7
II 遺跡の環境	9
1 遺跡の環境	森川宗治 11
(1) 自然環境	11
(2) 歴史的環境	11
2 層 序	小山岳夫 16
III 造構と遺物	17
1 縄文時代の遺物	中沢道彦 19
(1) 縄文時代早期の土器	19
(2) 縄文時代前期の土器	25
(3) 縄文時代中後期の土器	25
(4) 縄文時代の石器	25
2 弥生時代の竪穴住居址	小山岳夫 51
(1) Y-1号住居址	51
(2) Y-2号住居址	53
(3) Y-3号住居址	57
(4) Y-4号住居址	60
(5) Y-5号住居址	62
(6) その他の遺物	62

3 平安時代の竪穴住居址と出土遺物	小山岳夫	63
(1) H-1号住居址		63
(2) H-2号住居址		67
(3) H-3号住居址		71
(4) H-4号住居址		75
(5) H-5号住居址		77
(6) H-6号住居址		81
(7) H-7号住居址		82
(8) H-8号住居址		85
4 土坑とその他の遺構	小山岳夫	88
(1) D-1~14号土坑		88
(2) M-1号溝状遺構		88
IV 総 括		91
1 下荒田遺跡早期第Ⅰ群土器について	中沢道彦	93
2 下荒田遺跡における弥生時代末期の集落	小山岳夫	104
3 律令体制崩壊期における山麓集落の出現	小山岳夫	106
(1) 時間的位置付け		106
(2) 佐久平北部における集落の様相		109
(3) 時代背景から山麓集落出現の意味を考える		111
V 写真図版		115

I

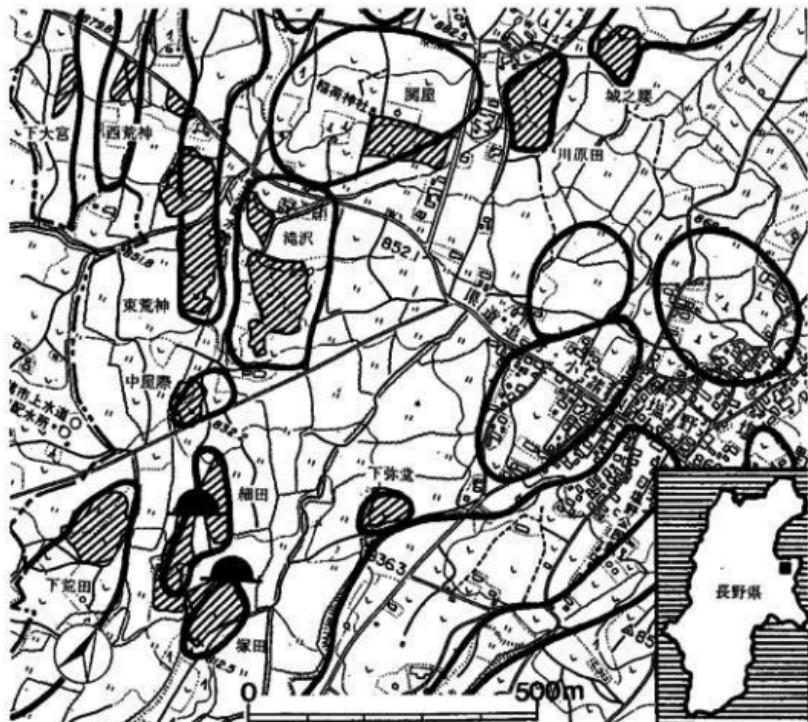
発掘調査 の概要

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る動機

長野県北佐久郡御代田町大字塩野・小諸市大字塩野・八幡・柏木にかかる一帯、北大井地区において、水田経営の合理化を目的とした県営土地改良総合整備事業が平成2年より実施された。

一方、この地区には周知の遺跡が群在化しており、その保護問題が表面化してきた。このため、その原因者である佐久地方事務所と、保護部局である長野県教育委員会、御代田町教育委員会の三者において話し合いがもたれ、該当する遺跡について緊急発掘調査を実施し、5カ年計画で記録保存をはかることとなった。



第1図 塩野西遺跡群の発掘調査遺跡（斜線部分）

これを受けて、平成元年には翌年度工事実施地区にかかる弥堂・細尾・上西田・城之腰・川原田遺跡の5遺跡について試掘調査、平成2年度には城之腰と川原田遺跡の発掘調査、下弥堂・細田・塚田・下荒田遺跡の試掘調査、翌平成3年に前年試掘の4遺跡の本発掘調査が実施された。

(2) 発掘調査の概要

- 1 遺跡名 下荒田遺跡
- 2 所在地 長野県北佐久郡御代田町大字塩野字下荒田
- 3 発掘期間 平成3年10月15日～平成3年11月18日（平成3年度）
- 4 整理期間 平成3年11月19日～平成4年3月30日（平成3年度）
平成4年4月13日～平成5年3月31日（平成4年度）
平成5年4月5日～平成6年3月25日（平成5年度）
平成6年4月4日～平成7年3月24日（平成6年度）
- 5 発掘理由 平成3年度北大井地区県営土地改良総合整備事業に伴い、下荒田遺跡の破壊が予想されるため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行う。
- 6 発掘方針 広大な調査対象区について、居住域・生産域・墓域等全体の検出に努める。
- 7 費用負担 調査費用総額のうち、平成4年度までは77.5%、平成5年度以降は85%を原因者である農政部局（佐久地方事務所）が負担し、残りの22.5%、15%については文化財補助事業として文化財保護部局が負担した（国庫補助金50%、県補助金15%、町費35%）。
- 8 事務局 ◎ 教育次長 山本岩正・藤巻興樹・柳沢忠良 ◎ 社会・同和教育係長 古越恵美夫、内堀篤志 ◎ 社会・同和教育係 飯塚 守、内堀健司、土屋 寿、堤 隆、小山岳夫
- 9 調査団
- 顧問 柳沢 篤（御代田町長）
- 参与 桜井為吉、田村 泉、内山俊雄、柳沢恒三郎、小林五郎、小林太郎、大井源寿、萩原弘祐、柳沢文人（御代田町文化財審議委員）
- 团长 土屋秀憲（御代田町教育長） 担当者 堤 隆・小山岳夫（御代田町教育委員会）
- 調査員 鳥居 亮（主任）、吉井雅勇、角張淳一、伴野有希子、中沢道彦、賛田 明
- 補助員 小山内玲子、竹原久子、高地正雄、森川宗治、高瀬武男、小口達志、小林嘉孝
- 作業員 尾沼けさと、山本まさる、飯田すえの、内堀ときい、日向万平、日向愛子、古川まち子、萩原正子、掛川孝子、田村朗子、内堀美保子、小林満子、内堀久代、佐藤夫美子、中山祐子、中込輝子、齋藤真理、本橋典子、砂連尾恵美子、神藏惇子

(3) 発掘区の設定と遺構の検出

本調査の発掘区については第3図に示したとおりで、図の約8,168m²が該当する。

この発掘区については、土地改良総合整備事業に関する遺跡全体のなかで把握できるように国家座標第VII系を用い、20m四方のグリッドを設定した。したがって、グリッドのY軸は真北を指すようになっている。グリッド名は、Y軸については北から1・2・3～、X軸については西からA・B・C～とした。また、Y軸3列・X軸D列の交点は北緯39°19'30"、東経138°29'13"である。

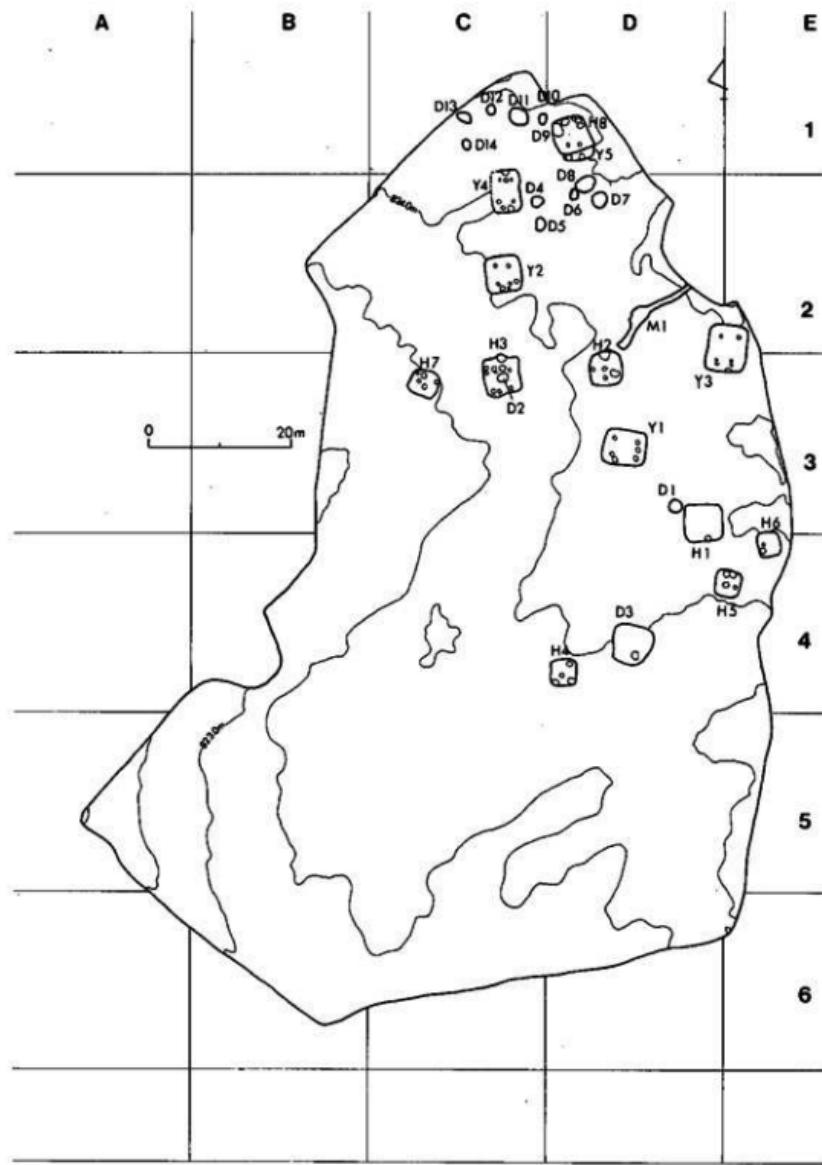
調査は、調査対象区についてまずは自然地形と遺跡の範囲を見極めるため、重機により東西・南北に試掘トレッソを入れてみた。その結果おおよその自然地形と遺跡の範囲をとらえることができたので、つぎに遺跡全部分の表土を重機によって除去した。調査区から検出された遺構の概要は第1表のとおりである。

第1表 下荒田遺跡の検出遺構数

遺構 時期	縦	土	計
	穴	坑	
縄文早期	0	0	0
弥生後期	5	0	5
平安	8	0	8
不明	0	14	14
計	13	14	27



第2図 発掘された下荒田遺跡



第3図 下荒田遺跡全体図 (1 : 800)

(4) 発掘調査の経緯

平成3年度

平成3年8月19日～21日

下荒田遺跡範囲確認。

9月16日～11月9日

下荒田遺跡表土削平。

10月15日

発掘調査開始。

弥生住居計5軒、平安住居8軒、土坑群の

掘り下げ。

10月28日

遺構の測量作業開始。11月17日まで。

11月15日

航空測量のため全体清掃。及び残務整理。

11月17日

航空測量。

平成3年11月1日～平成4年3月30日

遺物整理。

平成4年度

平成4年4月16日～平成5年3月31日

図面整理・土器復原・実測作業等を行う。

平成5年度

平成5年4月2日～平成6年3月25日

図面の製図、土器実測作業等を行う。

平成6年度

平成6年4月4日～平成7年3月24日

遺物整理。土器復原、土器拓本、土器実測、

報告書作成を行う。

3月24日

発掘調査報告書刊行。



第4図 重機による遺跡範囲確認



第5図 遺構の掘り下げと表土削平



第6図 遺物整理



第7図 弥生土器の復元

II
遺跡
の環境

1 遺跡の環境

(1) 自然環境

下荒田遺跡は、浅間山南麓の細い尾根上に位置しており、標高823m内外を測る。

遺跡の背後にそびえる浅間山は標高2,560mを測り、その火山の形態（コニーデ型の裾野・三重式噴火口・寄生火山など）から、わが国においても代表的な活火山といわれておらず、現在も盛んにその活動を続けている。

浅間火山の最初の噴火は、およそ数万年前から始まったといわれ、その変遷は、古い順から黒班山期（数万年前）・仏岩期（1万5千年前頃）・軽石流期（1万4千年前～1万1千年前頃）・前掛山期（数千年前）とされている。ちなみに、前掛山期における天仁元年（1108年）及び天明3年（1783年）の噴火は、歴史時代の記録に残る大噴火として、あまりにも有名である。

この地域の基盤層は、その浅間山の火山噴出物により構成される。本遺跡の基盤層は主として軽石流期のうち、第2軽石流による堆積物からなっている。また、天仁元年の噴火によると推定される追分火碎流堆積物は、本遺跡の約1km以東の御代田町・軽井沢地域を覆っている。

ところで、この遺跡を包括する標高800～900m地帯は、浅間山麓の第一伏流水が、地表の各所に湧出する地帯である。本遺跡の北側、真楽寺の「大沼の池」をたたえる豊富な湧水を始め、本遺跡の東方の湧玉の湧水など隨所に湧水がみられ、往時の集落形成のための要件となっている。なお、湧水や河川の流下は、山麓末端部の軽石流堆積物を刻んで、当地方特有ないわゆる「田切り地形」を発達させている。

さて、この地帯の現在の植生を見ると、北側に植付されたカラマツの林地があり、これにアカマツ、クリなどが点在している。縄文時代も落葉広葉樹を主とするいわゆる雑木林的な景観を想定することができようか。

(2) 歴史的環境

浅間山南麓の標高800～900m内外には、豊富な湧水や動植物など生活環境や自然環境を背景に、縄文時代を中心とし弥生・古墳・奈良平安時代の、数多くの遺跡が分布している（第8図）。近年の発掘調査成果に基づいて、下荒田遺跡をとりまく歴史的環境を見てみよう。

I 縄文時代

縄文時代の草創期の遺物は、川原田遺跡（第8図7）から「有茎尖頭器」が単独で出土してお



第8図 下荒田遺跡と周辺遺跡分布図 (1 : 20,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代					備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	
1	下荒田	御代田町大字塩野字下荒田		○	○		○	1991年度発掘調査
2	中星原	御代田町大字塩野字中星原		○			○	1992年度発掘調査
3	滝沢	御代田町大字塩野字滝沢		○			○	1992・1993年度発掘調査
4	東荒神	御代田町大字塩野字東荒神		○		○	○	1993年度発掘調査
5	西荒神	御代田町大字塩野字西荒神		○		○		1993年度発掘調査
6	塚田	御代田町大字塩野字塚田		○	○			1990年度発掘調査
7	川原田	御代田町大字塩野字川原田		○			○	1990年度発掘調査
8	城之腰	御代田町大字塩野字城之腰		○		○	○	1990年度発掘調査
9	細田古墳	御代田町大字塩野字細田				○		1991・1992年度発掘調査
10	細田	御代田町大字塩野字細田			○	○		1991年度発掘調査
11	下弥堂	御代田町大字塩野字下弥堂		○				1991年度発掘調査
12	上西田	御代田町大字塩野字上西田		○				
13	上弥堂	御代田町大字塩野字弥堂		○				
14	西島	御代田町大字塩野字西島		○				
15	下藤塚	御代田町大字塩野字下藤塚		○				
16	塩野城	御代田町大字塩野字荒鹿					○	
17	細尾根	御代田町大字塩野字細尾根		○		○		
18	広畑	御代田町大字塩野字広畑		○		○		1987年度発掘調査
19	蟹窪	御代田町大字塩野字蟹窪		○				
20	西駒込	御代田町大字塩野字西駒込		○				1991年度発掘調査
21	上藤塚	御代田町大字塩野字上藤塚		○				
22	東二ツ石	御代田町大字塩野字東二ツ石		○				1991年度発掘調査
23	塩野西原	御代田町大字塩野字西原		○				
24	湯玉	御代田町大字塩野字湯玉		○				1991・1993年度発掘調査
25	馬場	御代田町大字塩野字馬場				○		
26	馬瀬口城	御代田町大字馬瀬口字北原					○	
27	東十石城	御代田町大字馬瀬口字東十石					○	
28	めがね冢古墳群	御代田町大字馬瀬口字戻場		○				
29	下原古墳群	御代田町大字馬瀬口字下原			○			1974年度発掘調査
30	下前田原遺跡群	御代田町大字馬瀬口字西向原				○		
31	根岸	御代田町大字御代田字根岸				○		1987年度発掘調査
32	根岸古墳	御代田町大字御代田字根岸			○			1991年度発掘調査
33	十二	御代田町大字御代田字十二				○		1986年度発掘調査
34	前田	御代田町大字御代田字前田			○	○		1985年度発掘調査
35	谷地城	御代田町大字御代田字櫻場					○	
36	下大宮	御代田町大字塩野字下大宮	○					1993年度発掘調査
37	閑屋	御代田町大字塩野字閑屋	○		○			1993年度発掘調査
38	西城西	御代田町大字塩野字西城	○					
39	西城東	御代田町大字塩野字西城	○					
40	大沼	御代田町大字塩野字大沼	○			○		1985年度発掘調査
41	塩野山	御代田町大字塩野字塩野山	○					
42	下ノ平	御代田町大字塩野字下ノ平他	○		○			
43	北原	御代田町大字塩野字北原他	○		○			

り、御代田町において最も古い時期のものとして位置付けられる。

縄文時代の早期の遺跡は、本下荒田遺跡（1）と、滝沢（3）・城之腰（8）・塚田（6）の各遺跡がある。このうち早期前半の遺物は、塚田遺跡から山型文・横円文・格子目文の押型文土器、滝沢遺跡や城之腰遺跡からも横円押型文土器の破片が出土している。また、縄文早期後半では塚田遺跡からいくつかの土坑が検出され、完形復原可能な尖底土器が数個体認められた。このうちほぼ完全に復原された鶴ヶ島台式土器は、国内でも数少ない優品である。このほか本遺跡や塚田遺跡からは田戸上層式土器や、縦条体圧痕文土器の破片が出土した。

縄文時代前期初頭の尖底土器を出土したのは塚田・下弥堂遺跡（6・11）で、その一部は特有な隆帯の特徴から「塚田式」と新たに型式設定された。なお、塚田では竪穴住居址12軒、下弥堂遺跡では竪穴住居址14軒と土坑16基が発見されており、前期初頭の住居が明瞭なかたちで検出されたこと自体が貴重であると共に、「集落」というかたちで検出されたことは重要である。

縄文時代の前期前半の遺跡は、塚田・城之腰・川原田・東荒神・中屋際遺跡などが近接して分布する。塚田遺跡は、関山式土器を出土する竪穴住居址の10数軒を始め数多くの土坑より構成されており、当該期では塚野西遺跡群中最大の集落址である。城之腰遺跡では、関山式と神ノ木式土器を含む竪穴住居址が5軒、東荒神遺跡ではほぼ同時期の竪穴住居址が6軒、中屋際遺跡で1軒、川原田遺跡では関山～諸磯b式までの竪穴住居址が6軒検出されている。

縄文時代中期の集落は、川原田遺跡で竪穴住居跡46軒が検出されている。舌状台地上に形成された集落からは、いわゆる「焼町土器」と言われる縄文中期中葉の土器が大量出土した。このほか中期の集落は、城之腰遺跡で4軒の住居址、また、滝沢・西荒神遺跡（3・5）では中期後半～後期前半の敷石住居址が調査された。なお、西駒込遺跡（20）の中期の住居からは、東北地方に分布する大木8b式に比定される土器が出土しており興味深い。

縄文時代後期では、滝沢遺跡から、滑石のペンドントを出土した獸の焼骨がみられる土坑、耳形土製品を出土した立石風の石を伴う土坑など、墳墓群が検出された。また、同時期の住居も検出されている。なお、縄文時代晩期の資料は、本遺跡西南の小諸市石神遺跡で出土している。

2 弥生時代後期～古墳時代初頭

弥生時代前・中期および後期前半の空白の後、後期末にいたり御代田町でもようやく初期農耕のきざしが見え始めた。本下荒田遺跡と細田遺跡発見の弥生集落がそれで、細田遺跡からは、竪穴住居址10軒、下荒田遺跡では5軒検出されている。従来、当町一帯の高冷地域は、稻作が営まれ始めて間のない弥生時代の遺跡は存在しないと言われてきた。しかし、平成3年の発掘調査によってこの時代の住居址が確認されるにいたった。遺跡付近では水田跡は検出されなかったが、当時の人々が付近の湿地を利用して水稻耕作を行っていたことは十分に推測される。

継続する古墳時代初頭では、塚田遺跡より竪穴住居址6軒からなる集落が検出された。

3 古墳時代後期

御代田町北部馬瀬口・塩野地区には終末期古墳が散見されるが、塚田遺跡でも塚田古墳群（円墳5基・7世紀前半）が確認された。この内1基の周溝には初老馬が埋葬されており、殉葬の可能性が指摘された。一方、細田塚古墳（7）も塚田古墳群に隣接する終末期古墳で、横穴式石室から耳環や直刀の一部が出土した。これら古墳群に対応する集落跡は今のところ未発見である。

4 奈良・平安時代（御牧「塩野牧」と東山道を中心として）

奈良・平安時代の当地域は、延喜式に見られる御牧「塩野牧」が存在したといわれる地域である。また、延喜の官道といわれる「東山道」が、本地域を横断していた可能性もある。

現在、その「塩野牧」の構造とみられ、通称、「駒飼の土堤」と呼ばれる一辺50mの方形状の土堤構築物は、本遺跡の北東約1kmの、塩野山地籍に残り、塩野山遺跡として町の指定史跡になっている。なお、この「塩野牧」の明確な範囲については不明であるが、その入口は、櫛口（ませぐち）ともされた現在の御代田町馬瀬口と推定されることや、駒などのついた牧に由来する地名から考えると、相当広範囲に及んでいたことが推定される。古代寺院の宿坊的な役割が想定された川原田遺跡をはじめ、本遺跡・城之腰・関屋・細田・中屋際・東荒神・西荒神など点在する塩野の平安時代の小集落跡もこの範囲に包括されており、「塩野牧」との係りも想定できる。

さて、延喜の官道といわれる「東山道」が、当時、本地域を横断していたことが推定されている。小諸から東進した「東山道」は、軽井沢・碓井沢を経て群馬へと通するが、そのためには必然的に本地域近隣を通過せねばならない。本地域では、これまで「東山道」そのものの発見には至っておらず、通過ルートについても諸説が提示されたが決着に至っていない。想定されている「東山道」通過ルート説は、大きくは3つあって、それぞれ「小田井ルート」・「馬瀬ロルート」・「塩野ルート」となっている。仮に、「塩野ルート」を探った場合、奈良平安時代の塩野西遺跡群の一連の集落付近を「東山道」が通っていたことになり、その関連も無視できない。

ところで、昭和59年から62年にかけて発掘調査のなされた鎌師屋遺跡群（31～34）では、奈良平安時代の集落が充実して検出された。それに伴って多数の馬骨も出土したことなどから、鎌師屋の集落は「東山道」や「御牧」に関連が深いとする見解がある。かつて一志茂樹氏も、「東山道長倉駅」が存在したのは鎌師屋遺跡群に隣接する中屋敷地籍（小田井ルート）であると推定した経緯がある。鎌師屋遺跡群前田遺跡では、「長倉寺」と墨書きされた土器も検出されており、その関連性も窺わせている。本遺跡以外にもそうした関連性が考えられるところである。

2 層序

下荒田遺跡の基本層序については、第9図に示した。以下にその基本層序を説明する。

I 层 耕作土层

黒褐色(10YR3/3)を呈し、粒子やや粗く、やや粘性あり。大粒のバミス・礫を多く含む。層厚20~30cm前後。

II 层 黑色土层

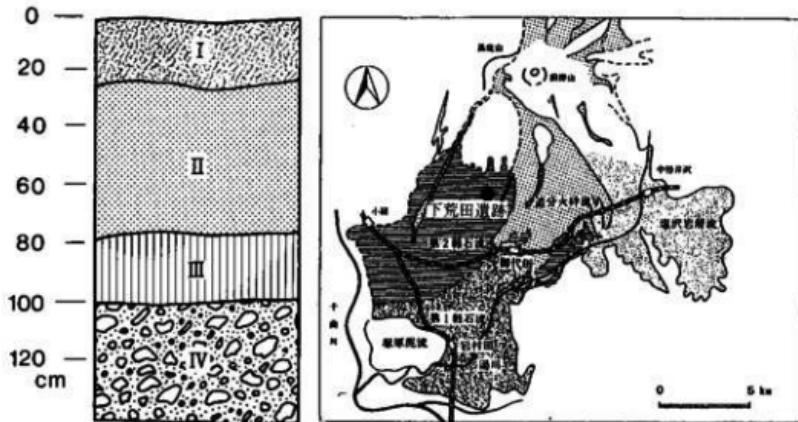
黒色(10YR2/1)。細粒バミスをよく含む。粘性・しまり強い。遺跡の立地する台地は平坦だが、黒色土が厚く層厚0~150cm前後。

三層 漸移層

にふい黄褐色(10YR4/3)。ローム粒子を多く含み始める。細粒バミスをよく含む。層厚20~25cm前後。

IV層 ローム層

にぶい黄橙色(10YR6/4)。浅間山軽石流期の第2軽石流堆積物(約1万1千年前)。径15~30mm前後の軽石を主体的に含み、ところにより拳大の軽石を多く含む。



第9図 下荒田遺跡の基本層序と浅間の火山堆積物の分布

III
遺構
と遺物

1 縄文時代の遺物

下荒田遺跡では早期の土器群を主に、縄文時代の土器が254点出土し、このうち235点を図化した。図化した土器の内訳は、早期211点、前期14点、中期4点、後期6点である。

最も多い早期の土器では早期第I群おそらく田戸上層式に後続しうる土器群を主に、その他、早期第II群鶴ヶ島台式、早期第III群早期末の土器群などが確認された。分布は早期第I群おそらく田戸上層式に後続する土器群、早期第II群鶴ヶ島台式土器、早期第IV群条痕が施された土器群はM-1号溝状造構やH-3号住居址に多く、早期第III群早期末の土器群はD-3、D-11号土坑にみられるが、包含層出土である。積極的に縄文時代早期の遺構からの出土遺物と評価しうるものには確認しえなかった。

以下、縄文時代の土器分類、説明を行う。

(1) 縄文時代早期の土器

1) 早期第I群土器 (第10図1~第15図100)

おそらく田戸上層式に後続しうる土器群を一括した。中部高地における該期の土器様相は判然としないが、本群がそれに相当するものと推定される。その根拠は後で触れる。

總点数は100点を数える。M1やH3に多く分布するが、特にM1に多い。便宜的に1類から8類に分類した。

1類 (第10図1~8、11~15) 口縁部、横方向數条の平行沈線、平行沈線間に連続刺突が施されるものを一括した。その下部に幾何学的な集合沈線、格子目状の沈線などが施されるものもある。

1~3、6は幅2.3mmの平行沈線間に、同一原体により斜方向の連続刺突が施される。1、2、6は斜方向の連続刺突は下から上に刺突される。3は口縁部破片。口端部も斜方向に連続刺突がなされる。口端部と平行沈線間の一列目と二列目の連続刺突では、刺突の方向をそれぞれ異にする。かつ一列目の斜方向の連続刺突は上から下に刺突されるのに対し、二列目のそれは下から上にされる。これはおそらく施文時において、二列目では正位の土器扱いで刺突されたのに対し、一列目では逆位の土器扱いで刺突され、列により製作者が土器を扱う位置を異なるものと推定される。1~3、6は色調は灰褐色などを呈し、胎土には纖維を含む。おそらく同一個体と推定される。5の口縁部破片では外面に沈線と同一原体による斜方向の連続刺突が施されるのに対し、口端部にはそれと刺突の方向を異にして斜方向に連続刺突が施される。内面は条痕調整され、胎

土には纖維を微量に含む。7、11は幅4~6mmの平行な押引沈線間に、幅1.2mmの原体による斜方向の連続刺突が施される。胎土には纖維を微量に含む。4は幅2.3mmの原体で口端部、外面に方向を異にして連続刺突がなされ、連続刺突による区画下に斜方向の平行沈線が施される。13は幅2mm前後の平行沈線間に同一原体で斜方向に連続刺突がなされ、その下部では幾何学的な集合沈線が施される。外面の連続刺突では3と同様に、一列目と二列目以下で刺突の方向、製作者の刺突時の土器扱いの位置を異にし、かつ口端部と一列目の連続刺突もその方向を異なる。色調はにぶい黄褐色、胎土には纖維を微量に含む。12、14、15は平行沈線間に斜方向の連続刺突、その下部に格子目状の沈線が施される。15の連続刺突では同一列中において刺突の方向を異なる。14、15は内外面条痕調整の後にナデ、色調はにぶい赤褐色、胎土には纖維を含む。同一個体となろう。

1類の類似資料をあえて想定するならば、複列の斜方向の連続刺突という点では栃木県出流原小学校内遺跡、茨城県石山神遺跡出土資料が挙げられる。ただそれらが角頭状工具で横から刺突されるのに対し、本遺跡1類ではペン先状工具で下から上へ、また一部上から下へ刺突される。また胎土、色調も異なる。纖維は本類の方が多く含まれる。

2類 (第10図9、10、第11図16、29) 口縁部、横方向の隆帯に連続刺突が施されるものを一括した。2条の隆帯間に押引沈線が施されるもの、隆帯の下部に集合沈線が施されるものもある。

9は横方向の隆帯に斜方向で下から上へ連続刺突がなされる。また隆帯の上部区画にも連続刺突がなされる。色調は黄褐色、胎土には纖維を含む。16は2条の横方向の隆帯に斜方向の連続刺突がなされ、隆帯間に小波状の押引沈線が施される。小波状の押引沈線は田戸上層式からの系統を想定させる。隆帯上の連続刺突では隆帯により刺突の方向を異なるが、いずれも下から上になされる。隆帯の下部は条痕調整の後にナデられる。色調は黒色、胎土には纖維を含む。29は横方向の隆帯上に連続刺突がなされ、その下部に渦巻状の集合沈線、小波状の沈線が施される。小波状の沈線は渦巻状の集合沈線の後に施され、施文帶の区画、また隆帯との間の無文帶との区画の役割を果たす。この小波状の区画沈線も田戸上層式からの系統を想定させる。内外面条痕調整がなされ、色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には纖維を微量に含む。

1類が平行沈線間に連続刺突がなされるのに対し、本類では横方向の隆帯上に連続刺突がなされる。連続刺突が斜方向にペン先状工具でなされる点は共通する。本類の隆帯と平行沈線を比較検討した場合、本類の隆帯が発達している点を考慮するとそこに時間差による型式学的連続性があるとは考えにくい。むしろ同時期のものと考えるべきであろう。

3類 (第11図17~19、24) 縦方向、横方向の隆帯による区画内に集合沈線文などが施されるものを一括した。

17は縦方向のナゾリ状の沈線と微隆起線による区画内に曲線状の集合沈線、19、24は縦方向の微隆起線や隆帯による区画内に集合沈線が施される。17、24は集合沈線施工後に沈線区画や隆帯上に連続刺突が、また19は微隆起線上に連続刺突がなされる。19は内外面条痕調整の後にナデられる。17、19、24とも胎土に纖維を微量に含む。18は縦方向のナゾリ状の沈線と横方向の押圧された隆帯による区画内に曲線状の集合沈線、斜方向の集合沈線が施される。集合沈線施工後、縦区画のナゾリ状の沈線に沿って連続刺突がなされる。18は色調がにぶい褐色を呈し、胎土には纖維を微量に含む。

本類は曲線状の集合沈線が施される点を考慮すると、2類の隆帯下部の渦巻状の集合沈線や4類の渦巻状や曲線状の集合沈線との類似性が認められる。

4類 (第11図20~23、26~28、第12図30~34、36~48、第13図49、51~71、第14図72~79、82、86~88) 沈線が施されるものを一括した。1~3類の破片の可能性の高いものも含む。

20、28は幅1mm前後の曲線状の細沈線が施される。20は段をもつ。28は口縁部破片で口端部に方向を異にした斜方向の刺突がなされる。20は内外面とも条痕調整された後にナデられる。20、28とも胎土には纖維を含む。細沈線の土器は関東方面では神奈川県田戸遺跡出土資料など田戸上層式にみられる他、神奈川県子母口貝塚出土資料では口端部に絡条体が押圧されたものもあり、子母口式でも確認される。

21~23、26、27は幅1.7~2.1mmの曲線状の集合沈線が施される。22、27は内外面条痕調整、26は内外面条痕調整の後にナデされる。21~23、26、27とも胎土には纖維を含む。30は2条の平行沈線が施され、口端部に斜方向の刺突がなされる。色調は灰褐色を呈し、胎土には纖維を微量に含む。31~34は幅1.8~2.5mmの原体による集合沈線が施される。いずれも胎土には纖維を微量に含む。36は幅1mm前後の原体と幅2.2mmの原体で幾何学的な集合沈線が施される。外面には条痕が施され、色調は褐灰色を呈し、胎土には纖維を含む。37、43は斜方向に幅1mm前後の集合沈線が施される。37は外面条痕調整がなされ、内面は条痕調整の後にナデされる。38、39は横方向に幅1.7mm前後の平行沈線が施される。38は口縁部付近の破片となろう。38、39とも胎土に纖維を含む。40は内外面条痕調整される。41は2条の沈線が施される。42は幅1.5mm前後の幾何学的な集合沈線が施される。外面は条痕調整がなされ、色調褐灰色、胎土には纖維を含む。45、48は幅2.2mm前後の幾何学的な集合沈線が施される。外面は条痕調整され、内面は条痕調整の後ナデされる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には纖維を含む。同一個体となろう。44は幅2.2mm前後の横方向の集合沈線と連続刺突が、47は幅2.2mm前後の横方向の集合沈線が施される。外面は条痕調整、もししくはその後にナデ調整、内面は条痕調整の後にナデされる。色調は赤褐色を呈し、胎土には纖維を含む。同一個体となろう。44、47と45、48が同一個体となる可能性もある。44は本類へ含む。

べきではないが、便宜的に含めた。

53、55、58、65、68、69、71は幅1mm前後の沈線が斜方向や格子目状に施される。内外面とも条痕調整、もしくは条痕調整の後にナデられる。色調はにぶい赤褐色やにぶい褐色を呈し、胎土には繊維を含む。これらは同一個体となろう。49、52、54、59~61、66、67、70は幅1mm前後の沈線が、56、57、62、64は幅2mm前後の沈線が斜方向や格子目状に施される。外面は条痕調整、もしくは条痕調整の後にナデられ、内面は61、66は条痕調整、62、70は条痕調整の後にナデされる。胎土にはいずれも繊維を含むが、66は石英や白色鉱物を多量に含む。51は2条の沈線が横方向に施される。63は幅1mm前後の沈線と2mm前後の沈線が斜方向に施される。内外面条痕調整の後にナデされる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を含む。

72~78は幅8mmの角頭状の工具で格子目状の沈線が施される。原体は木口であろうか。77~75、78は内外面条痕調整がなされる。76、77は外面条痕調整、内面調整は不明。色調はにぶい赤褐色、にぶい褐色を呈し、胎土には繊維を含む。82は縱方向、斜方向に沈線が施され、外面条痕調整される。

86、88は縄文地文に幅2.5mmの小波状の沈線が施される。86、88とも縄文原体はLRである。88では2条の小波状の沈線間に条痕調整の後にナデで磨消される。86、88とも胎土に繊維を含む。

5類 (第11図25、第12図35、第14図80、81、83~85) 押引沈線が施されるものを一括した。

25、80、81は幅2.8~3.0mmで曲線状の集合する押引沈線が施される。80は内外面に条痕調整、81は外面条痕調整、内面は条痕調整の後にナデられる。色調は85は黒褐色、80、81はにぶい赤褐色を呈し、いずれも胎土には繊維を含む。35は幅2.0mmの集合する押引沈線が施される。胎土には繊維を微量に含む。81は微隆起線上の連続刺突が僅かに確認されるが、便宜的に本類に含めた。83は2条の平行沈線間に小波状の押引沈線が施される。沈線と押引沈線の幅はいずれも2.5mmで、同一原体による施文と推定される。内外面は条痕調整の後にナデされる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維をふくむ。神奈川県宮ヶ瀬遺跡群ナラサス遺跡、千葉県城ノ台遺跡出土の田戸上層式に同様の意匠の沈線が施される例はあるが、83では内外面の条痕調整が確認される。ちなみに長野県御代田町塚田遺跡出土の田戸上層式では外面条痕調整は発達するが、内面条痕調整は確認されない。内面条痕調整は後続型式との連続性を考慮すると、より後出する要素と推定される。83はその意匠では田戸上層式の系統をひくが、それに後続する資料の可能性が高い。

84、85は幅3mmの横方向の平行する押引沈線が施され、その下部は幅1mmの格子目状、もしくは鋸歯状となる沈線が施される。外面は条痕調整の後にナデられ、内面は条痕調整される。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を含む。同一個体となろう。下部の沈線は4類の格子目状や斜方向の沈線、また1類の連続刺突の下部の格子目状の沈線と意匠、施文具等が共通する。84、

85が1類、4類と同時期となる可能性が高い。

6類 (第15図91、92) 刺突が施されるものを一括した。

91、92は連続刺突が施される。91、92とも外面に条痕調整がなされ、91は内面も条痕調整される。色調は91はにぶい赤褐色、92はにぶい褐色を呈し、胎土には繊維を含む。

7類 (第13図50、第14図87、第15図93~99) 刺突と沈線が施されるものを一括した。

50は幅2mm前後の格子目状の沈線と刺突が施される。刺突の施文具は竹管であろう。内面は条痕調整の後にナデられる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には繊維を含む。沈線は4類の格子目状の沈線と施文具も類似する。87は縄文地文に横方向、曲線状の沈線や連続刺突が施される。縄文原体は判然としないが、RLであろうか。横方向の沈線区画以下ナデ消される。内面は条痕調整される。色調は褐色、胎土には繊維を含む。93は横方向の沈線区画の上部に連続刺突が施され、その下部には縄文が施される。縄文はLR縦方向に施文、沈線の後に磨消され、連続刺突が施される。内面は条痕調整される。色調は褐色、胎土には繊維を含む。94、95は斜方向の沈線と連続刺突が施される。色調は94はにぶい赤褐色、95は黒褐色を呈し、いずれも胎土には繊維を含む。96は押引沈線と刺突が施される。内外面は条痕調整がなされ、色調がにぶい橙色、胎土には繊維を含む。97は小波状の沈線と連続刺突が施される。小波状の沈線は4類、5類のそれと同一系統のものと想定される。色調は灰褐色を呈し、胎土には繊維を含む。98は2列の連続刺突による区画の上部に縦方向、斜方向に幅3mmの沈線が施される。連続刺突は沈線施文の後に縦方向、上から下に施される。沈線や刺突は同一原体のヘラ状工具でなされる。内外面は条痕調整がなされ、色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には繊維を含む。文様構成、ヘラ状工具による施文の点では茅野市判ノ木山西遺跡出土の早期第III類、第IV類土器を彷彿させるが、「判ノ木山西遺跡早期第III類・第IV類」では胎土に金雲母を多量に含むなどの差異点もある。99は格子目状、もしくは山形状となる沈線と円形竹管による刺突が施される。内外面とも条痕調整がなされ、胎土には繊維を含む。

8類 (第15図100) 短沈線が施されるものである。

100は口縁部付近に短沈線が施される。口端部は斜方向に連続刺突がなされる。外面は縦方向、斜方向などに条痕調整がなされる。内面は横方向などに条痕調整された後にナデされる。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には繊維を含む他、砂粒、小石が多く含まれる。

2) 早期第Ⅱ群土器 (第20図204~208)

鶴ヶ島台式土器を一括した。総点数は5点である。

204は微隆線による区画に連続刺突で充填され、区画の交差点は円形竹管による刺突が施される。内外面は条痕調整され、色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には纖維を含む。205はおそらく頸部となろう。内面は条痕調整される。206、207は有段段上に連続刺突が施される。外面は条痕調整される。色調は206はにぶい赤褐色、207は灰褐色を呈し、胎土には纖維を含む。208は沈線による区画内に押引沈線で充填され、沈線上には円形竹管による刺突が施される。区画の沈線と押引沈線の幅は2mmで、同一原体によるものと推定される。色調は褐灰色を呈し、胎土には纖維を含む。

3) 早期第Ⅲ群土器 (第20図209~211)

早期末の土器群を一括した。総点数は3点を数える。

209は有段、段による区画の上部に鋸齒状に絡条体が押圧される。絡条体は1段Rで、原体幅は7.2mmである。内外面条痕調整される。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には纖維を含む。

210は口縁部付近に縱方向、斜方向に絡条体が押圧される。外面は条痕調整されるが、絡条体押圧後、更に条痕調整される。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には纖維を含む。211は単節繩文LRが横方向に施される。内面はナデ調整されるが、一部条痕調整の痕跡らしきものが認められる。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には纖維を含む。

4) 早期第Ⅳ群土器(第14図89、90、第16図101~112、第17図113~140、第18図141~168、第19図169~203)

条痕が施される土器群などを一括した。条痕調整の後にナデ調整された土器、ナデ調整された無文土器を含む。また89、90の繩文が施されるものも便宜的に含めた。総点数は121点を数える。M1やH3に多く分布する。その数量比、分布を考慮すると、本群の大半は早期第Ⅰ群田戸上層式に後続する土器群に組成する、つまり第Ⅰ群に分類されるべきと考えるが、早期第Ⅱ群鶴ヶ島台式土器、第Ⅲ群早期末の土器群に組成するものも若干は含まれる可能性がある。現状ではそれらを弁別することは困難であり、よって第Ⅳ群とする分類区分を設けた。

89は繩文LR、90は繩文RLが横方向に施される。外面は条痕調整、内面は89は不明、90は条痕調整される。色調は89はにぶい赤褐色、90はにぶい黄褐色を呈し、胎土では89は纖維を微量に含む他、白色鉱物、雲母、石英を多く含む。90も胎土に纖維を含む。繩文施文の土器については中部高地では「古屋敷遺跡第Ⅳ群」から茅山下層式まで確認される他、本遺跡第Ⅰ群でも確認される。また神奈川県夏島貝塚、田戸遺跡では田戸上層式に組成している。

101~112、115は内外面条痕調整される。101は口縁部。口端部も条痕調整される。114、116~118、120、121、123~133、135~137、139~141、143~145、150~154、157、172は外面は条痕調整、内面は条痕調整の後にナテ調整、またはナテ調整される。122、134、142、146~149、155、156、158~171、173~191、193~203は外面条痕調整の後にナテ調整、擦痕調整され、内面は条痕調整の後にナテ調整、または擦痕調整される。

前述の如く、塚田遺跡出土の田戸上層式では外面の条痕調整が発達するが、内面の条痕調整は確認されない。一方、本群では内面の条痕調整、またはナテ調整前の条痕調整が確認される。

(2) 繩文時代前期の土器 (第21図212~235、214、217は除く)

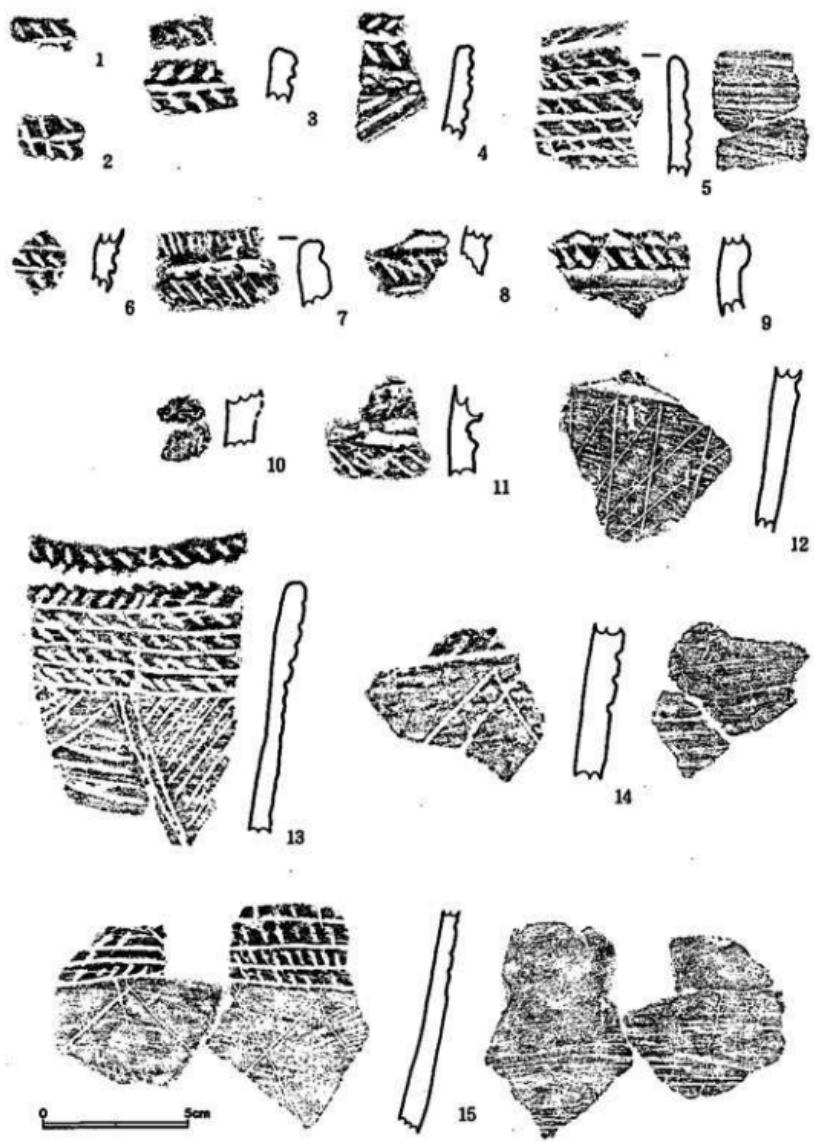
前期の土器が12点弥生・平安時代住居址、土坑、遺構外などから出土した。いずれも胎土に鐵維を含む。212・221・222・224は縄文L RとR Lによる羽状縄文を構成する。また、細片のため羽状縄文となるかわからないが、218・219には縄文R L、220・223には縄文L Rが施されている。このほか、213・215には撲糸文、225には斜格子状の沈線が施されている。また、先端が四角い口唇部に縄文の連続押圧を有し、口縁部以下に縱走する縄文を持つ214は東北地方に類例が多いことが指摘されており、また、217風化のため、原体が不明確だが絡条体圧痕文と考えられ、早期末に位置付けられるものかもしれない。

(3) 繩文時代中後期の土器 (第21図226~235)

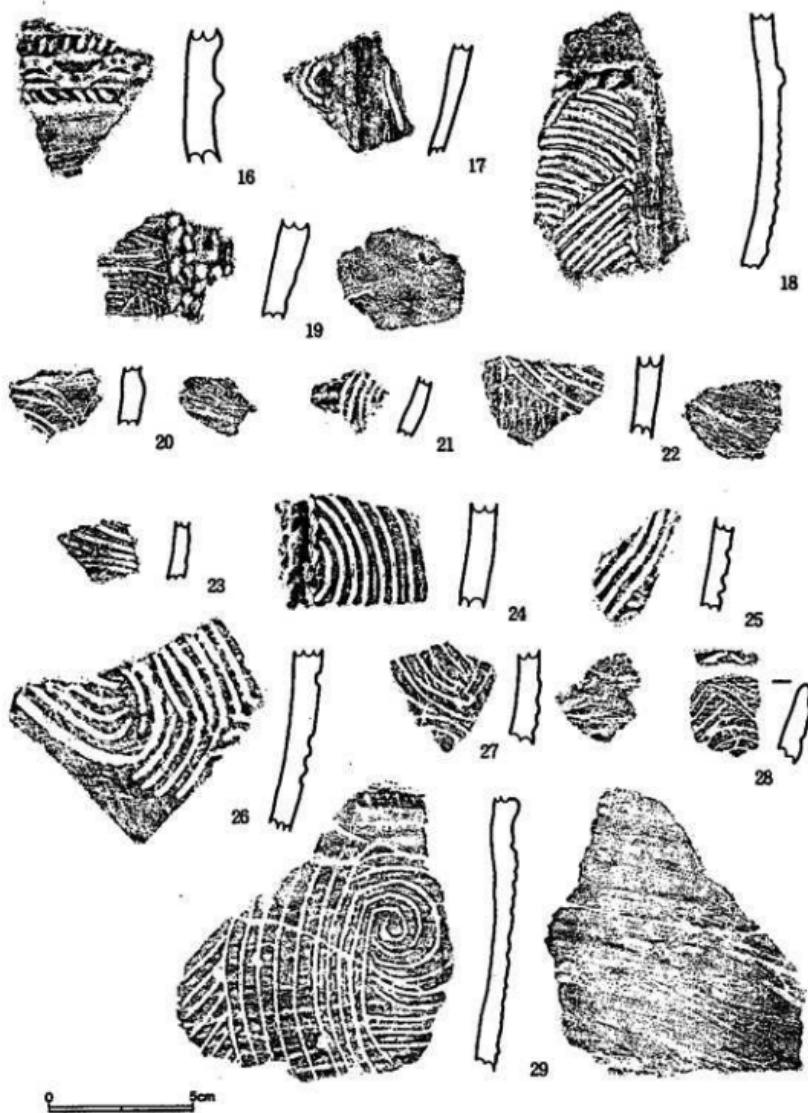
ほとんどが採集資料で縄文中期後半は4点(226~229)、後期前半は6点(230~235)ある。中期後半の226・227は加曾利E式、228は唐草文系土器である。後期前半の230~235は堀之内1式の有文深鉢である。

(4) 繩文時代の石器 (第22図)

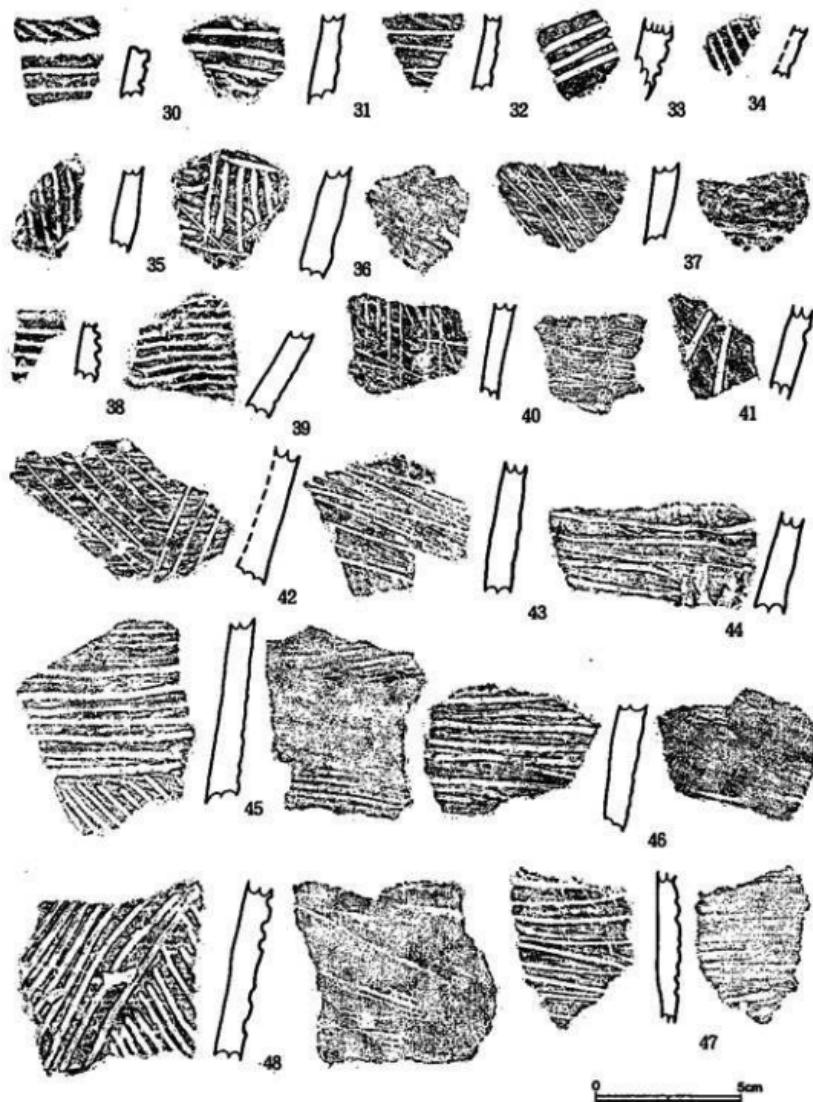
1・2は打製石斧の欠損品、3は打製石匙、4~6は打製石鎌である。



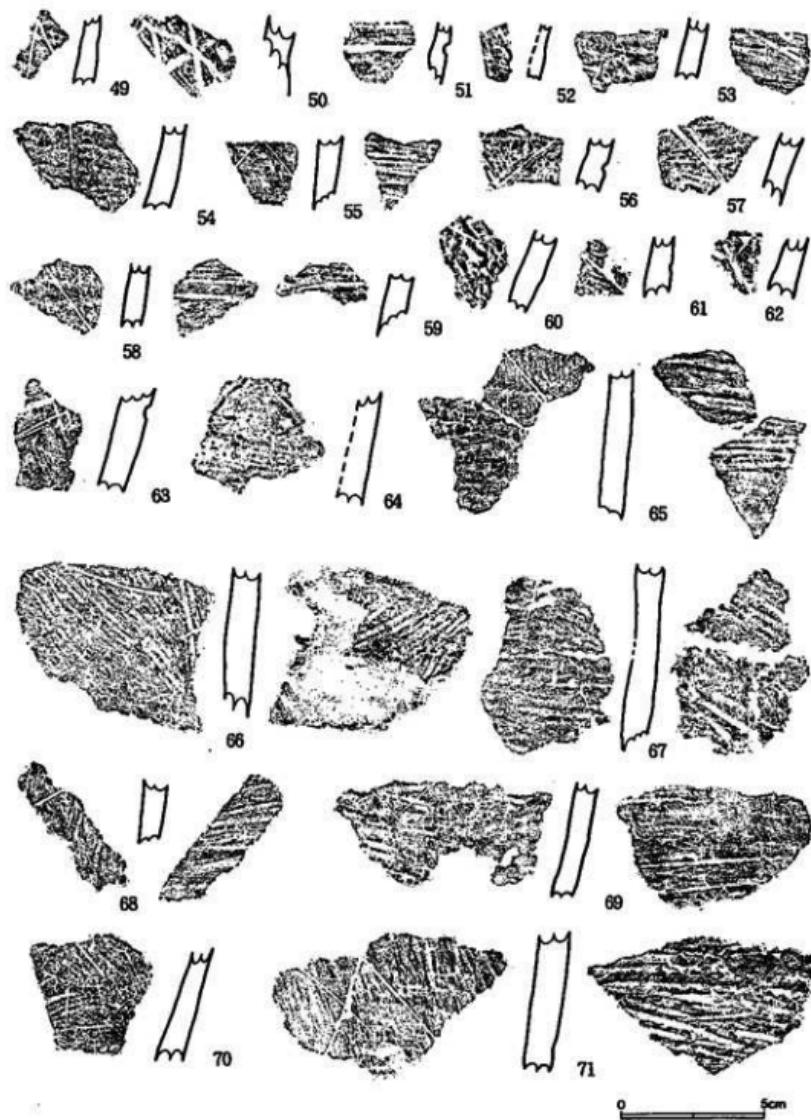
第10図 早期第1群土器 1・2類 (1~14=1:2 15=1:3)



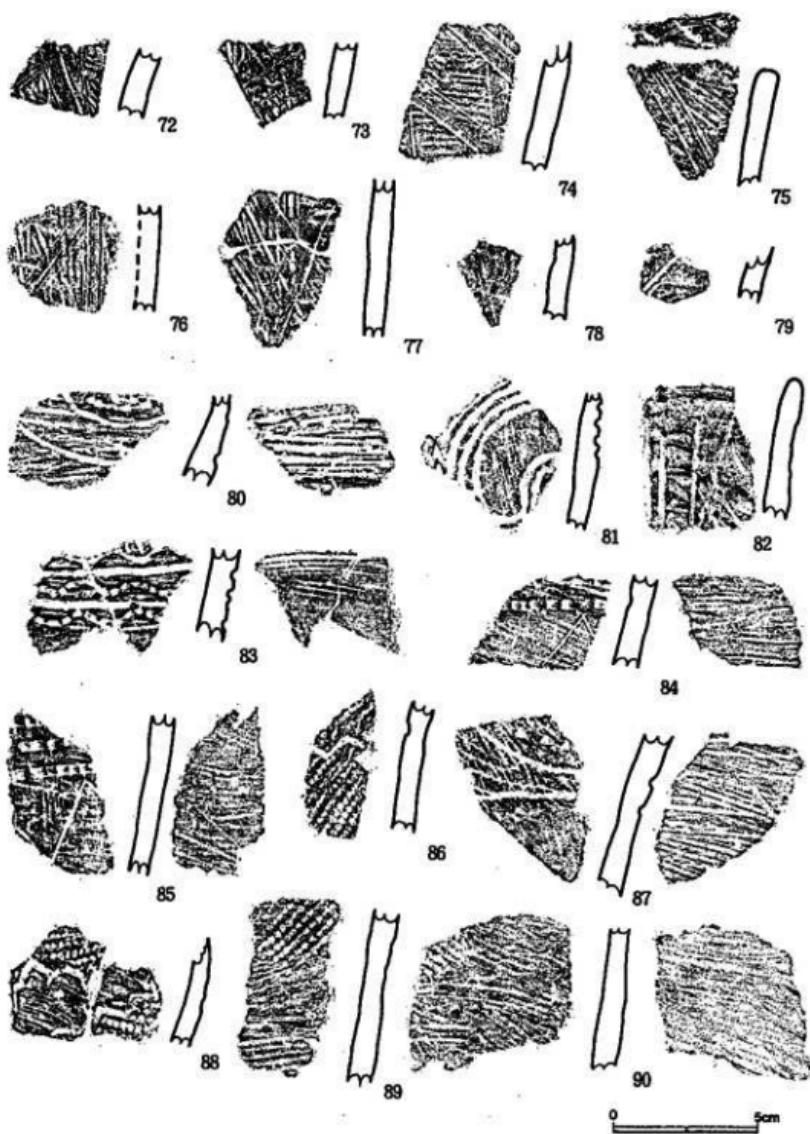
第II圖 早期第I群土器 2・3・4・5類 (S = 1 : 2)



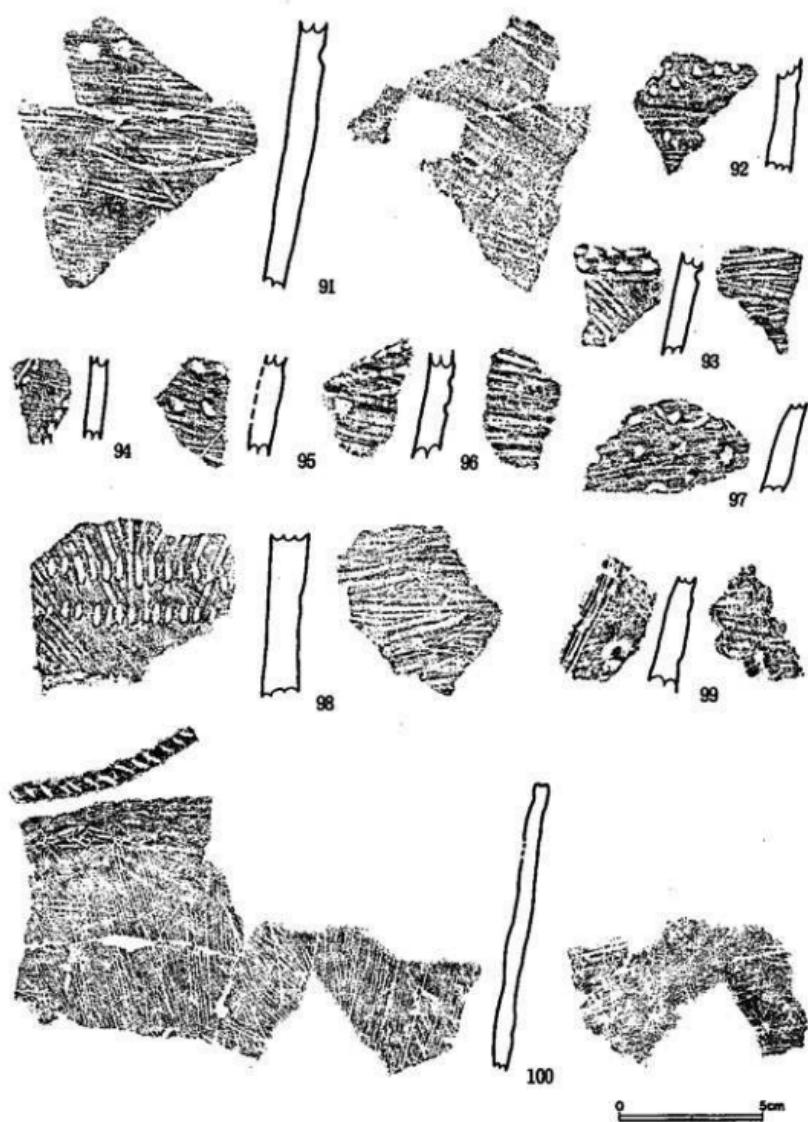
第12図 早期第1群土器 4・5類 (S = 1 : 2)



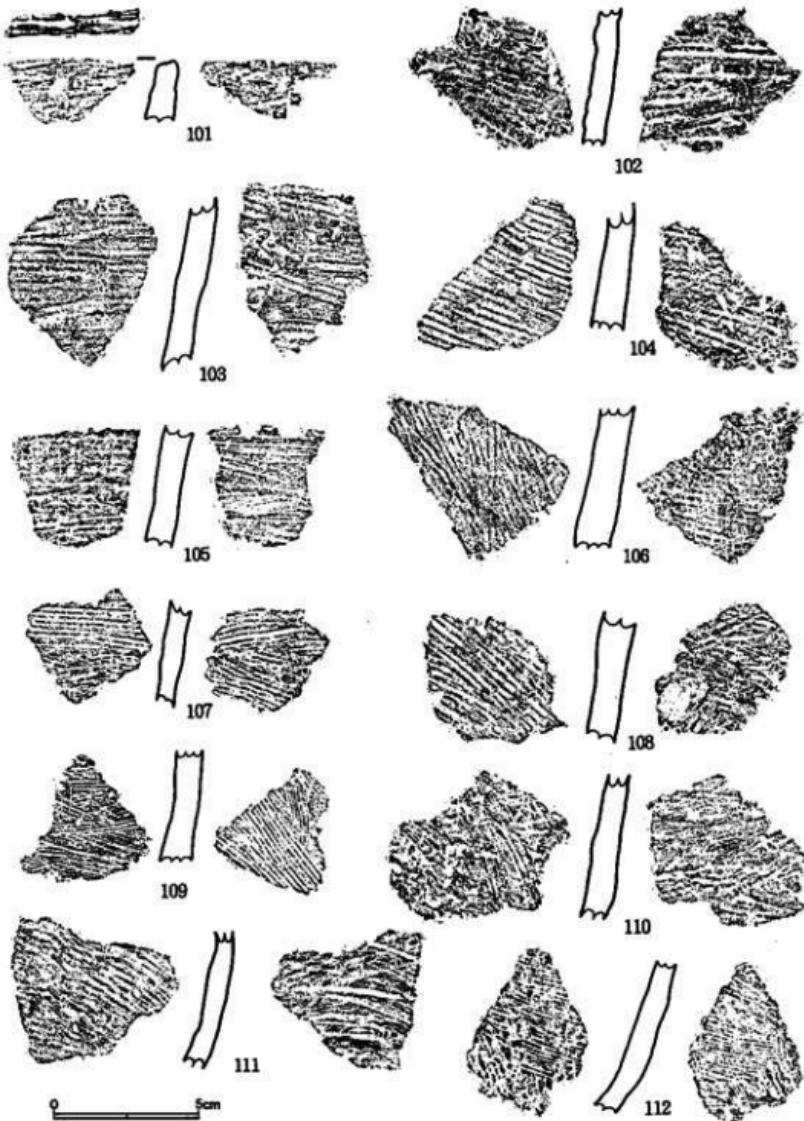
第13図 早期第Ⅰ群土器 4・7類 (S = 1 : 2)



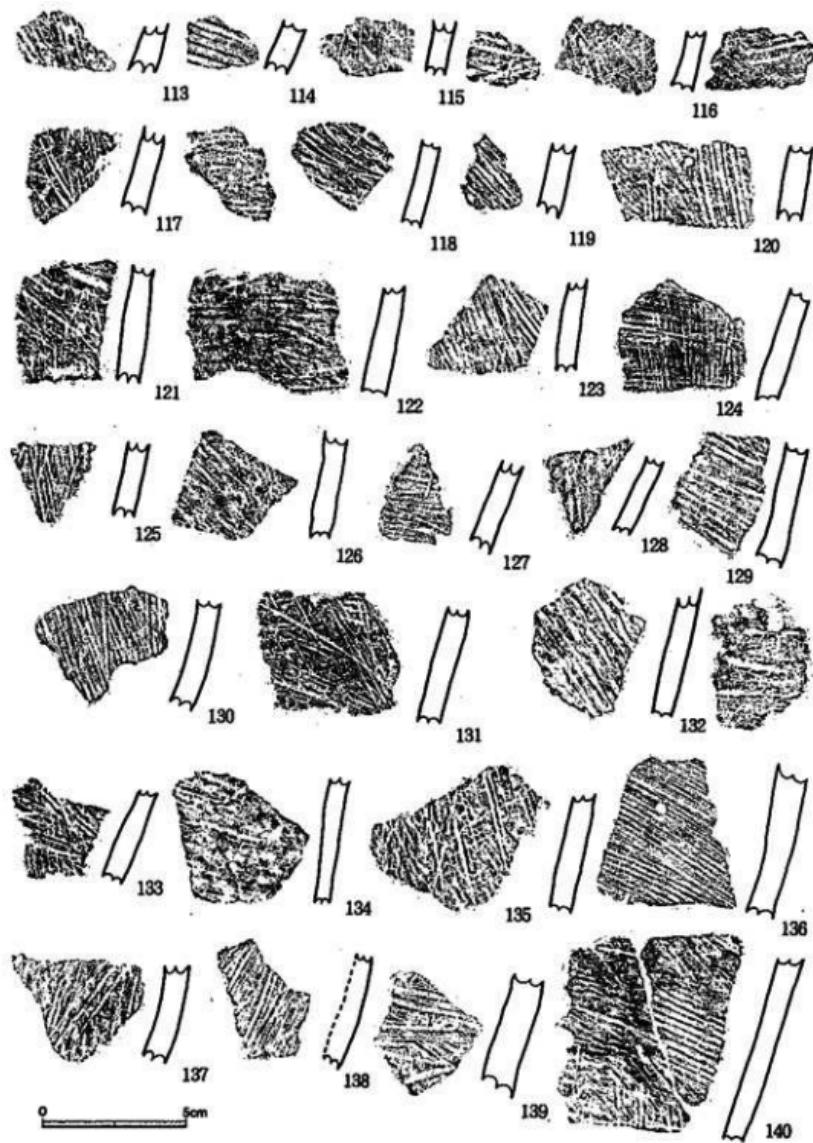
第14図 早期第I群土器4・5・7類(72~88)、IV群土器(89・90)(S=1:2)



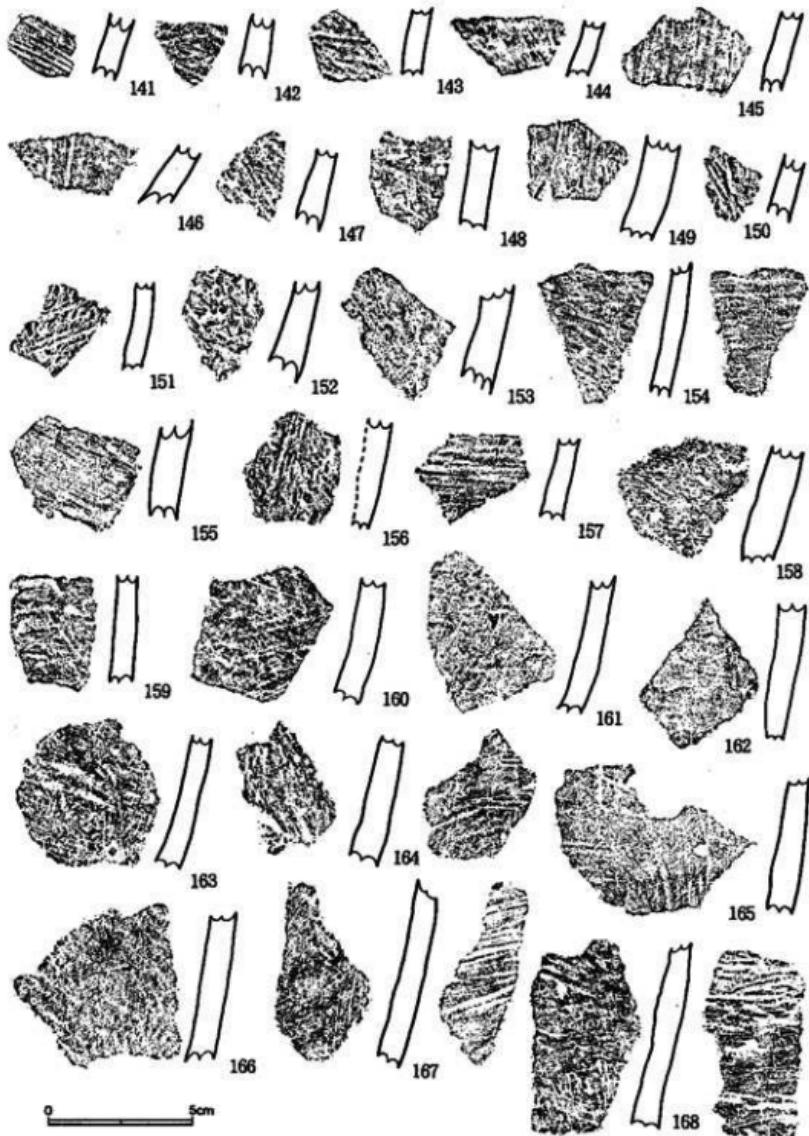
第15図 早期第I群土器6・7・8類 (91~99 S = 1 : 2 100 S = 1 : 3)



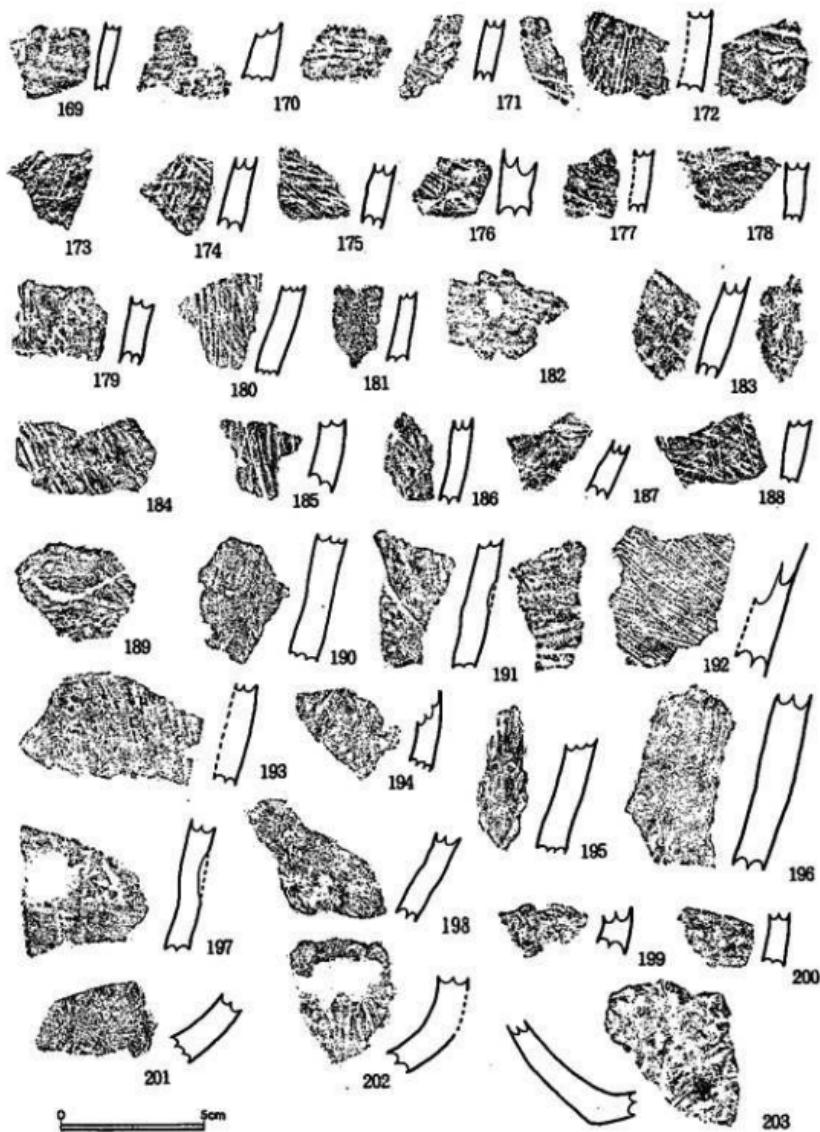
第16図 早期第IV群土器 ($S = 1 : 2$)



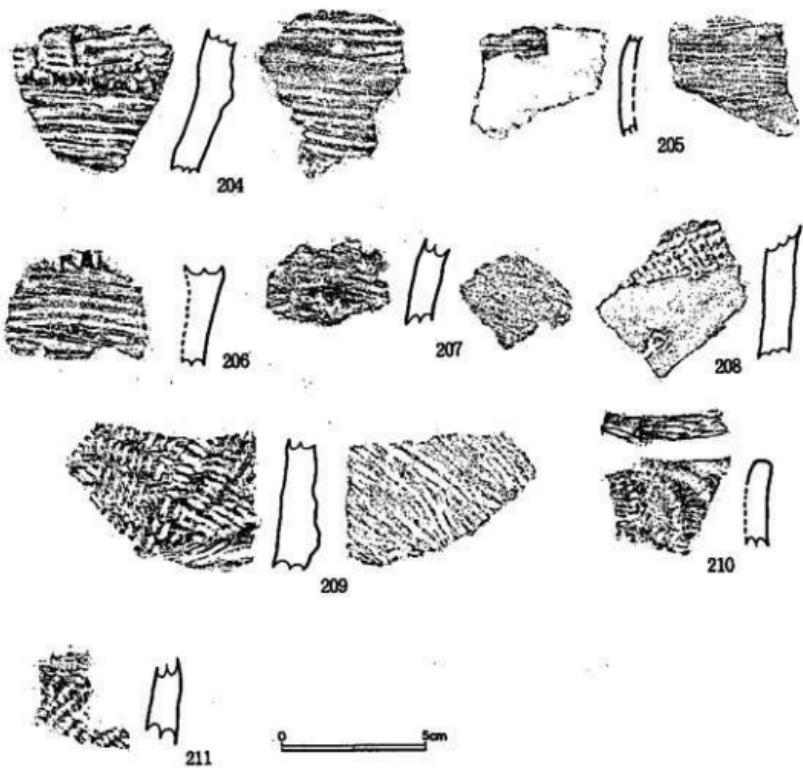
第17図 早期第IV群土器 ($S = 1 : 2$)



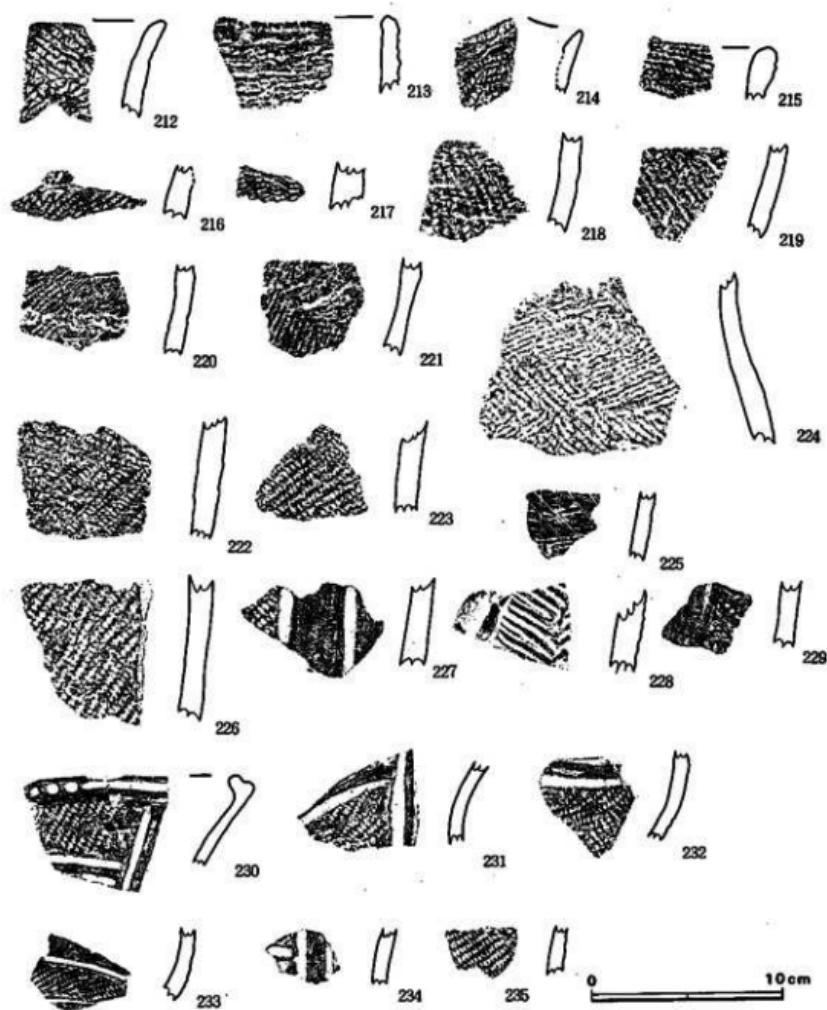
第18図 早期第IV群土器 ($S = 1 : 2$)



第19図 早期第IV群土器 ($S = 1 : 2$)



第20図 早期第II、III群土器 ($S = 1:2$)



第21図 前、中、後期の土器 (1 : 3)

第3表 繩文早期土器一覧表

部品番号	器種	部 位	出 収	器形 および 文様	調 整 (内面)	動 土	織錆	色 調		出 土 位 置	備 考
								外 面	内 面		
1	深鉢	胴上部	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。	-	白色粘物 器母 石英	微量	灰褐色 2.5YR 4/2	赤褐色 10YR 5/4	普	M-1
2	深鉢	口縁部(胴上)	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。	-	白色粘物 器母 石英	微量	灰褐色 SYR 4/2	-	普	M-1
3	深鉢	口縁部	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。 口端部に斜め方向の刺突。口端部、平行 沈縫間に列ごとに刺突の方向が異なる。	不明	白色粘物 器母 石英	微量	灰褐色 SYR 4/2	にじむ赤褐色 SYR 4/4	普	M-1
4	深鉢	口縁部	-	横方向の平行沈縫間に連続刺突、その下 位、斜方向に斜め式。	ナデ	白色粘物 器母 石英	微量	黑色 10YR 2/1	にじむ赤褐色 SYR 5/4	普	M-3 1区
5	深鉢	口縁部	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。 口端部に斜方向の連続刺突。口端部と平 行沈縫間に刺突方向が異なる。	未底調整	白色粘物 器母	微量	にじむ赤褐色 2.5YR 4/4	にじむ赤褐色 2.5YR 4/4	普	M-1
6	深鉢	口縁部(胴上)	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。	不明	白色粘物 器母 石英	微量	灰褐色 SYR 4/2	にじむ赤褐色 SYR 4/4	普	M-1
7	深鉢	口縁部	-	横方向の押引平行沈縫間に斜方向の連続 刺突。 口端部に連続刺突。	ナデ	白色粘物 器母	微量	にじむ赤褐色 2.5YR 4/4	にじむ赤褐色 2.5YR 4/4	普	M-1
8	深鉢	口縁部(胴上)	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。	-	白色粘物 器母 赤色蚊子	微量	にじむ赤褐色 10YR 5/3	にじむ褐色 7.5YR 5/3	普	M-1
9	深鉢	胴上部	-	幅5mmの隆帯上に斜方向の連続刺突。 隆帯上区間に連続刺突。	-	白色粘物 器母 小石 赤色蚊子	微量	灰褐色 2.5Y 5/3	にじむ黄色 2.5Y 6/3	普	M-1
10	深鉢	胴上部	-	隆帯。	ナデ	白色粘物 器母 小石 石英	微量	灰褐色 2.5Y 4/1	灰褐色 2.5Y 4/1	普	M-3 I・II 区
11	深鉢	胴上部	-	横方向の平行引沈縫間に連続刺突。	ナデ	白色粘物 器母 石英	有	にじむ赤褐色 SYR 4/4	にじむ赤褐色 SYR 5/4	普	M-1
12	深鉢	胴 部	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。 その下位 指子目状の沈縫。 外因、条痕調整の様ナデ。	ナデ	白色粘物 器母 石英	有	褐色 7.5YR 4/4	灰褐色 7.5YR 4/4	普	M-1
13	深鉢	口縁部	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。 口端部に斜方向の連続刺突。斜め式状の 混合沈縫。	ナデ	白色粘物 器母 赤色蚊子	微量	にじむ赤褐色 10YR 5/3	にじむ赤褐色 SYR 5/4	普	M-1
14	深鉢	胴 部	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。 その下位指子目状の沈縫。 外因、条痕調整の様ナデ。	未底調整 の後 ナデ	白色粘物 器母 小石	有	にじむ赤褐色 SYR 5/4	にじむ赤褐色 2.5YR 4/4	普	M-1 ④と同一個体
15	深鉢	胴上部	-	横方向の平行沈縫間に斜方向の連続刺突。 その下位、指子目状の沈縫。 外因、条痕調整の後、ナデ。	未底調整 の後 ナデ	白色粘物 器母 小石	有	にじむ赤褐色 SYR 5/4	にじむ赤褐色 2.5YR 4/4	普	M-1 ④と同一個体
16	深鉢	胴上部	-	幅5mm前後の横方向の隆帯上に斜方向の 連続刺突、隆帯間に波状の押引沈縫。 外因、条痕調整の様ナデ。	ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色蚊子	微量	黑色 2.5Y 2/1	黑褐色 10YR 3/1	普	M-1
17	深鉢	胴 部	-	ナゾリ状の沈縫と隆起線。刺突曲線状 の混合沈縫。	ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色蚊子	微量	にじむ赤褐色 10YR 5/4	黑褐色 10YR 3/1	普	M-1
18	深鉢	胴 部	-	ナゾリ状の沈縫と隆起線。連続刺突を もつ隆帯による区間に斜方向、曲線状 の混合沈縫。	ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色蚊子	微量	にじむ褐色 7.5YR 5/4	黑褐色 10YR 3/1	普	M-1

第4表 編文早期土器一覧表

番号 番号	器種	部 位	基 本	器形 および 文様	質 地 (内面)	胎 土	施 装	色 調		出 土 地 借	備 考
								外 面	内 面		
19	器体	脚 部	-	橢円形板上に斜尖。 沈鉢。	条痕調整の後ナデ。	白色粘物 器母 小石 石英	微量	褐色	黒褐色	香	M-1
20	器体	脚 部	-	底面1mm前後の細沈鉢。 有孔。	条痕調整の後ナデ。	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	微量	灰褐色	褐色	香	M-1
21	器体	脚 部	-	曲線状の集合沈鉢。	ナデ	有	灰褐色	褐色	香	H-3	
22	器体	脚 部	-	曲線状の集合沈鉢。 外縁、条痕調整。	条痕調整	白色粘物 小石 器母 石英 赤色粒子	微量	にぼい赤褐色 SVR 5/4	にぼい褐色 SVR 5/4	香	M-1
23	器体	脚 部	-	集合沈鉢。	条痕調整の後 研磨ナデ	有	灰褐色	黑色	香	M-1	
24	器体	脚 部	-	輻方向の隆起に斜方向の斜尖。 曲線状の集合沈鉢。	研磨ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	有	にぼい赤褐色 2.SVR 4/4	にぼい褐色 7.SVR 3/3	香	表揚
25	器体	脚 部	-	曲線状の集合沈鉢。	ナデ	白色粘物 器母 小石 石英	有	灰褐色	にぼい赤褐色 SVR 5/4	香	H-3
26	器体	脚 部	-	曲線状の集合沈鉢。	条痕調整の後ナデ	白色粘物 器母 小石	有	にぼい黄褐色 10YR 5/3	にぼい黄褐色 10YR 6/3	香	H-3
27	器体	脚 部	-	曲線状の集合沈鉢。 外縁、条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	有	にぼい赤褐色 SVR 5/4	にぼい赤褐色 2.SVR 4/4	香	M-1
28	器体	口縁部	-	幅1mm前後の細沈鉢。 口縁部、斜尖。	ナデ	白色粘物 器母 小石	有	にぼい黄褐色 10YR 5/3	にぼい褐色 7.SVR 6/3	香	H-2
29	器体	脚 部	-	輻方向の隆起に直角斜尖、波状の波紋による凹凸、毛巻状と幾何学的な集合沈鉢外縁条痕。	条痕調整	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	微量	にぼい赤褐色 2.SVR 4/4	黒色 7.SVR 2/1	香	M-1
30	器体	口縁部	-	平行沈鉢。 口縁部に斜方向の直角斜尖。	ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	微量	灰褐色	褐色	香	M-1
31	器体	脚 部	-	沈鉢。	ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	微量	褐灰色	褐色	香	M-1
32	器体	脚 部	-	沈鉢。	条痕調整の後ナデ	白色粘物 器母 小石	微量	にぼい褐色 7.SVR 5/3	にぼい褐色 SVR 5/4	香	M-1
33	器体	脚 部	-	集合沈鉢。	-	白色粘物 器母 小石 石英	微量	にぼい褐色 7.SVR 5/3	褐灰色	香	M-1
34	器体	脚 部	-	集合沈鉢。	-	白色粘物 器母 小石 石英	微量	黒褐色	-	香	M-1
35	器体	脚 部	-	幾何学的の集合沈鉢。 外縁、条痕調整。	-	白色粘物 器母 小石 石英	微量	にぼい褐色 7.SVR 5/3	褐色	香	M-1
36	器体	脚 部	-	幾何学的の集合沈鉢。 外縁、条痕調整。	ナデ	白色粘物 器母 石英 赤色粒子	有	褐灰色	灰褐色	香	M-1

第5表 繩文早期土器一覧表

井田 番号	基種	部 位	法 量	器形 および 文様	調査 (内面)		色 調	出土 位 置	備 考
					胎 土	織錆			
37	縦体	肩 部	-	集合沈縫。 外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	有 10YR 7/3	に近い黄褐色 10YR 7/3	昔 M-1
38	縦体	肩上部	-	沈縫。	ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	微黄 7.5YR 5/1	同灰色 7.5YR 5/1	昔 Y-2 III区
39	縦体	肩 部	-	集合沈縫。	ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	有 7.5YR 5/3	に近い褐色 2.5YR 6/4	昔 備考
40	縦体	肩 部	-	沈縫。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	微黄 7.5YR 4/3	灰褐色 7.5YR 4/2	昔 H-3 II区
41	縦体	肩 部	-	沈縫。	ナデ	白色粘物 器母 小石	有 7.5YR 5/4	に近い褐色 10YR 5/3	昔 H-1
42	縦体	肩 部	-	幾何学的の集合沈縫。 外面、条痕調整。	-	白色粘物 小石 雷紋 石英 赤色粒子	有 7.5YR 4/1	同灰色 -	昔 M-1
43	縦体	肩 部	-	集合沈縫。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	有 5YR 4/3	同灰色 10YR 4/1	昔 M-1
44	縦体	肩 部	-	沈縫。 河先。 外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 小石	有 5YR 5/3	に近い赤褐色 7.5YR 2/1	昔 M-1
45	縦体	肩 部	-	幾何学的な集合沈縫。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 小石	有 2.5YR 4/4	同灰色 7.5YR 4/1	昔 M-1
46	縦体	肩 部	-	集合沈縫。 外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 石英 赤色粒子	有 5YR 5/4	同灰色 2.5YR 3/1	昔 M-1
47	縦体	肩 部	-	集合沈縫。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整	白色粘物 器母 石英	有 2.5YR 4/4	に近い赤褐色 2.5YR 5/4	昔 M-1
48	縦体	肩 部	-	幾何学的な集合沈縫。 外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 石英 赤色粒子	有 2.5YR 4/4	同灰色 7.5YR 4/1	昔 M-1
49	縦体	肩 部	-	沈縫。	ナデ	白色粘物 器母 小石 赤色粒子	微黄 5YR 5/3	に近い赤褐色 5YR 5/3	Y-2 IV区
50	縦体	肩 部	-	格子目状の沈縫。 河先。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 小石	有 5YR 4/3	に近い赤褐色 2.5YR 5/4	H-1 I区
51	縦体	肩 部	-	沈縫。	-	白色粘物 器母 小石 赤色粘物	有 5YR 4/3	同灰色 -	Y-3 III区
52	縦体	肩 部	-	沈縫。	-	白色粘物 器母 赤色粘物	微黄 5YR 4/3	同灰色 -	昔 M-1
53	縦体	肩 部	-	格子目状の沈縫。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整	白色粘物 器母 赤色粒子	有 5YR 5/4	に近い赤褐色 5YR 5/4	昔 M-1
54	縦体	肩 部	-	沈縫。	ナデ	白色粘物 器母	有 5YR 5/4	に近い赤褐色 7.5YR 5/4	昔 M-1

第6表 繩文早期土器一覧表

部品 番号	器種	部・枚	法・島	器形 および 文様	調査 (内面)	施土	編號	色 調		出 土 位 置	備 考
								外 面	内 面		
55	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整	白色粘物 器母 小石 赤色粘物	有	にじみ赤褐色 SYR 5/3	にじみ赤褐色 2.5YR 5/4	香	M-1
56	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整の後ナデ。	-	白色粘物 器母 赤色粘物	有	褐灰色 7.5YR 4/1	-	香 田区	H-3
57	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整。	-	白色粘物 器母 石英 赤色粘物	有	褐灰色 SYR 5/1	にじみ赤褐色 2.5YR 5/3	香	H-3 田区
58	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 赤色粘物	微凸	にじみ赤褐色 SYR 5/4	にじみ赤褐色 2.5YR 5/4	香	M-1
59	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整。	ナデ	白色粘物 器母	微凹	にじみ赤褐色 SYR 5/4	褐灰色 SYR 4/1	香	M-1
60	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 器母	微凹	褐灰色 SYR 5/1	褐灰色 7.5YR 3/1	香	M-1
61	環体	胴 部	-	沈縄。	条痕調整	白色粘物 器母 小石	有	褐色 7.5YR 4/3	黑色 7.5YR 2/1	香	M-1
62	環体	胴 部	-	沈縄。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 小石	有	棕色 7.5YR 6/6	褐灰色 7.5YR 4/1	香	D-11
63	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母	有	にじみ赤褐色 SYR 5/4	にじみ赤褐色 SYR 5/4	香	M-1
64	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整の後ナデ。	-	白色粘物 器母 小石 石英	有	暗赤褐色 SYR 3/2	-	香 田区	H-3
65	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 赤色粘物	有	明赤褐色 2.5YR 5/6	明赤褐色 2.5YR 5/6	香	M-1
66	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 小石 石英	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	明赤褐色 2.5YR 5/6	香	表掲
67	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整	白色粘物 器母 小石 石英	有	にじみ褐色 2.5YR 5/4	暗褐色 SYR 3/1	香	M-1
68	環体	胴 部	-	沈縄。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 小石 石英	有	にじみ褐色 7.5YR 5/4	にじみ赤褐色 SYR 5/4	香	M-1
69	環体	胴 部	-	格子目状の沈縄。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 石英 小石	有	にじみ赤褐色 2.5YR 4/4	明赤褐色 2.5YR 5/6	香	M-1
70	環体	胴 部	-	沈縄。 条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 石英 赤色粘物	微凸	にじみ赤褐色 SYR 5/4	暗褐色 2.5Y 3/1	香	M-1
71	環体	胴 部	-	沈縄。 条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 赤色粘物	有	にじみ赤褐色 2.5YR 4/4	にじみ赤褐色 2.5YR 4/4	香	M-1
72	環体	胴 部	-	8mm前後の幅広環体による格子目状の沈縄。 条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 赤色粘物	有	にじみ赤褐色 SYR 4/4	にじみ赤褐色 SYR 4/3	香	M-1

第7表 純文早期土器一覽表

神田 番号	器種	部 位	法 類	器形 および 文様	調査 (内面)	胎 土	織紋	色 国		成 位	出 土 地	考 め
								外 面	内 面			
73	環鉢	腹 部	-	幅8mm前後の楕円底体による沈縁。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色粘土 雲母 褐色粘土	有 2.5YR 4/4 SYR 4/2	にじい赤褐色 色	褐灰色	番	M-1	
74	環鉢	腹 部	-	幅8mm前後の楕円底体による格子目状の 沈縁。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色粘土 雲母 石英	有 2.5YR 4/4 SYR 4/2	にじい赤褐色 色	褐灰色	番	M-1	
75	環鉢	口縁部	-	幅8mm前後の楕円底体による沈縁。 口端部、斜方向の削突。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色粘土 雲母 石英 褐色粒子	有 7.5YR 5/4 SYR 4/4	にじい赤褐色 色	褐灰色	番	M-1	
76	環鉢	腹 部	-	幅8mm前後の楕円底体による格子目状の 沈縁。 外面、条痕調整。	-	白色粘土 雲母 石英 褐色粒子	有 2.5YR 4/4	にじい赤褐色 色	-	番	M-1	
77	環鉢	腹 部	-	幅8mm前後の楕円底体による格子目状の 沈縁。 外面、条痕調整。	-	白色粘土 雲母 石英 褐色粒子	有 2.5YR 4/4	にじい赤褐色 色	-	番	M-1	
78	環鉢	腹 部	-	幅8mm前後の楕円底体による格子目状の 沈縁。	条痕調整	白色粘土 雲母 石英 褐色粒子	有 2.5YR 4/4	にじい赤褐色 色	-	番	M-1	
79	環鉢	腹 部	-	沈縁。	-	白色粘土 雲母 石英 褐色粒子	有 SYR 4/2	灰褐色	-	番	-	
80	環鉢	腹 部	-	曲線状の押引沈縁。 外面、条痕。	条痕調整	白色粘土 雲母 褐色粒子	有 SYR 5/4 10YR 4/1	にじい赤褐色 色	褐灰色	番	F-1 P. 5	
81	環鉢	腹 部	-	曲線状の押引沈縁。 腰接縫線上に削突。 条痕調整。	ナデ	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 2.5YR 5/3 7.5YR 5/1	にじい赤褐色 色	褐灰色	番	Y-2 I区	
82	環鉢	口縁部	-	沈縁。 外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 7.5YR 3/1 SYR 4/3	黑褐色	にじい赤褐色 色	番	Y-2 I区	
83	環鉢	腹 部	-	横方向の平行沈縁同士。 横方向の平行沈縁同士。 その下に格子目状。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘土 雲母 石英 褐色粒子	黒褐色 SYR 4/4 SYR 3/1	にじい赤褐色 色	黑褐色	番	M-1	
84	環鉢	腹 部	-	横方向の平行沈縁。 その下に格子目状。 もしくは山形状の沈縁。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 2.5YR 4/4 7.5YR 3/1	にじい赤褐色 色	黑褐色	番	H-3 IV区	85と同一個体
85	環鉢	腹 部	-	横方向の平行沈縁。 その下に格子目状。 もしくは山形状の沈縁。 外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 2.5YR 4/4 7.5YR 3/1	にじい赤褐色 色	黑褐色	番	H-3 IV区	84と同一個体
86	環鉢	腹 部	-	小波状の沈縁。 純文單施し直横方向。	条痕調整 の後ナデ	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 SYR 5/4 10YR 5/4	にじい赤褐色 色	黑褐色	番	M-1	
87	環鉢	腹 部	-	沈縁。削突。 純文無施し直横方向。	条痕調整	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 10YR 4/1 10YR 4/1	褐灰色	褐灰色	番	M-1	
88	環鉢	腹 部	-	小波状の沈縁。 純文單施し直横方向。 外面、条痕調整。	ナデ	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 7.5YR 5/1 10YR 4/1	褐灰色	褐灰色	番	H-3 II区	
89	環鉢	腹 部	-	純文單施し直横方向。 外面、条痕調整。	-	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 10YR 5/3 SYR 5/4 10YR 5/1	にじい黄褐色 色	黄灰色	番	M-1	
90	環鉢	腹 部	-	純文單施し直横方向。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色粘土 小石 雲母 石英 褐色粒子	有 10YR 5/3 2.5YR 5/1	にじい黄褐色 色	黄灰色	番	表接	

第8表 横文早期土器一覧表

井田 番号	器種	部 位	状 態	器形 および 文様	調 研 (内面)	物 土	繊維	色 調		出 土 地	備 考
								外 面	内 面		
91	器体	腹 部	-	刺突。 外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	にふい褐色 2.5YR 5/4	にふい褐色 5YR 4/3	香	M-1
92	器体	腹 部	-	追縫刺突。 外底、条痕調整。	ナデ	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	にふい褐色 7.5YR 5/4	にふい褐色 7.5YR 5/4	香	M-1
93	器体	腹 部	-	追縫刺突。 沈板。 横文無邊且横方向。	条痕調整	白色灰物 苔母 石英 小石	有	褐灰色 10YR 5/1	褐灰色 10YR 5/1	香	表様
94	器体	腹 部	-	追縫刺突。 沈板。 外底、条痕調整。	ナデ	白色灰物 苔母 小石	有	にふい赤褐色 SYR 5/4	灰褐色 SYR 5/2	香	M-1
95	器体	腹 部	-	追縫刺突。 格子目状、もしくは山形状の沈線。	-	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	褐褐色 10YR 3/1	-	香	M-1
96	器体	腹 部	-	押引沈線。 外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 苔母 小石 赤色粒子	有	にふい褐色 7.5YR 6/4	にふい褐色 7.5YR 6/4	香	M-1
97	器体	腹 部	-	追縫刺突。 沈板。	ナデ	白色灰物 苔母 小石 赤色粒子	有	灰褐色 7.5YR 4/2	灰褐色 7.5YR 4/2	香	表様
98	器体	腹 部	-	追縫刺突。 沈板。 外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	にふい黄褐色 10YR 5/3	褐灰色 10YR 4/1	香	M-1
99	器体	腹 部	-	格子状もしくは山形状の沈線。 刺突。	条痕調整	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	にふい赤褐色 SYR 4/3	にふい赤褐色 SYR 4/3	北 6 北 8 1号	
100	器体	口縁部	-	短沈線。 口縁部斜方向の刺突。 外底、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色灰物 苔母 石英 赤色粒子	有	にふい黄褐色 10YR 5/3	褐灰色 10YR 5/1	香	M-1
101	器体	腹 部	-	口縁部、条痕調整。 外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	褐色 7.5YR 4/3	にふい赤褐色 SYR 4/3	香	表様
102	器体	腹 部	-	外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 苔母 小石	有	にふい褐色 7.5YR 5/4	にふい黄褐色 10YR 7/4	香	M-1
103	器体	腹 部	-	外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 苔母 小石	有	にふい褐色 7.5YR 5/3	にふい赤褐色 2.5YR 5/4	香	Y-1 田区
104	器体	腹 部	-	外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 苔母 小石 石英	有	灰褐色 7.5YR 4/2	にふい赤褐色 SYR 4/4	香	D-11
105	器体	腹 部	-	外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	褐灰色 10YR 4/1	灰褐色 SYR 4/2	香	Y-3 田区
106	器体	腹 部	-	外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	にふい黄褐色 10YR 5/3	にふい赤褐色 SYR 4/4	香	D-11
107	器体	腹 部	-	外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	にふい赤褐色 SYR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	香	M-1
108	器体	腹 部	-	外底、条痕調整。	条痕調整	白色灰物 小石 苔母 石英 赤色粒子	有	にふい褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 5/2	香	M-1

第9表 纯文早期土器一覧表

件番 番号	器種	部 位	法 量	器形 および 文様	齊 整 (内面)	胎 土	編織	色 調		出 土 位 置	備 考
								外 面	内 面		
109	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整	白色胚物 雲母 小石 赤色粒子	有	にぶい褐色 7.5Y 6/4	灰褐色 10YR 5/2	昔	D-10
110	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整	白色胚物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	にぶい赤褐色 SYR 5/4	灰褐色 10YR 5/1	昔	H-C
111	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整	白色胚物 雲母 小石 赤色粒子	有	にぶい赤褐色 SYR 5/4	にぶい赤褐色 SYR 5/4	昔	M-1
112	縁鉢	腹 部	-	沈鉢。 外面、条痕調整。	条痕調整	白色胚物 雲母 小石	有	にぶい赤褐色 SYR 4/4	黒褐色 7.SYR 3/1	昔	D-11
113	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	-	白色胚物 雲母 石英	微量	にぶい赤褐色 2.SYR 5/4	黒褐色 10YR 3/1	昔	表塗
114	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色胚物 雲母 小石 赤色粒子	有	にぶい赤褐色 2.SYR 4/4	にぶい赤褐色 2.SYR 4/4	昔	M-1
115	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整	白色胚物 雲母 小石 赤色粒子	有	にぶい赤褐色 2.SYR 5/4	にぶい赤褐色 2.SYR 5/4	昔	D-10
116	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 雲母 小石	有	にぶい赤褐色 SYR 5/4	明赤褐色 2.SYR 5/6	昔	M-1
117	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 雲母 小石 赤色粒子	有	にぶい褐色 7.SYR 6/4	灰褐色 10YR 6/2	昔	M-1
118	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色胚物 雲母 小石 赤色粒子	有	褐灰色 7.SYR 4/1	褐灰色 7.SYR 4/1	昔	M-1
119	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	-	白色胚物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	にぶい赤褐色 2.SYR 5/4	にぶい赤褐色 2.SYR 5/4	昔	M-1
120	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	にぶい赤褐色 SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 4/1	昔	表塗
121	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 雲母 小石 赤色粒子	有	にぶい赤褐色 SYR 5/4	灰褐色 10YR 5/2	昔	M-1
122	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 雲母 小石	有	にぶい褐色 7.SYR 5/4	にぶい赤褐色 SYR 5/4	昔	M-1
123	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 雲母 小石	有	にぶい褐色 7.SYR 6/4	灰褐色 10YR 6/2	昔	表塗
124	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色胚物 雲母 小石	有	にぶい赤褐色 SYR 5/4	黒色 10YR 2/1	昔	M-1
125	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色胚物 雲母 小石	有	にぶい褐色 7.SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 4/1	昔	M-1
126	縁鉢	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 雲母 小石 赤色粒子	有	にぶい赤褐色 SYR 4/4	灰褐色 SYR 4/2	昔	M-1

第10表 繩文早期土器一覧表

種類 番号	器形	部 位	法 京	器形 および 文様	調査 (内面)	始 土	織維	色 調		出 土 位 置	備 注
								外 面	内 面		
127	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナゲ	白色粘物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 4/4	褐灰色 SYR 4/1	香 M-1	
128	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	に近い褐色 SYR 5/4	灰褐色 2.SYR 6/2	香 M-1	
129	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 4/4	褐灰色 10YR 4/1	香 M-1	
130	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	に近い褐色 7.SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 4/1	香 M-1	
131	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナゲ	白色粘物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	に近い褐色 7.SYR 5/4	褐褐色 7.SYR 3/1	香 M-1	
132	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナゲ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	褐灰色 SYR 4/1	香 M-1	
133	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 小石 雲母 小石	有	に近い黄褐色 10YR 5/4	に近い褐色 7.SYR 5/4	H-3 II区	
134	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整の後ナゲ。	ナゲ	白色粘物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	灰褐色 SYR 5/2	褐灰色 7.SYR 4/1	香 H-3 III区	
135	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナゲ	白色粘物 雲母 石英 赤色粒子	有	に近い褐色 7.SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 4/1	香 M-1	
136	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 2.SYR 5/3	褐灰色 SYR 4/1	香 M-1	
137	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナゲ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	に近い赤褐色 SYR 5/4	香 M-1	
138	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	-	白色粘物 雲母 赤色粒子	有	灰褐色 7.SYR 4/2	-	香 M-1	
139	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 小石 雲母 石英 赤色粒子	有	に近い褐色 7.SYR 5/4	褐灰色 SYR 5/4	香 褐斑	
140	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 雲母 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 4/4	褐灰色 7.SYR 4/1	香 M-1	
141	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 雲母 小石	有	に近い赤褐色 2.SYR 4/4	褐灰色 SYR 4/1	香 M-1	
142	縄林	胴 部	-	通起粒突。 沈殿。 外面、条痕調整の後ナゲ。	ナゲ	白色粘物 雲母 小石	有	に近い黄褐色 10YR 6/4	褐褐色 7.SYR 3/1	香 M-1	
143	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	ナゲ	白色粘物 小石	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 5/4	香 M-1	
144	縄林	胴 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナゲ	白色粘物 雲母 石英 小石	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 4/1	H-3 II区	

第II表 繩文早期土器一覧表

番号 番号	器種	部 位	法 類	器形 および 文様	調査 (内面)	胎 土	織錦	色 調		地成 生 土 位 置	備 考
								外 面	内 面		
145	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色粘物 岩母 小石 石英	有	にじい赤褐色 色 SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 4/1	青	表様
146	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 岩母 小石 赤色粒子	有	にじい赤褐色 色 2.SYR 5/4	褐灰色 10YR 4/1	青	M-1
147	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 岩母 小石 赤色粒子	有	にじい赤褐色 色 10YR 5/3	褐灰色 10YR 3/1	青	M-1
148	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 岩母 小石	有	褐色 7.SYR 4/3	灰褐色 10YR 5/2	青	M-1
149	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 小石 岩母 石英 赤色粒子	有	褐色 7.SYR 4/3	灰褐色 7.SYR 5/2	青	M-1
150	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色粘物 岩母 赤色粒子	有	にじい褐色 色 7.SYR 5/3	にじい赤褐色 色 SYR 5/4	青	M-1
151	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色粘物 岩母 赤色粒子	有	にじい褐色 色 7.SYR 5/4	褐灰色 10YR 5/1	青	M-1
152	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色粘物 岩母 小石 石英	有	褐色 7.SYR 4/3	褐灰色 10YR 4/1	青	M-1
153	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色粘物 岩母 小石 赤色粒子	有	にじい褐色 色 7.SYR 5/4	褐灰色 10YR 4/1	D-11	
154	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 岩母 石英 小石	有	にじい褐色 色 SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 4/3	青	M-1
155	縄錦	腹 部	-	ナデ。	-	白色粘物 岩母 石英 小石	有	灰褐色 7YR 4/2	-	青	D-3
156	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	-	白色粘物 岩母 石英 小石	有	にじい赤褐色 色 SYR 5/4	-	青	M-1
157	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整。	ナデ	白色粘物 岩母 石英 赤色粒子	有	褐色 7.SYR 4/3	褐灰色 7.SYR 4/3	青	M-1
158	縄錦	腹 部	-	ナデ。	-	白色粘物 岩母 小石 赤色粒子	有	にじい赤褐色 色 SYR 5/4	褐灰色 SYR 4/1	青	表様
159	縄錦	腹 部	-	ナデ。	ナデ	白色粘物 岩母 小石 赤色粒子	有	にじい褐色 色 10YR 5/3	灰褐色 10YR 5/2	青	H-3 H区
160	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 岩母 小石	有	にじい赤褐色 色 SYR 5/3	にじい黄褐色 色 10YR 5/4	青	表様
161	縄錦	腹 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 岩母 石英 小石	有	にじい赤褐色 色 2.SYR 5/4	にじい褐色 色 SYR 5/4	青	M-1
162	縄錦	腹 部	-	ナデ。	ナデ	白色粘物 岩母 小石 赤色粒子	有	にじい褐色 色 7.SYR 5/4	にじい赤褐色 色 SYR 4/4	青	M-1

第12表 繩文早期土器一覧表

件番 番号	器種	部 位	出 収	器形 および 文様	固 形 (内面)	胎 土	織紋	色 国		出 土 位 置	備 考
								外 面	内 面		
163	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 黒母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	灰褐色 7YR 5/2	香 II区	
164	縄鉢	副 部	-	地痕(ケズリ)。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 小石 黒母 石英 赤色粒子	有	に近い黄褐色 10YR 5/3	に近い赤褐色 SYR 5/4	香	M-1
165	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色胚物 黒母 小石 石英	有	に近い赤褐色 2.5YR 4/4	に近い赤褐色 SYR 4/3	香	M-1
166	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色胚物 黒母 小石 石英	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	に近い赤褐色 2.5YR 5/4	香	M-1
167	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 黒母 小石 石英	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	に近い赤褐色 SYR 5/4	香	M-1
168	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 黒母 石英 赤色粒子	有	に近い褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 10YR 5/2	香	M-1
169	縄鉢	副 部	-	ナデ。	ナデ	白色胚物 黒母 石英 赤色粒子	無	に近い橙色 SYR 6/4	褐灰色 SYR 5/1	香	M-1
170	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 黒母 小石	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	に近い赤褐色 SYR 5/4	香 III区	Y-3
171	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 小石 黒母 石英 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	に近い赤褐色 2.5YR 5/4	香	M-1
172	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 黒母 赤色粒子	有	に近い黄褐色 10YR 6/4	に近い黄褐色 10YR 6/3	香 II区	H-3
173	縄鉢	副 部	-	ナデ。	-	白色胚物 黒母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	-	香	M-1
174	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	-	白色胚物 小石 黒母 石英 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/3	褐灰色 SYR 5/1	香	M-1
175	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 黒母 小石	有	に近い黄褐色 10YR 6/4	に近い黄褐色 10YR 6/4	香	M-1
176	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色胚物 黒母 小石 赤色粒子	有	に近い黄褐色 10YR 6/4	に近い黄褐色 10YR 6/4	香	H-C
177	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	-	白色胚物 黒母 小石 石英	有	褐灰色 SYR 4/1	-	香 III区	H-3
178	縄鉢	副 部	-	ナデ。	ナデ	白色胚物 黒母 小石	有	に近い黄褐色 10YR 7/4	に近い黄褐色 10YR 6/4	香	M-1
179	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色胚物 黒母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	褐灰色 7.5YR 5/1	香	M-1
180	縄鉢	副 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色胚物 黒母 小石 赤色粒子	有	に近い黄褐色 10YR 6/3	に近い黄褐色 10YR 7/4	香	M-1

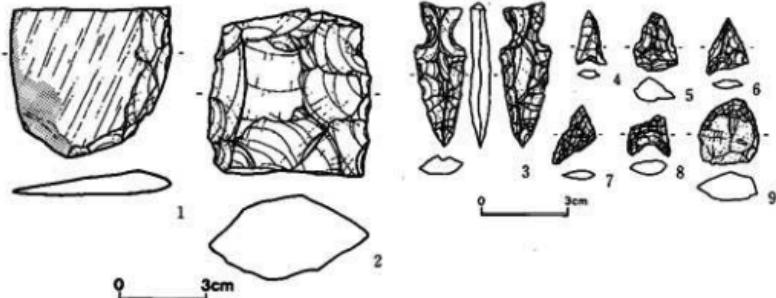
第13表 總文早期土器一覧表

件目 番号	器種	部位	法量	輪形 および 文様	開 管 (内面)	施 土	織維	色 調		地成 性	出 土 位 置	備 考
								外 面	内 面			
181	深鉢	脚 部	-	ナデ。	ナデ	白色粘物 雲母 小石	微量	に近い褐色 7.5YR 5/3	に近い赤褐色 SYR 5/4	昔	Y-4	
182	深鉢	脚 部	-	ナデ。	-	白色粘物 雲母 石英	有	灰黃褐色 10YR 6/2	-	昔	M-1	
183	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い褐色 7.5YR 5/3	褐灰色 10YR 4/1	昔	D-11	
184	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	-	白色粘物 雲母 石英 小石	有	褐灰色 SYR 4/1	-	昔	D-11	
185	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い褐色 7.5YR 5/4	に近い赤褐色 SYR 5/4	昔	M-1	
186	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い褐色 7.5YR 5/3	灰黃褐色 2.5Y 4/1	昔	D-8	
187	深鉢	脚 部	-	ナデ。	ナデ	白色粘物 雲母 赤色粒子	有	に近い褐色 7.5YR 7/4	に近い灰褐色 10YR 7/4	昔	M-1	
188	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。 (沈錆?)	-	白色粘物 小石 雲母 赤色粒子	微量	灰黃褐色 10YR 5/2	褐灰色 10YR 4/1	昔	M-1	
189	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	-	白色粘物 雲母 小石	有	に近い褐色 7.5YR 5/3	-	昔	Y-1	
190	深鉢	脚 部	-	ナデ。	ナデ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 2.5Y 4/4	に近い赤褐色 SYR 5/4	昔	D-1	
191	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 5/2	昔	M-1	
192	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整。	-	白色粘物 雲母 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/3	-	昔	H-3	
193	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	-	白色粘物 小石 雲母 赤色粒子	有	褐褐色 SYR 4/2	-	昔	前段	
194	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 雲母 赤色粒子	微量	に近い褐色 7.5YR 5/3	に近い赤褐色 SYR 5/4	昔	M-1	
195	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 SYR 5/4	褐灰色 SYR 5/1	昔	M-1	
196	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い褐色 7.5YR 6/4	灰褐色 SYR 5/2	昔	M-1	
197	深鉢	脚 部	-	外面、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 雲母 小石 赤色粒子	有	に近い赤褐色 2.5YR 5/4	に近い赤褐色 SYR 5/4	昔	M-1	
198	深鉢	脚 部	-	ナデ。	ナデ	白色粘物 雲母 石英 赤色粒子	微量?	灰黃褐色 10YR 5/2	褐灰色 10YR 5/1	昔	表深	

第14表 繩文早～前期土器一覧表

序 番 号	目 標	部 位	法 量	器形 および 文様	内 容 (内面)	粘 土	織様	色 調		出 土 位 置	備 考	
								外 面	内 面			
199	縄体	底 部	-	ナデ。	ナデ	白色粘物 器母 赤色粒子	微 粒?	灰青褐色 10YR 5/2	黑色 5Y 2/1	香	M-1	
200	縄体	胴 部	-	ナデ。	ナデ	白色粘物 器母 石英	微 粒?	にふい赤褐 色 5YR 4/3	暗灰色 5YR 4/1	香	M-1	
201	縄体	底 部	-	外腹、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 小石 器母 石英 赤色粒子	有	灰褐色 7.5YR 5/2	黑色 10YR 2/1	香	M-1	
202	縄体	底 部	-	外腹、条痕調整の後ナデ。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 石英 赤色粒子	有	にふい赤褐 色 5YR 4/3	暗灰色 10YR 4/2	香	M-1	
203	縄体	底 部	-	外腹、条痕調整の後ナデ。	ナデ	白色粘物 小石 器母 石英 赤色粒子	有	にふい赤褐 色 5YR 4/3	暗灰色 10YR 4/1	香	M-1	
204	縄体	胴 部	-	微隆起部による区画内に、通続斜突で充 填。有段接合に斜突。 外腹、条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 赤色粒子	有	にふい赤褐 色 2.5YR 5/4	灰青褐色 10YR 6/1	香	D-11	高ヶ島台式
205	縄体	胴 部	-	ナデ。	条痕調整	白色粘物 器母 小石	微 粒?	暗灰色 7.5YR 4/3	暗灰色 7.5YR 4/3	香	Y-3	高ヶ島台式
206	縄体	胴 部	-	有段接合上に斜突。 外腹、条痕調整。	-	白色粘物 器母 石英 小石	有	にふい赤褐 色 5YR 5/4	-	香	D-3	高ヶ島台式
207	縄体	胴 部	-	有段接合上に斜突。 外腹、条痕調整。	条痕調整 の後ナデ	白色粘物 器母 石英 小石	有	灰褐色 5YR 4/2	にふい赤褐 色 5YR 5/3	香	M-1	高ヶ島台式
208	縄体	胴 部	-	沈殿による区画内に通続斜突で充填。 沈殿上に円形管柱による斜突。	ナデ	白色粘物 器母 石英 小石	有	暗灰色 10YR 4/1	にふい赤褐 色 5YR 5/4	香	M-1	高ヶ島台式
209	縄体	胴 部	-	掘痕状に粘土体で押圧。 有段接合。 外腹、条痕調整。	条痕調整	白色粘物 器母 石英 赤色粒子	有	にふい赤褐 色 2.5YR 5/4	にふい赤褐 色 5YR 5/4	香	D-11	早期末
210	縄体	口縁部	-	口縁部、外腹を粘土体で押圧。 外腹、条痕調整。	ナデ	白色粘物 器母 石英 赤色粒子	有	にふい褐色 7.5YR 6/3	灰褐色 7.5YR 5/2	香	D-3	早期末
211	縄体	胴 部	-	縄文L R横方向。	ナデ	白色粘物 器母 小石	有	にふい赤褐 色 10YR 6/4	にふい褐色 7.5YR 7/4	香	D-3	
212	縄体	口縁部	-	縄文R L - L Rによる羽状構成。	ランダム で丁寧な ナデ		有	褐色 7.5YR 4/3	暗灰色 7.5YR 4/1	良	M-2	周文初期前葉。
213	縄体	口縁部	-	撚紋R。	撚紋痕 る		有	橙色 SYR 6/6	橙色 SYR 6/6	良	表採	周文初期前葉。
214	縄体	口縁部	-	撚紋の棒。 口縁部高大突体による通続押圧。 縄文R L。	不明		有	褐色 7.5YR 4/1	黑褐色 7.5YR 3/1	良	表採	周文中期前葉。
215	縄体	口縁部	-	撚紋L。	ヨコ方向 のナデ		有	にふい赤褐 色 5YR 5/4	にふい褐色 色 10YR 6/4	良	表採	周文中期前葉。
216	縄体	胴 部	-	腹部に刻みをもつ壁面。 以下縄文L R。	ヨコ方向 のナデ		有	にふい褐色 色 7.5YR 6/4	暗灰色 7.5YR 4/1	良	表採	周文中期前葉。

217	環体	網 部	-	縦条体压痕文?	朱紅 (機位)		有	灰褐色 SYR 4/2	褐灰色 SYR 4/1	良	Y-2 1区	圓文早期～前 期。
218	環体	網 部	-	圓文RL。	不明		有	黑褐色 10YR 2/3	褐褐色 10YR 3/2	良	表様	圓文中期的形。
219	環体	網 部	-	圓文RL。	ランダム なナメ		有	褐色 7.SYR 6/6	にじい褐色 7.SYR 5/4	良	Y-4	圓文前期前半。
220	環体	網 部	-	圓文LR。	不明		有	にじい褐色 7.SYR 5/4	褐灰色 7.SYR 4/1	良	表様	圓文中期前半。
221	環体	網 部	-	圓文RL、LRによる羽状構成。	斜方向の ナメ		有	にじい褐色 7.SYR 5/4	褐褐色 10YR 3/1	良	D-11	圓文中期前半。
222	環体	網 部	-	圓文RL、LRによる羽状構成。	ヨコ方向 のナメ		有	黑色 2.SYR 2/1	灰黃褐色 10YR 5/2	良	H-19	圓文中期前半。
223	環体	網 部	-	圓文LR。	不明		有	暗褐色 SYR 3/3	褐褐色 SYR 3/1	良	表様	圓文中期前半。
224	環体	網 部	-	圓文RL、LRによる羽状構成。	タテ方向 の丁寧な ナメ		有	褐色 7.SYR 4/3	褐灰色 7.SYR 4/1	良	表様	圓文中期前半。
225	環体	網 部	-	斜角子状の沈殿。	捺压痕 ある		有	にじい赤褐 色 SYR 5/4	灰黃褐色 10YR 4/2	良	H-2 付没	圓文中期。



第22図 下荒田遺跡出土石器 (1:3 1:2)

第15表 下荒田遺跡出土石器一覧表

件名番号	器種	材質	大きさ	幅	厚さ	重 量	備考	件名番号	器種	材質	大きさ	幅	厚さ	重 量	備考
1	石斧	安山岩	(5.1)	5.4	0.8	31.1	D-3	6	石鎌	墨曜石	1.9	(1.4)	0.4	0.7	Y-2
2	石斧	ガラス質 安山岩	(5.7)	5.7	3.0	111.0	Y-3	7	石鎌	*	2.0	(1.2)	0.3	0.5	Y-2
3	石匙	チャート	5.0	1.7	0.7	5.5	表様	8	石鎌	*	(1.3)	1.4	0.4	0.6	Y-2
4	石鏟	墨曜石	1.9	1.0	0.2	0.3	Y-4	9	石鎌 未成品	*	2.4	2.1	1.0	4.8	Y-3
5	石錐 未成品	*	2.0	1.6	0.8	1.6	D-7								単位はcm・g

2 弥生時代の竪穴住居址

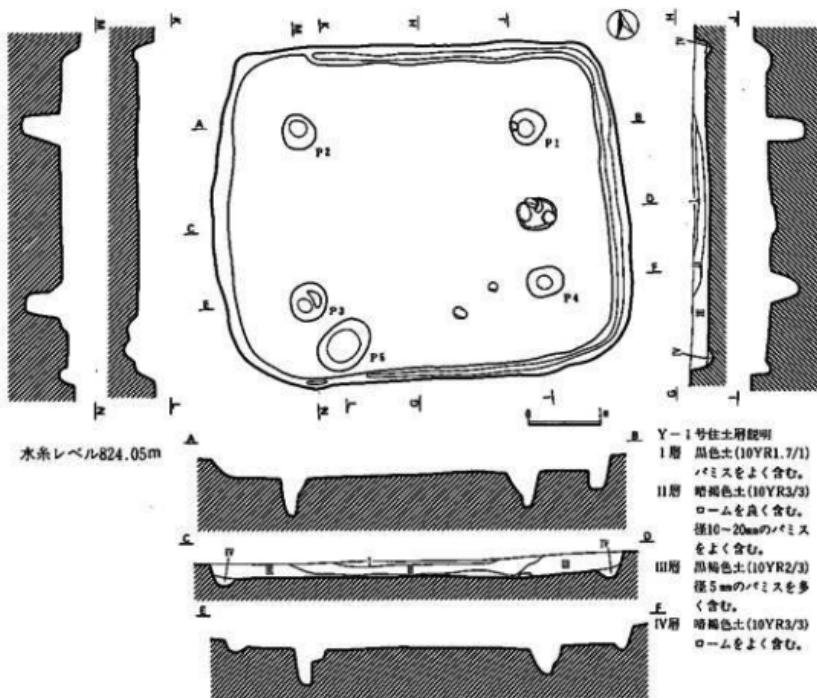
(1) Y-1号住居址

住居址 第23図

本址は、D-3グリッドに位置する。重複関係は持たない。

その規模は東西5.24m南北4.32mで、平面形状は隅丸長方形を呈する。床面積は21.2m²を測り、長軸方向はN-97°-Eを指す。

壁体と考えられる地山は堅固で床面からは急角度で立ち上がる。検出面からの高さは30~40cmを測る。壁溝は西壁下を除き、北・東・南壁下を「コ」の字状にめぐる。



第23図 Y-1号住居址実測図

床面は地山をそのまま利用し、おおむね平坦につくられ堅固である。

ピットは総数で5個検出された。住居四隅には径50cm内外の円形ピットP₁～₄が整然と長方形配置されており、主柱穴と考えられる。深さは50cm内外を測る。南壁下とP₃の間にあるP₅は貯蔵穴であろうか。規模は80×60cmの楕円形を呈し、西側の縁片には5cm程度の土手状の堅い高まり（土の堆積）が設けられている。床面からの深さは20cmを測る。

炉は東側主柱穴P₁～₄の間に付設されていた。床面を浅く掘りくぼめ、綠石を置いた程度の簡単な地床炉である。規模は50×40cm程度で楕円形を呈する。炉の燃焼面はあまり焼け込んだ痕跡が残らず、長期にわたる使用的有無はわからない。

覆土はIV層に分層された。I・II層は竪穴住居中央にレンズ状に堆積する。I層は漆黒の黒色土で、II層はロームを含む暗褐色土である。住居の大半を埋めているIII層は黒褐色土である。IV層は周溝内を埋めており、ロームが多量に混じる。

遺物 第24図

覆土中、床面上から少量の弥生土器が出土している。弥生土器の種類は壺、甕、高坏などがある。図化したものは5点、拓影は6点である。

壺は無彩の1がある。器高13.4cmの小型品で、胴下部が瘦ける点は千曲川流域後期弥生土器様式に特有な要素を内包しているが、頸部文様帶の描寫状文と波状文による構成は当地域にあらず、群馬県の樽式土器に固有である。

甕5はほぼ完形に復元された。口縁部がゆるく外反、胴部は中位上方で強く張る。文様は口縁部から胴部まで断続の多い描寫波状文を一挙に充填し、最後に頸部を簾状文で割る。6～11もこれと同様の文様構成の土器破片であると考えられる。

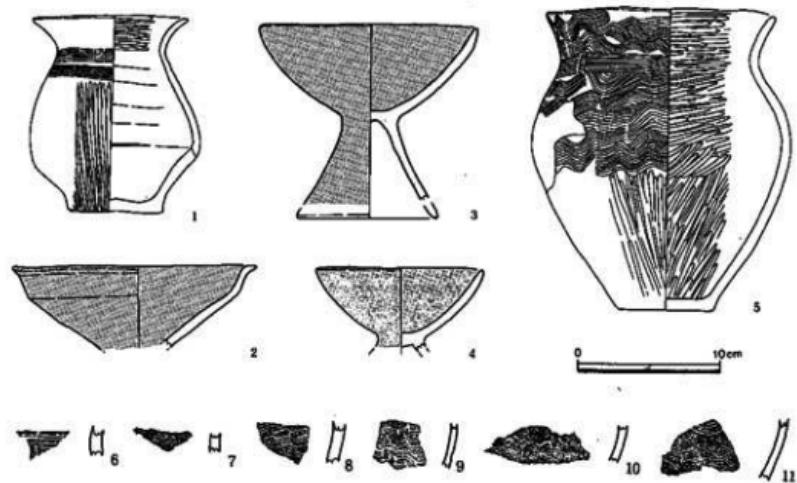
高坏2～4は、いずれも赤色塗彩および丁寧な研磨がなされ、鮮やかに仕上げられている。2は坏下部に稜を持ち立ち上がりつつ外反する形態、一方3・4は稜状の坏部を持つ。脚部はいずれも欠損するが、裾広がりになるとされる。

この他、混入遺物と考えられるが、黒曜石片が1点出土している。

時期

以上の出土遺物のうち、本竪穴住居の詳細な時期を決定する手がかりになるのは弥生土器の甕5と高坏2である。佐久平では2のような畿内V様式系の高坏の発達が善光寺平に比べ遅れ、弥生末によく登場することが指摘されている。これに伴うのが甕5のような形態である。

このような出土弥生土器の組み合わせからみて、本址は弥生時代後期末に帰属すると考えられる。



第24図 Y-1号住居址出土遺物 (1:4)

第16表 Y-1号住居址 出土土器観察表〈弥生土器〉

博品 番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調 査	地 土	色 調		施成 度	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1 (III) (3)	豆	口～ 底部	(16.4) 13.4 6.2	口部は大きく外反し、胴部下位 に張りをもち、以下下げる。腰 部に横縞状文と波状文。	外面部口ヨコナヂ。胴部タテ ミガキ。内面部腰部ヨコ1ガ キ。以下ヨコナヂ。	長石	にじい黄褐色	灰青褐色	良	Y-1 III区	
2 (完) (3)	高环 环	环部	16.2 — —	环部下位に張りをもち、直立した 後強く外反する。	内外面赤色並赤。ヨコヘラミ ガキ。	白色粘物 風化岩片	赤色	赤色	良	Y-1 No.5	
3 (完) (3)	高环 环～ 脚部	14.8 (13.2) (9.4)	楕状の环部に直立がりの脚部。	内外面赤色並赤。ヘラミガキ。	白色粘物 風化岩片	赤色	赤色	良	Y-1 No.1.2		
4 (完) (3)	高环 环	11.2 — —	楕状の环部に直立がりの脚部。	内外面赤色並赤。ヘラミガキ。	白色粘物 風化岩片	赤色	赤色	良	Y-1 No.3		
5 (完) (3)	豆	完形	15.5 20.4 6.5	口部は最も外反し、胴部は中位上 方で強く膨る。口～胴部に右回りの 横縞状文並斜面に横縞状文。	外面部下位タテヘラミガキ。 内面部～胴部中位ヨコミガキ。 以下タテ1ガキ。	白色粘物 風化岩片	褐色	暗赤褐色	良	Y-1 II区	

(2) Y-2号住居址

住居址 第26図

本址はC-2グリッドに位置する。重複関係は持たない。

東西4.20m南北4.84mの隅丸長方形を呈し、床面積は19.4m²を測る。長軸方向はN-5°-Wを指す。

壁高は8~22cmを測る。壁体は堅固である。壁溝は持たない。

床は地山をそのまま利用して構築される。おおむね平坦で堅固である。

ピットは7個が検出された。住居四隅に整然と長方形配置されるP₁～₄は主柱穴と考えられる。径20～30cmの小ピットで深さは50cm内外である。東壁下のP₅は貯蔵穴であろうか。64×51cmの楕円形ピットで内側は袋状に広い空間を持っている。床面からは最深部で75cmを測る。南壁下のはば中央に2個並ぶP₆、₇は入口に関連する小ピットと考えられる。P₈は25cm、P₉は20cmと浅い。

炉は北側の主柱穴P₁、₂の間に設けられている。床面を浅く楕円形に掘りくぼめた程度の地床炉で南側に安山岩で円柱型の炉縁石を一個置いている。燃焼面の底面はあまり焼け込んだ痕跡が認められなかった。

覆土は、おおかたが黒色土（I層）によって構成される。

遺物 第25・27図

住居南西隅の床面上からは、完形個体こそないが、器形推定可能な土器がまとめて出土した。壺1や甕2などは底部を欠損するものの口縁部～胴部まできれいにのこっており、あたかも床面上に置き台として据え置かれたかのようである。また、北西隅付近には台石21が置かれ、北東隅付近からは土製紡錘車23・ベンガラが出土した。

出土した弥生土器の器種には壺・甕・鉢・高杯などがある。

壺は無彩の1・7と赤色塗彩される8がある。1は受口状に立ち上がる口縁部をもつ。胴部は上位で球形にふくらみ、下位で瘦けると考えられる。頸部には横描直線文を6分割した同工具の縦スリットをいれている。また、赤色塗彩の8には横描簾状文が施される。

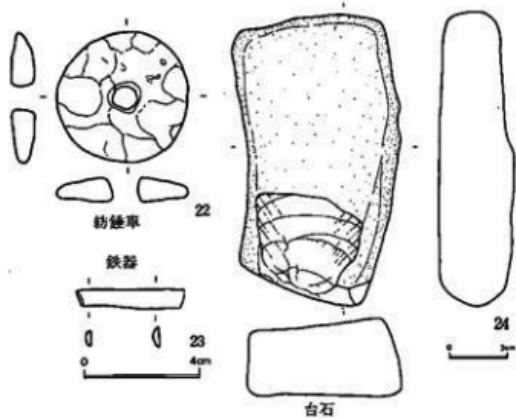
甕は横描斜走文が施される

2・10～13、横描波状文が施される14～18、無文の3がある。器形が判明するのは2・3のみで、2は口縁部の外反がゆるく、胴部は中位上方で張る。3は口縁部が割り合ひ大きく外反し、胴部は軽くふくらむ程度である。

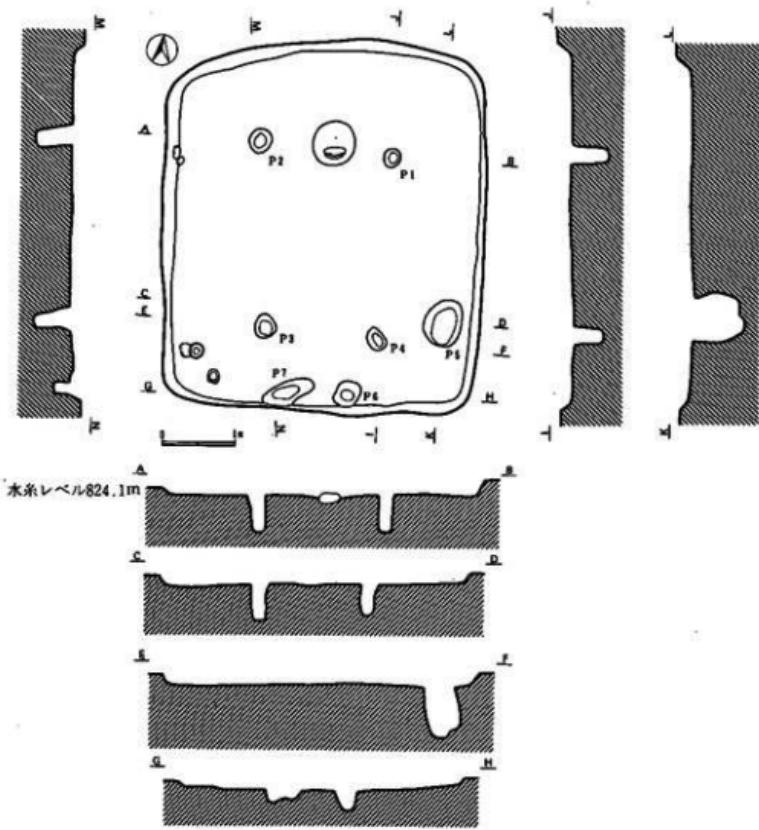
鉢は甕型の4と圓化しなかつたが、楕状を呈すると考えられるものがある。

高杯は楕状を呈する大型の5

があり、これも赤色塗彩される。



第25図 Y-2号住居址出土遺物〈土製品・鉄器・石器〉

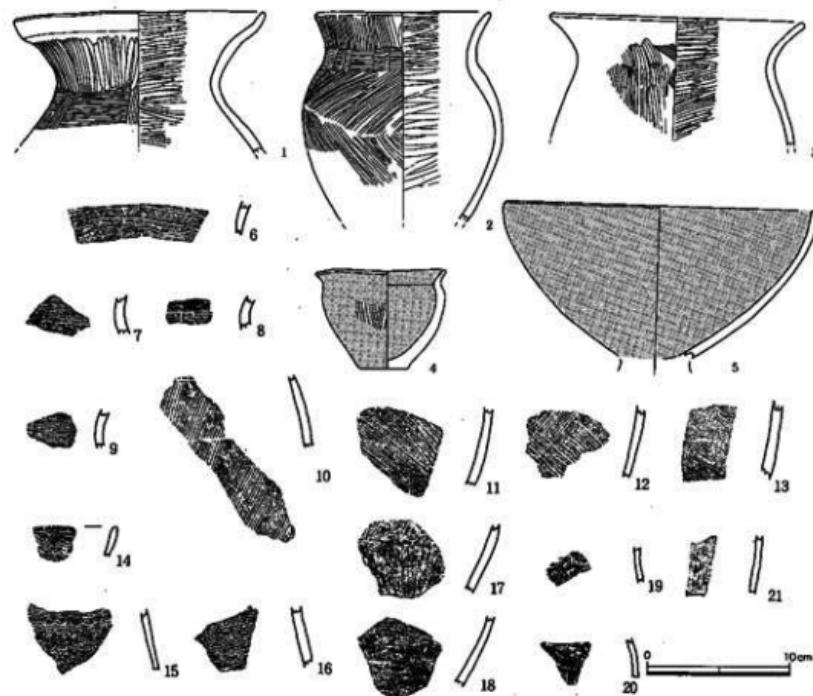


第26図 Y-2号住居址実測図

土製品には扁平な紡錘車22、鐵器には不明の柄部、また、石器には安山岩製の台石24がある。

時期

以上の出土土器から本址は弥生時代後期末に位置付けられる。



第27図 Y-2号住居址出土遺物 (1:4)

第17表 Y-2号住居址 出土土器観察表(弥生土器)

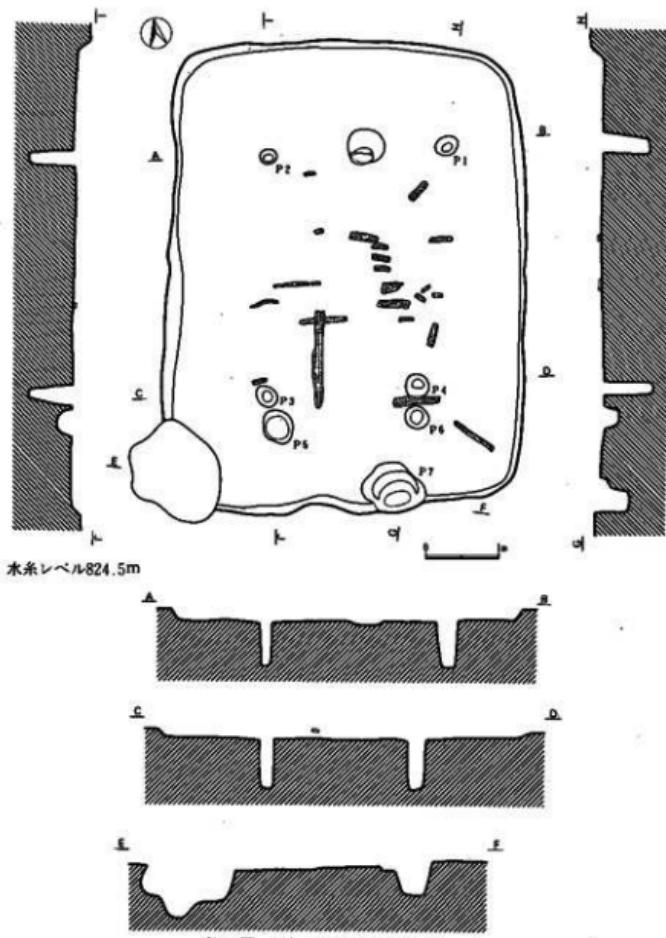
件番 番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調 査	施 土	色 調		地成 位置	備 考
							外 面	内 面		
1 (完) (残)	豆	口 胴部	17.0	口縁部は受口式を呈し、腹部は強くしまる。文部六单位の縦目 リット横縞に帶縞模様文2枚。	外面口～根部縫へラミガキ。 内面口縫部にヨコヘラミガキ 以前毛刺痕。	白色粘物 風化岩片	桜色	桜色	良	Y-2 No.5
2 (完) (残)	豆	口～ 胴部	11.8	口縫部はゆるく外反し、胴部は中位上方で張る。口～胴部に粗 糸状突出。胴部に瘤状突。	内面丁寧なヨコヘラミガキ。	白色粘物 風化岩片	灰青褐色	よい褐色	良	Y-2 No.6
3 (田) (残)	豆	口～ 胴部	(17.2)	口縫部は外反し、胴部は軽くふくらむ。無文。	外表面毛刺痕のち、タテヘ ラミガキ。内面ヨコヘラミガ キ。	白色粘物 風化岩片	よい青褐色	よい青褐色	良	Y-2
4 (完) (残)	杯	完形	8.8 6.6 3.2	口縫部は強く直進し、胴～底部 は内面青釉に覆まる。内外面赤 色釉。	外表面の刷毛調整痕が残る。 内面ヨコヘラミガキ。	白色粘物 風化岩片	明赤褐色	明赤褐色	良	Y-2 No.4
5 (完) (残)	杯	口～ 底部	(21.2)	口縫部～体部構造を呈する。内 外面赤色釉。	内外面ヨコヘラミガキ。	白色粘物 風化岩片	明赤褐色	明赤褐色	良	Y-2 No.5

(3) Y-3号住居址

住居址 第28図

本址は台地西端部のE-2グリッドに位置する。重複関係は持たない。

規模は東西4.70m南北6.24m、平面形状は隅丸長方形プランを呈する。床面積は28.6m²を測り、下荒田・細田遺跡で検出された同時期と考えられる弥生竪穴住居址のなかで最大規模を持つ。長



軸方向はN-8°-Eを指す。

確認面からの壁高は5~18cmを測り、壁体は堅固である。壁溝は持たない。

床面は地山をそのまま利用して構築され、平坦で堅固である。

ピットは7個が検出された。住居四隅に整然と長方形配置されるP₁~P₄は主柱穴と考えられる。径30cm内外の小型の円形ピットで、深さは60cm強を測る。P₃~P₄の南側に接するP₅~P₆は深さ20cm強の浅いピットで、補助柱的な役割を果たしたのであろうか。南壁下東寄りに存するP₇は段落ちのピットで床面からの深さは42cmを測る。貯蔵穴的な役割を考えておきたい。

炉は北側の主柱穴P₁~P₂の中間に設けられる。床面を浅く掘りくぼめた程度の地床炉で、南の縁に安山岩の炉縁石を配置する。

覆土は、細粒化した炭化材を含む黒色土(1層10YR2/1)によって構成される。

炭化材の出土状況

細粒化しているものが多いため、形状をとどめる炭化材は住居中央部に散在する程度である。したがってこれらが建築材としてどの部位を示すのか判定できない。

遺物 第29・30図

覆土中・床面上に散在している。弥生土器の器種には壺・甕・高坏・鉢がある。

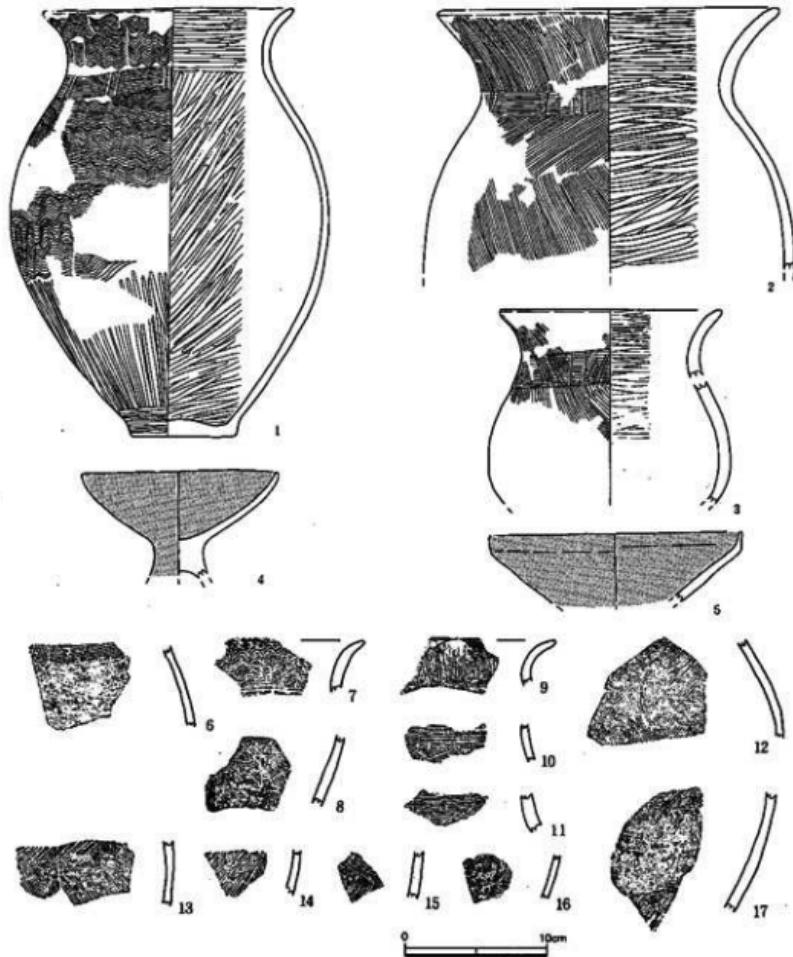
壺は無彩で櫛描直線文を縱スリットで刻んだ6がある。

甕は櫛描波状文の1・7・8と横羽状組み合わせの斜走文が施される2・3・9~17がある。器形のわかる1~3はすべて胴部径が口縁部径を凌駕する。

高坏4は楕状を呈する坏部で赤色塗彩、鉢5は口縁部が折れて立ち、これも赤色塗彩される。

第18表 Y-3号住居址 出土土器観察表(弥生土器)

番号	器種	部位	法量	器形の特徴	調査	胎土	色調		出土位置	備考
							外面	内面		
1 壺 (6)	丸 (彫)	先部	17.0 29.0 7.2	口縁部は外反する。胴部は中位で張る。口縁部~胴部に有りの櫛描文は横羽状文。胎土に櫛描波状文。	外周脚部下位タテコヘラミガキ。 内面頂部横幅ヨコヘラミガキ。 以下斜めヘラミガキ。	白色胚物 風化岩片 10YR 5/4	に上い・黄褐色 色	に上い・黄褐色 色	Y-3 No 1 III区	
2 甕 (8)	口~ 胴部	(13.0) -	-	口縁部は最も外反して最もく。胴部は中位で張る。口縁部~胴部に有りの櫛描斜走文。底部に墨状文。	内面ヨコヘラミガキ。口~胴部丁本。以下やや錐。	白色胚物 風化岩片 10YR 5/4	に上い・黄褐色 色	7.5YR 6/6	YR 3 No 1.2	
3 壺 (8)	口~ 胴部	(15.0) -	-	口縁部は外反する。胴部は中位で張る。口縁部~胴部に有りの櫛描斜走文。底部に墨状文。	内面ヨコヘラミガキ。	白色胚物 風化岩片 10YR 5/4	に上い・黄褐色 色	10YR 5/4	Y-3 No 2	
4 高坏 (8)	口~ 脚部	13.2 -	-	高坏楕状を呈する。内外面赤色塗彩。	内外面ヨコヘラミガキ。	白色後部 風化岩片 10R 4/6	赤色	赤色	Y-3	
5 鉢 (8)	口~ 底部	(17.2) -	-	口縁部弧曲し、直底に立ち上がる。内外面赤色塗彩。	内外面ヨコヘラミガキ。	白色胚物 風化岩片 10YR 5/6	赤色	赤色	Y-3 III区	

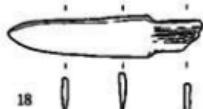


第29図 Y-3号住居址出土遺物〈土器〉(1:4)

鐵器には刀子18がある。

時 期

以上から本址は弥生時代終末に位置付けることができる。



第30図 Y-3号住居址出土遺物
〈鉄器〉(1:2)

(4) Y-4号住居址

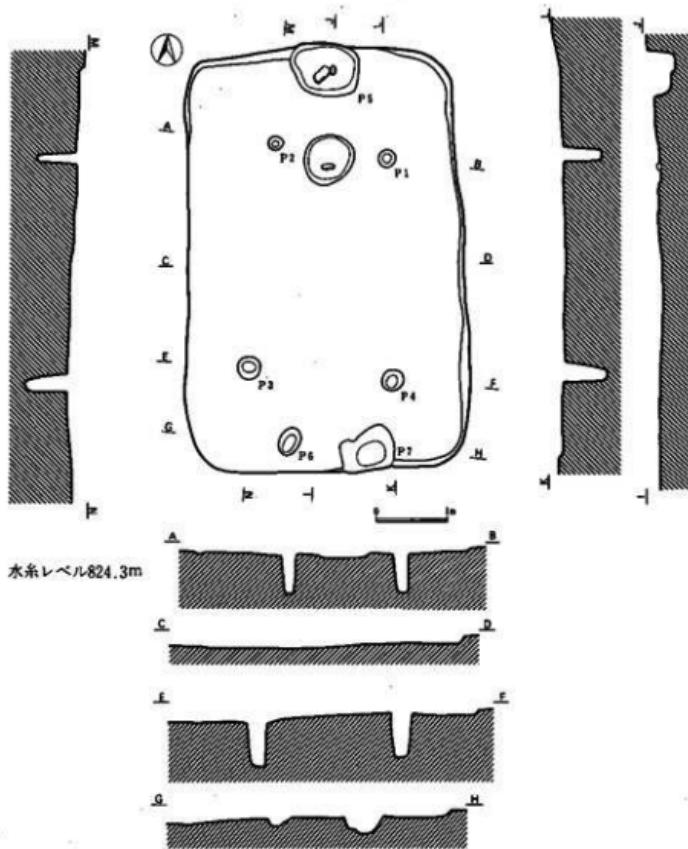
住居址 第31図

本址はC-2グリッドに位置する。重複関係は持たない。

東西3.74m南北5.76mの隅丸長方形プランを呈し、床面積は20.5m²を測る。長軸方向はN-3°-Wを指す。

削平が著しいため、壁残高は数cm程度である。壁溝は持たない。

床は地山をそのまま利用し、一部破壊を受けるが、堅固で概ね平坦な面を成す。



ピットは7個が検出された。住居四隅に整然と長方形配置されるP₁～P₄は主柱穴である。径20～30cmの小柱穴で、深さは60cm弱にそろっている。北壁下中央に掘り込まれるP₅は85×73cmの大型ピットで床面からの深さは38cm、貯蔵穴であろうか。南壁下中央に2個並ぶP_{6,7}は入口に関連すると考えられる。

炉は北側主柱穴P_{1,2}間に設けられる。床面を浅く掘りくぼめた程度の地床炉で南側に安山岩の砾石が一個置かれている。燃焼面はあまり焼け込んだ痕跡が認められなかった。

覆土は黒色土(10YR2/1) 単層である。

遺物 第32図

覆土中・床面上に弥生土器片が散在している。器種は甕・鉢などがある。

2～4は甕で、3には描描斜走文、4には刷毛状工具の調整が見られる。

鉢1は楕状を呈し、内外面に丁寧なミガキと赤色塗彩が施される。

時期

以上の造構及び遺物の特長から、本址は弥生時代終末に帰属する住居と考えられる。

第19表 Y-4号住居址 出土土器観察表(弥生土器)

件番 番号	器種	部位	法 直	器形の特徴	調 研	胎 土	色 調		焼成 度	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1 (II) (鉢)	鉢	口～ 体部	(15.5) — —	楕状を呈する。内外面赤色塗彩。内面ヨコヘラミガキ。	白色粘物 風化粘片	赤色 10R 4/6	赤色 10R 4/6	良	Y-4		
2 (III) (甕)	甕	底部	— — (9.8)	内面ヨコヘラミガキ。外表面テヘラミガキ。	白色粘物 風化粘片	にじむ黄褐色 10YR 5/4	にじむ黄褐色 10YR 5/4	良	Y-4		



第32図 Y-4号住居址出土遺物(土器)(1:4)

(5) Y-5号住居址

住居址 第51図

本址はD-1グリッドに位置する。H-8号住居址におおかたを破壊されるため、竪穴住居の南端部分が残る程度で、全体形状はまったくつかめない。ただし、東西の長さは3.50m弱と推定することができる。

壁残高は数cm程度、壁溝は検出されなかった。

床面は地山をそのまま利用している。

ピットは2個が検出された。南壁下に2個並んでいる。

炉は検出されなかった。

覆土は、おおむね黒褐色土のみが確認された。

遺 物

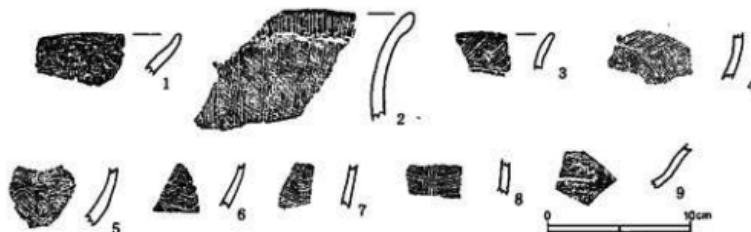
覆土中・床面上・ピット内から弥生土器片が数点出土した程度で、図化するにたるものを見当たらなかった。

時 期

以上の遺構・遺物の様相からは断定しづらいが、本址は周辺の状況もかんがみ弥生時代後期終末に帰属する住居と考えられる。

(6) その他の遺物

造構外からも弥生土器が出土している。1は無彩の壺の口縁部片、2～4は梅描斜走文、5～7は波状文が施される甕の口縁部片、8は頸部に「T」字文が施される壺、9は赤彩され、坏下部に稜をもつ高坏である。



第33図 その他の遺物（弥生土器）

3 平安時代の竪穴住居址と出土遺物

(1) H-1号住居址

住居址 第34図

本址は、D-3グリッドに位置する。重複関係は持たない。

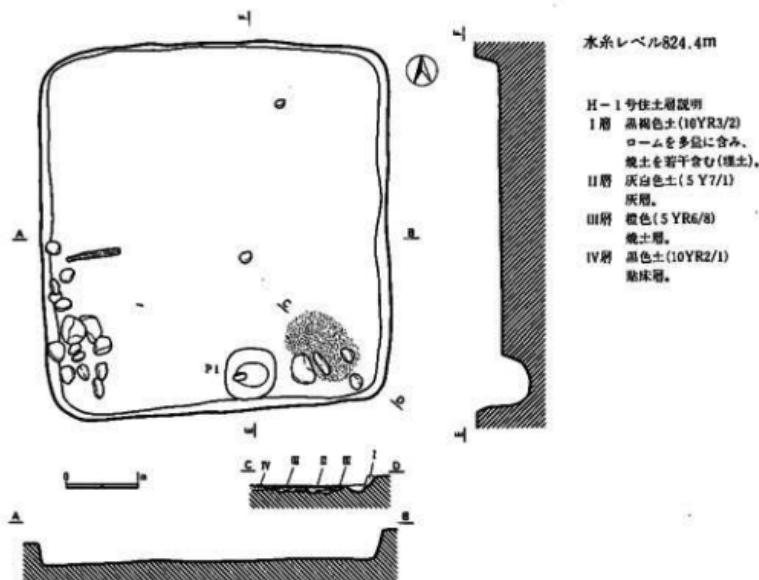
その規模は東西4.52m南北4.88mで、平面形状は整った方形を呈する。床面積は21.8m²を測り、長軸方向は真北を指す。

壁体は堅固で床面からは急角度で立ち上がる。検出面からの高さは30~40cmを測る。壁溝は掘削されていない。

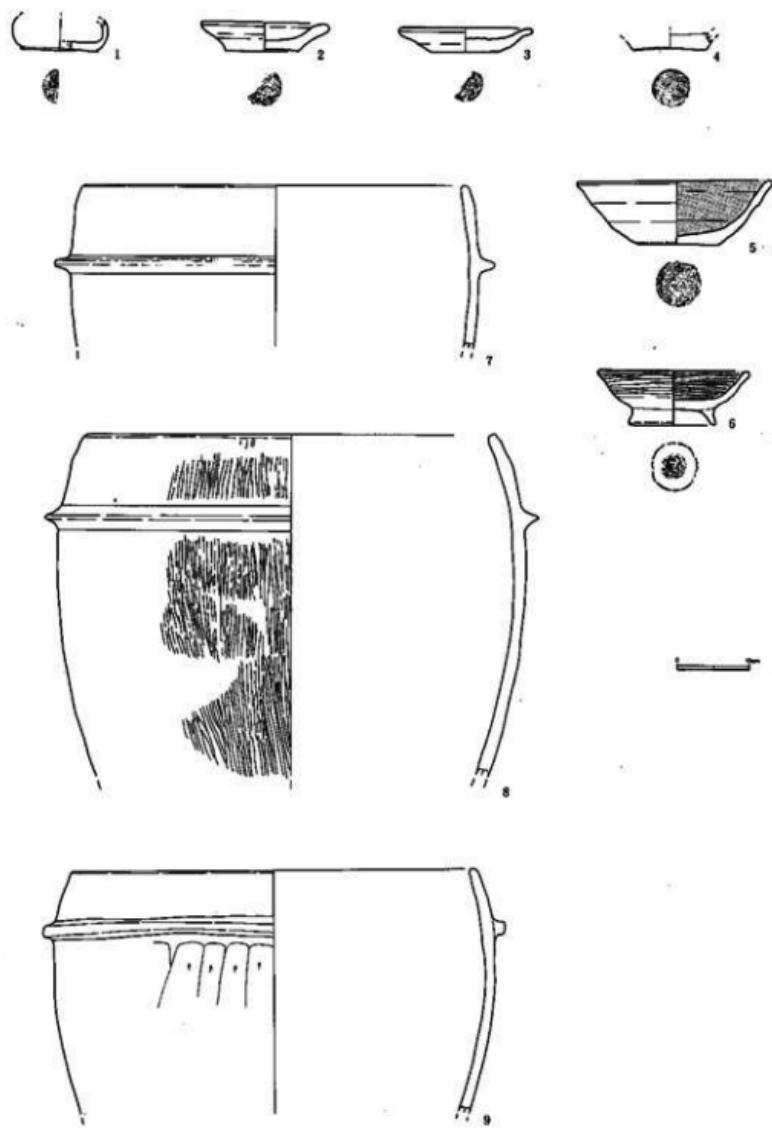
床面は地山をそのまま利用し、おおむね平坦につくられるがやや脆弱である。

ピットは南壁下中央から1個検出された。径68cmの円形を呈し、36cmの深さを持つピットでカマドの右側にあるため、これと何らかのかかわりを持つ可能性も高い。

カマドは南東隅に付設されていたが、設置箇所と住居南西部に構築材の礫が散乱している状況



第34図 H-1号住居址実測図



第35図 H-1号住居址出土遺物〈土器〉(1:4)

で、旧状はつかめない。燃焼面であったと考えられる火床は、床面と同じレベルで掘り込みを持たず、真っ赤に焼け込んでいた。

覆土は炭化物を多量に含む
I層黒色土層 (10YR1.7/1)
単層である。

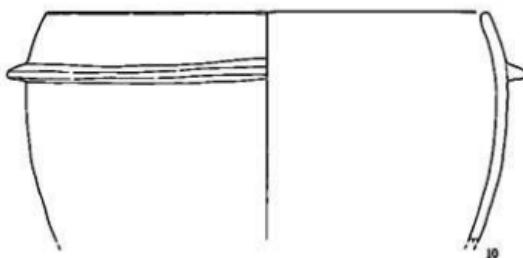
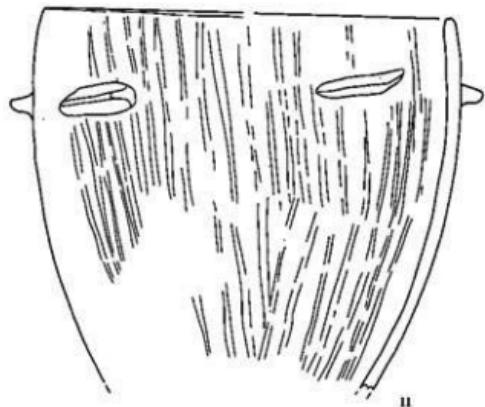
遺物 第35・36図

覆土中、床面上から割合多量の土器が出土している。土器の種類は灰釉陶器、須恵器、土師器がみられる。12点を図化した。

灰釉陶器は耳皿1があり、東濃大原2号窯産の製品である。

須恵器は壺5があり、底部は回転糸切りが施される。

土師器の器種には小皿・椀・羽釜・甕がある。小皿1～3は、口縁部が外反して開く平底品で、底部は糸切りされる。碗は口縁部が内湾して開き、平底の底部に高台が張り付けられる。ロクロナデのあと内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。羽釜7～11は口縁部の直径30cm内外の大型品で鋤が口縁下を全周する7～10と5か所に断続的に貼り付けられる11がある。ほかの土師器とは異なる胎土で、他地域から搬入されたものようだ。甕は口縁部が強く外反りする12がある。内外面ヨコナデされるが、胎土が粗いため非常に武骨なつくりである。このほかにも多量の羽釜片が出土した。また、混入遺物と考えられるがロクロ調整された甕の破片も多く出土した。



第36図 H-1号住居址出土遺物 (1:4)

第20表 H-1号住居址 出土土器觀察表（平安時代の土器）

序号 番号	器種	部位	法寸	器形の特徴	調　量	胎　土	色　調		地成 性質	出土 位置	備　考
							外　面	内　面			
1 (80)	耳皿 (灰)	体～底部	— (5.2)	内外面クロナナのち頭部外側ケズ リ。底部細り系切り。	硝造されて いる	灰白色 N 7/10	オリーブ灰 色 10Y 6/2	良	H-1 No18		
2 (86)	小皿 (土)	口～底部	8.6 2.0 5.0	口縁部外皮。平底。	内外面クロナナ底部系切り。	白色粒子 風化岩片合	暗灰黄色 2.5Y 5/2	明黄褐色 10YR 6/6	良	H-1 No9	
3 (88)	小皿 (土)	口～底部	8.8 1.6 4.6	口縁部外皮。平底。	内外面クロナナ底部系切り。全周黒 色結構。	白色粒子 風化岩片合	黑色 5Y 2/1	黑色 5Y 2/1	良	H-1 No7	
4 (89)	小皿 (土)	底部	— 4.8	平底。	内外面クロナナ底部系切り。	白色粒子 風化岩片合	にじい褐色 7.5YR 6/4	褐色 SYR 6/6	良	H-1 IV区	
5 (91)	环 (灰)	完形	13.2 4.2 5.6	口縁部内側気味に聞く。 平底。	内外面クロナナ底部系切り。	白色粒子 風化岩片合	灰灰色 2.5Y 4/1	灰灰色 2.5Y 4/1	良	H-1 No6	
6 (92)	碗 (土)	完形	10.6 3.6 5.6	口縁部内側気味に聞く。	内外面クロナナのち、内外面ミガキ。	白色粒子 風化岩片合	明黄褐色 10YR 6/6	にじい褐色 7.5YR 6/4	良	H-1 No16	
7 (93)	项垂 (土)	口～ 胴部	(26.2) — —	口縁部内側気味。胴部 軽くふくらむ。斜断面 三角形。口唇部底取り。	内外面ナナ。	青母 白色粒子	黑褐色 7.5YR 3/1	黑色 7.5YR 3/1	良	H-1 III区	
8 (94)	项垂 (土)	口～ 胴部	(28.0) — —	口縁部内側気味。胴部 軽くふくらむ。斜断面 三角形。	内面ヨコナナ外面ヨコナナのち、瓶方 向ミガキ。	白色粒子 青母	暗赤褐色 SYR 3/4	暗赤褐色 SYR 3/2	良	H-1 IIIIV区 カマド	
9 (95)	项垂 (土)	口～ 胴部	(27.6) — —	口縁部内側気味。胴部 軽くふくらむ。斜断面 方形。	内外面ヨコナナ。外面口縁部ヨコナナ。 胴部タテヘラケズリ。	白色粒子 青母	黑褐色 10YR 3/2	10YR 4/3	良	H-1 No17	
10 (96)	项垂 (土)	口～ 胴部	(30.2) — —	口縁部内側気味。胴部 軽くふくらむ。斜断面 三角形。	内外面ヨコナナ。	白色粒子 青母	にじい褐色 SYR 4/3	灰褐色 10YR 4/2	良	H-1 No5	
11 (97)	项垂 (土)	口～ 胴部	(27.6) — —	口縁部内側気味。胴部 軽くふくらむ。斜断面 三角形で断続的に貼付される。	内外面ヨコナナ。外面ナナのちタテ方 向のあらいミガキ。	白色粒子 青母	にじい褐色 2.5YR 4/3	褐色 7.5YR 4/3	良	H-1 No8.12	
12 (98)	煮 (土)	口～ 胴部	(17.6) — —	口縁部近く軽く外皮。	内外面ヨコナナ。	白色粒子 風化岩片合	黑褐色 10YR 3/1	灰褐色 10YR 4/2	良	H-1 No1	

時　期

以上の出土土器の組み合わせのうち、5の須恵器環は当該期の組み合わせには通常見られないものであるが、他はなんら矛盾なく、11世紀中頃に位置付けられる。したがって、本址もこれに近い時期に構築されたものと考えられる。

(2) H-2号住居址

住居址 第37図

本址はD-3グリッドに位置する。重複関係は持たない。

東西3.76m南北4.14mの隅丸方形プランを呈し、床面積は14.6m²を測る。長軸方向はN-2°-Wを指す。

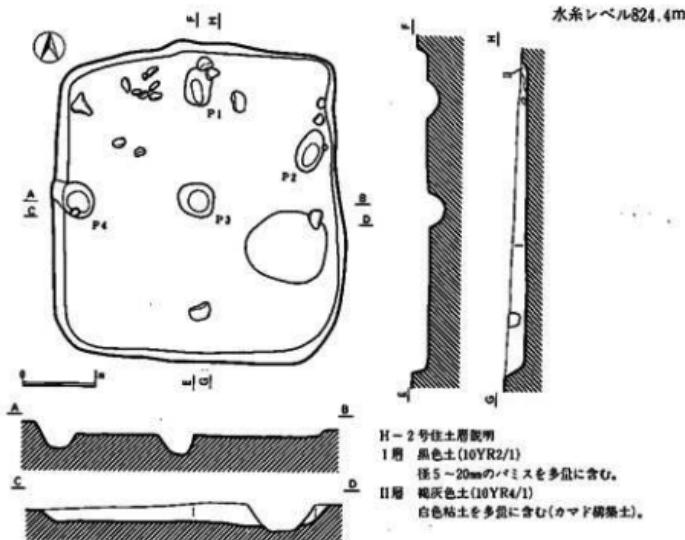
壁高は8~20cmを測る。壁体は堅固である。壁溝は持たない。

床は全面に貼床が施されるが、現状は脆弱な状態である。

ピットは4個が検出された。位置関係から主柱穴とは断ぜられない。特にP₁はカマド火床下の掘り込みとも考えられる。東壁下北寄りにあるP₂、住居中央のP₃、西壁下中央のP₄はやや通りにずれがあるが、柱穴かも知れない。

カマドは白色粘土を用いて北壁中央に付設されるが、完璧なまでに崩壊しており、旧状を復元することは不可能である。

覆土は、2層に分層されたが、おおかたは黒色土（I層）によって構成され、北壁下にI層にカマドが崩壊した白色粘土が混じったII層が堆積する。



第37図 H-2号住居址実測図

遺物 第38回

覆土中・床面上・ピット内から多量の土器が出土している。なお、6の墨書される土師器はH-2号住居址出土の5と接合関係を持つ。

土器の種類は灰釉陶器、土師器がある。図示したものは19点である。

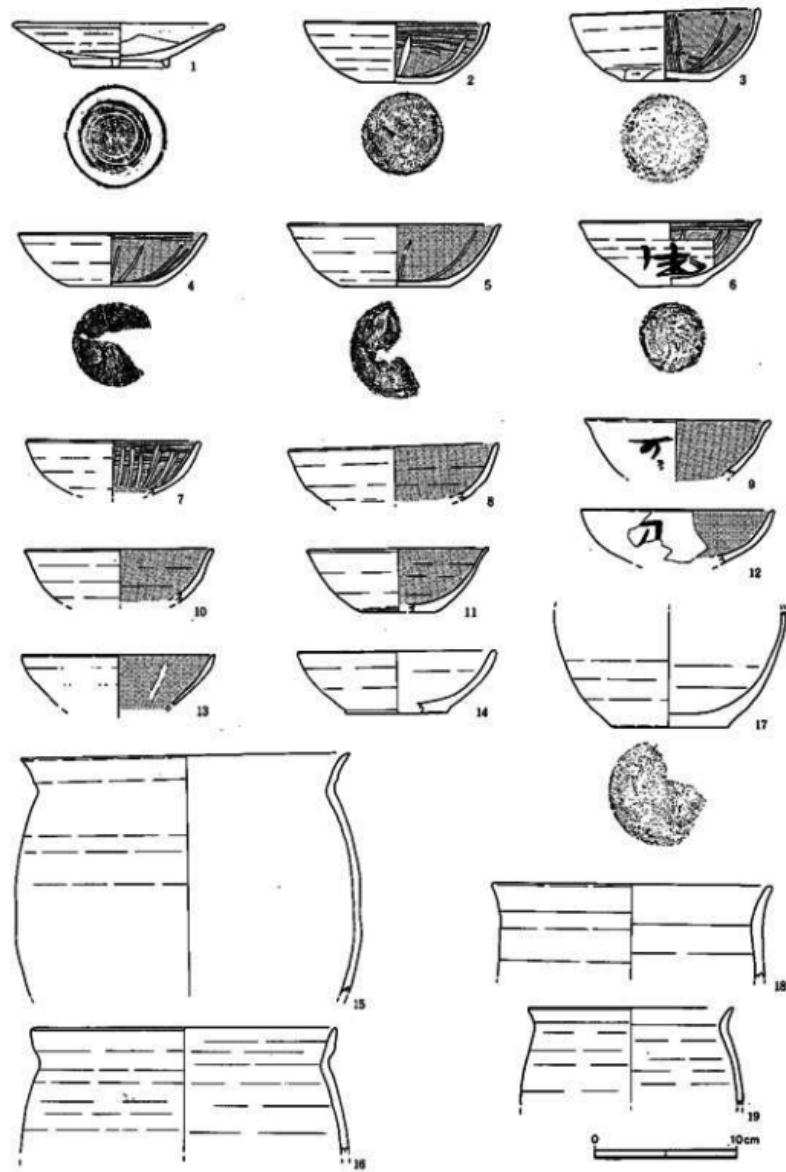
灰釉陶器の器種には皿がある。種類は刷毛で塗られており、東濃光ヶ丘1号窯式期産の製品である。

土師器の器種は壺・甕などがある。壺2~13はいずれも平底・ロクロ調整で内面が黒色処理され、14は黒色処理の有無が不明である。2・3・4・6・7は口端部がヘラミガキされ、身込み部に放射状の暗文が施される。また、5・13は単に身込み部に放射状の暗文が施される。他は小破片のため、暗文の有無は不明である。底部は2・4・5・6がヘラケズリ、3・11が糸切りである。なお、6・9・12には墨書きが施され、6は記号状、9は「万・」、12は「刀」と書かれている。

甕はいずれもロクロ調整である。口縁部が外縁を持ち受け口状を呈する15・16、外縁が形態化した18などの大型品と口縁部が短く外反する19の小型品がある。また、小型品17の底部には糸切りがなされている。この他にもロクロ調整の甕の破片が多量に出土している。

第21表 H-2号住居址 出土土器観察表(平安時代の土器)

序号	器種	部位	法量	器形の特徴	調	甕	色調		地成	出土位置	備考
							外面	内面			
1	皿	(灰) 定形	14.2 3.0 6.0	口縁部内側に開く。 口縁部ロクロナダ。底部ナデ。	精造されて いる。	灰白色 SY 7/1	灰白色 SY 7/1	良	H-2 カマド		
2	甕	(灰) 底部 (土)	12.6 4.2 4.8	口縁部内側して開く。 平底。	内外面ロクロナダ。内面黑色処理の うち放射状暗文。底部ヘラケズリ。	白色粒子 風化岩片	にじむ黒 色 10YR 4/3	黒色 10YR 1.7/1	良	H-2 No.3	
3	壺	(灰) (土) 底部	12.8 4.7 6.1	口縁部内側して開く。 手底。	内外面ロクロナダ。内面黑色処理の うち2本単位の放射状暗文。底部糸切り。	白色粒子 風化岩片	にじむ褐色 7.SYR 5/4	黒色 7.SYR 1.7/1	良	H-2 No.2	
4	甕	(灰) 定形 (土)	12.8 3.6 5.6	口縁部内側して開く。 手底。	内外面ロクロナダ。内面黑色処理の うち2本単位の放射状暗文。底部ヘラケズリ。	白色粒子 風化岩片	にじむ褐色 7.SYR 5/4	黒色 7.SYR 2/1	良	H-2 II区	
5	甕	(灰) 底部 (土)	14.6 4.2 7.0	口縁部内側して開く。 底部で若干外反する。 平底。	内外面ロクロナダ。内面黑色処理の うち放射状暗文。底部ヘラケズリ。	白色粒子 風化岩片	にじむ褐色 SYR 5/4	黒色 SYR 4/3	良	H-2 No.5 I区	
6	甕	(灰) 底部 (土)	12.4 4.4 4.4	口縁部内側して開く。 上位で若干外反する。 平底。	内外面ロクロナダ。内面黑色処理の うち放射状暗文。底部ヘラケズリ。	白色粒子 風化岩片	褐色 7.SYR 6/6	黒色 10YR 1.7/1	良	H-2 No.1 H-3 No.15	墨書きあり。
7	甕	(灰) 底部 (土)	11.0 — —	口縁部内側して開く。	内外面ロクロナダ。内面黑色処理の うちやや暗なミガキ。	白色粒子 風化岩片	にじむ褐色 SYR 4/4	黒色 7.SYR 1.7/1	良	H-2 I区	
8	甕	(灰) 底部 (土)	14.3 — —	口縁部内側して開く。	内外面ロクロナダ。内面黑色処理。	白色粒子 風化岩片	にじむ褐色 7.SYR 5/4	黒色 7.SYR 1.7/1	良	H-2 IV区	



第38圖 H-2號住居址出土遺物 (1:4)

第22表 H-2号住居址 出土土器観察表（平安時代の土器）

序 番 号	器種	部位	法 量	器形の特徴	調 整	胎 土	色 調		出 土 地 点	備 考
							外 面	内 面		
9	平 (皿)	口～ 底部 (土)	(12.6) — —	口縁部内側して開き、上位で外反する。	内外面クロナデ。内面黒色処理。	白色粒子 風化岩片	橙色 7.5YR 7/6	黑色 1.7/1	H-2 I区	墨書きあり 「...」?
10	平 (皿)	口～ 底部 (土)	(13.2) — —	口縁部内側して開き、上位で外反する。	内外面クロナデ。内面黒色処理。	白色粒子 風化岩片	褐色 7.5YR 4/4	黑色 7.5YR 3/1	H-2 I区	
11	平 (皿)	口～ 底部 (土)	(12.3) 4.4 (5.2)	口縁部内側して開き、底部で外反する。	内外面クロナデ。内面黒色処理、底部未切り。	白色粒子 風化岩片	橙色 7.5YR 7/6	黑色 2.5Y 2/1	H-2 II区	
12	平 (皿)	口～ 底部 (土)	(13.2) — —	口縁部内側して開く。	内外面クロナデ。内面黒色処理。	白色粒子 風化岩片	橙色 7.5YR 6/6	黑色 1.7/1	H-2 III区	墨書きあり 「...」?
13	平 (皿)	口～ 底部 (土)	(13.2) — —	口縁部内側して開く。	内外面クロナデ。内面黒色処理のほか、放射状溝文。	白色粒子 風化岩片	褐色 7.5YR 5/6	黑色 1.7/1	H-2 I区	
14	平 (皿)	口～ 底部 (土)	(13.6) 4.2 (7.0)	口縁部内側して開く。	内外面クロナデ。	白色粒子 風化岩片	灰青褐色 10YR 4/2	灰褐色 7.5YR 6/2	H-2 カマド I区	
15	甕 (皿)	口～ 底部 (土)	(22.6) — —	口縁部は外斜をもち、受け口状を呈する。底部は半位で傾くふくらむ。	内外面クロナデ。	白色粒子 風化岩片	赤褐色 5YR 4/6	暗赤褐色 5YR 3/2	H-2 I区	
16	甕 (皿)	口～ 底部 (土)	(21.0) — —	口縁部は外斜をもち、受け口状を呈する。底部は中位で傾くふくらむ。	内外面クロナデ。	白色粒子 風化岩片	暗赤褐色 5YR 5/6	暗赤褐色 5YR 5/6	H-2 カマド	
17	甕 (皿)	口～ 底部 (土)	— — (7.8)	底部は軽くふくらむ。	内外面クロナデ。底部未切り。	白色粒子 風化岩片	にじみ赤褐色 5YR 5/4	にじみ赤褐色 2.5YR 5/4	H-2 I区	
18	甕 (皿)	口～ 底部 (土)	(13.2) — —	口縁部わずかに外斜が現る。	内外面クロナデ。	白色粒子 風化岩片	にじみ赤褐色 5YR 5/4	にじみ赤褐色 2.5YR 5/4	H-2 II区	
19	甕 (皿)	口～ 底部 (土)	(13.8) — —	口縁部短く、軽く外反する。底部は中位でふくらむ。	内外面クロナデ。	白色粒子 風化岩片	灰褐色 5YR 4/2	橙色 5YR 6/6	H-2 II区	

時期

以上の出土土器から本址は9世紀末から10世紀初頭に帰属すると考えられる。

(3) H-3号住居址

住居址 第39図

本址はC-3グリッドに位置する。D-2号土坑と重複関係を持ち、これに住居中央部を破壊される。

東西4.28m南北4.44mの隅丸方形プランを呈し、床面積は18.7m²を測る。長軸方向はN-7°-Wを指す。

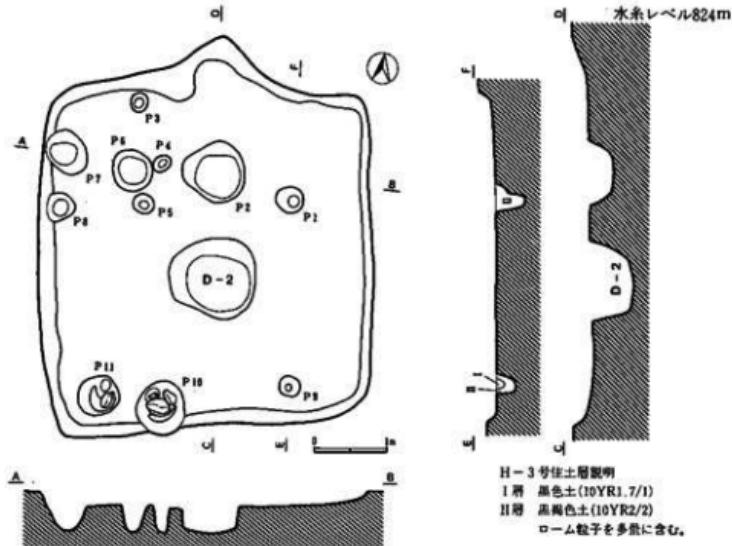
比較的平坦面にあるため確認面からの深さはほぼ均一で、壁高は10cm内外を測る。整体は堅固である。壁溝は持たない。

床は全面に貼床が施されるが、全体にかなり脆弱であった。このため、調査時に床面を掘り抜いてしまい、下の実測図は掘り方を示している。

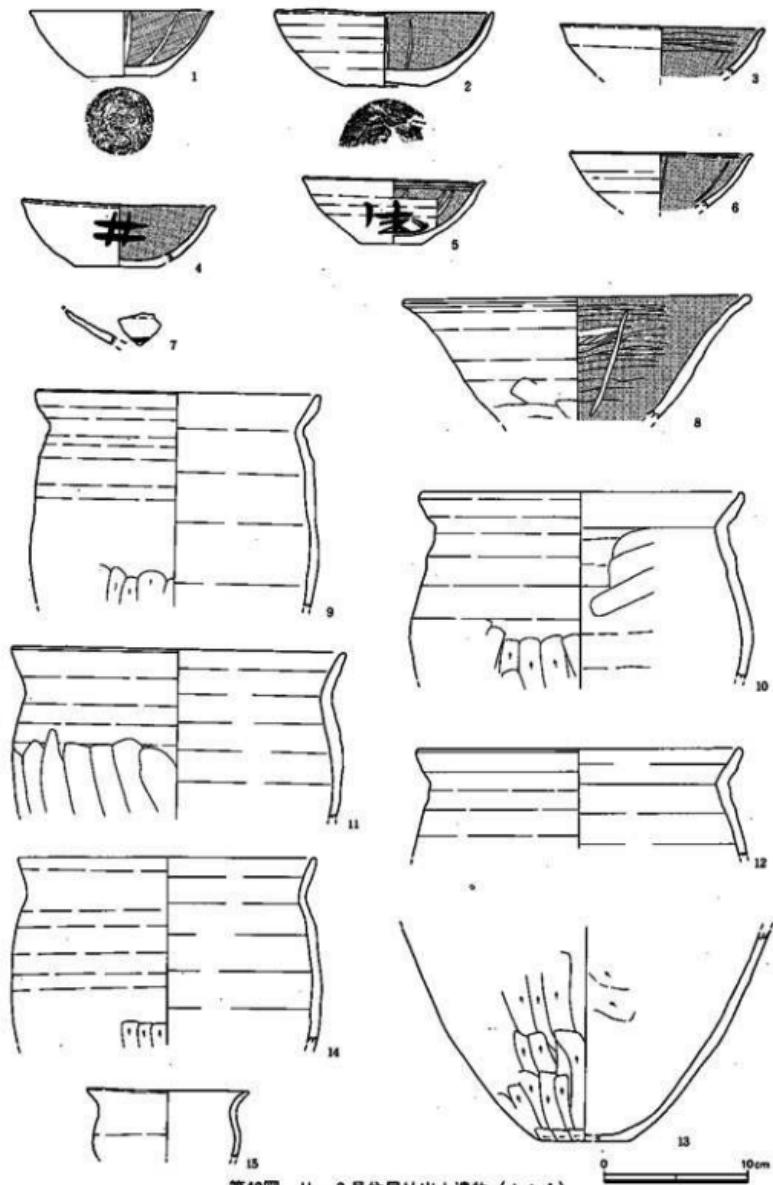
ピットは11個が検出された。このうち、P₁₋₉は床下ピットの可能性が強く、床面から掘り込まれたのはP₁₀₋₁₁であったと考えられる。

カマドは北壁の中央に付設されていることは確実だが、完全に崩壊しているため、旧状は明らかでない。

覆土は、径5mm前後のパミスを含む黒色土（I層10YR1.7/1）によって構成される。



第39図 H-3号住居址実測図



第40図 H-3号住居址出土遺物 (1 : 4)

遺物 第40図

覆土中・床面上・ピット内から土師器と少量の縄文土器が出土している。出土量は多い。5の
図示される土師器はH-2号住居址出土の6と接合関係を持つ。

土器の種類は土師器と須恵器がある。図示したものは15点である。

第23表 H-3号住居址 出土土器観察表(平安時代の土器)

件名 番号	基盤 (底) (土)	部位 (底) (土)	法 量	形態の特徴	調 査	地 土	色 調		地成 度	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1 环 (底)	口~ 底部	(12.5) 4.5 4.8	口縁部内側して開く。 端部で外反する。 平底。	内外面クロナダ。内面黑色処理の うち放射状竪文。底部未切り。	白色粒子 風化岩片	にぶい褐色 7.SYR 5/4	灰褐色 7.SYR 4/2	良	H-3 No.7.9 I区 カマド		
2 环 (底) (土)	口~ 底部	(15.0) 4.9 5.8	口縁部内側して開く。 平底。	内外面クロナダ。内面黑色処理の うち2本单位の放射状竪文。底部未切り。	白色粒子 風化岩片	灰褐色 SYR 4/2	灰褐色 SYR 2/2	良	H-3 No.15		
3 环 (底) (土)	口~ 底部 体部	(13.8) — —	口縁部内側して開く。 上位で若干外反する。 平底。	内外面クロナダ。内面黑色処理の うち放射状竪文。	白色粒子 風化岩片	にぶい褐色 SYR 5/4	灰褐色 SYR 4/2	良	H-3 カマド		
4 环 (底) (土)	口~ 底部	(13.2) — —	口縁部内側して開く。 上位で若干外反する。 平底。	内外面クロナダ。内面黑色処理の うち2段落ミガキ。	白色粒子 風化岩片	にぶい褐色 10YR 6/4	黒色 10YR 2/1	良	H-3 I区	相手「井」	
5 环 (底) (土)	口~ 底部	12.4 4.4 4.4	口縁部内側して開く。 上位で若干外反する。 平底。	内外面クロナダ。内面黑色処理の うち放射状竪文。底部ヘラケズリ。	白色粒子 風化岩片	灰色 7.SYR 6/6	黒色 10YR 1.7/1	良	H-3 No.15 H-1 No.1	須恵あり	
6 环 (底) (土)	口~ 底部 体部	(12.5) — —	口縁部内側して開く。 上位で若干外反する。 平底。	内外面クロナダ。内面黑色処理の うち放射状竪文。	白色粒子 風化岩片	にぶい褐色 10YR 6/3	黒色 10YR 2/1	良	H-3 II区		
7 环 (底) (土)	体部	— — —	— — —	内外面クロナダ。内面黑色処理。	白色粒子 風化岩片	灰褐色 10YR 4/2	黒褐色 10YR 3/1	良	H-3 No.1		
8 筋 (底) (土)	口~ 底部 体部	(23.6) — —	口縁部外反気味に開く。 受け口状を呈する。側面部 ありふくらむ。	外縁クロナダ。下位ヘラケズリ。内 面クロナダのもの。鍊なミガキと放 射状竪文。	白色粒子 風化岩片	にぶい褐色 SYR 5/4	灰褐色 SYR 4/2	良	H-3 IV区		
9 筋 (底) (土)	口~ 側部	(19.2) — —	口縁部は外縫をもち、受 け口状を呈する。側面部 ありふくらむ。	内外面クロナダ。外縫側部下位ヘラ ケズリ。内面側部下位ナダ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 SYR 5/6	にぶい褐色 2.SYR 5/4	良	H-3 No.2 II区		
10 筋 (底) (土)	口~ 側部	(22.0) — —	口縁部は外縫をもち、 受け口状を呈する。側 面部は外縫で深く。	内外面クロナダ。外縫側部下位ヘラ ケズリ。内面ヨコナダ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 SYR 5/6	にぶい褐色 SYR 5/4	良	H-3 No.12 I区		
11 筋 (底) (土)	口~ 側部	(22.8) — —	口縁部は外縫をこし、 受け口状を呈する。側 面部は外縫で深く。	内外面クロナダ。外縫側部下位ヘラ ケズリ。	白色粒子 風化岩片	灰褐色 10YR 5/6	褐色 7.SYR 4/3	良	H-3 No.3 II区		
12 筋 (底) (土)	口~ 側部	(22.9) — —	口縁部は外縫をこし、 受け口状を呈する。	内外面クロナダ。	白色粒子 風化岩片	明褐色 7.SYR 5/6	明褐色 7.SYR 5/6	良	H-3 No.10 カマド		
13 筋 (底) (土)	口~ 底部	— — (5.0)	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
14 筋 (底) (土)	口~ 側部	26.4 — —	口縁部の外縫はほとん どのこらす。側部は軽 くふくらむ。	内外面クロナダ。外縫側部下位ヘラ ケズリ。	白色粒子 風化岩片	赤褐色 2.SYR 4/6	赤褐色 2.SYR 4/6	良	H-3 H-5		
15 筋 (底) (土)	口~ 側部	— —	口縁部外反する。	内外面クロナダ。	白色粒子 風化岩片	褐色 7.SYR 4/3	暗赤褐色 SYR 3/2	良	H-3 II区		

土師器の器種は壺・鉢・甕などがある。

壺1～7はいずれもロクロ調整・内面黒色処理の平底製品である。1・2・3・5・6には黒色処理の後、身込み部に放射状の暗文も加えられる。底部は1・2が糸切りのまま、5がヘラケズリ調整される。また、4には「井」、5・7には解説不明の墨書が施される。

鉢は口縁部から体部が「ハ」の字状に開く大型品で、内面は黒色処理のち丁寧なヘラミガキと放射状暗文が施される。

甕は図示したほかにも多量の破片が出土した。甕9～15はいずれもロクロ調整が施される。口縁部の直径が20cm前後の製品9～12・14については口縁部が外稜を持ち、受口状を呈する点、また、胴部中位から底部にかけては13のように縱方向を基本とするヘラケズリが施される点で共通する。15のような小型品は口縁部が単純に外反する。

須恵器は甕の小片が少量ある。

時 期

以上の出土土器のうち、壺に放射状の暗文が施される点、ロクロ甕が多様されるなどの特長から本址は9世紀末から10世紀初頭に帰属する住居と考えられる。

(4) H-4号住居址

住居址 第41図

本址はD-4グリッドに位置する。

重複関係は持たない。

東西2.86m南北3.30mの隅丸長方形
プランを呈し、床面積は8.6m²を測る。
長軸方向は真北を指す。

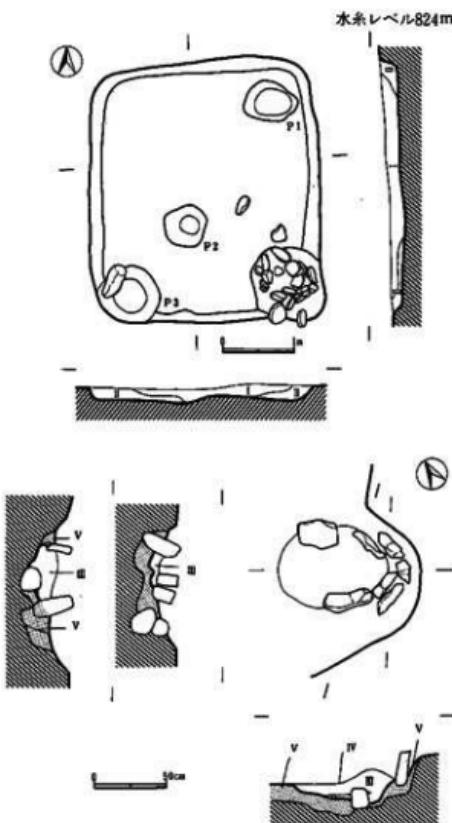
壁高は14cm~22cmを測り、北から南
へ向かうほどレベルを減じる。壁溝は
持たない。

床は全面に貼床が施され、堅固で概
ね平坦な面を成す。

ピットは3個が検出された。主柱穴
に該当するものはない。北東隅から南
西隅の対角線上に並ぶP₁₋₃は貯蔵穴
的なピットと考えられる。

カマドは南東隅を切り込み突出させ
て付設される。袖から煙道の構築材の
芯に軽石と安山岩を馬蹄状に配し、粘
土で成形したカマドのようであるが、
天井・器設部分は完全に崩壊して疊が
散乱しており旧状を止めない。また、
天井・袖の成形粘土は片づけられたの
か見当たらない。中央に支脚石を置く、
良く焼け込んだ、火床面上には灰（5
層）が厚く堆積する。

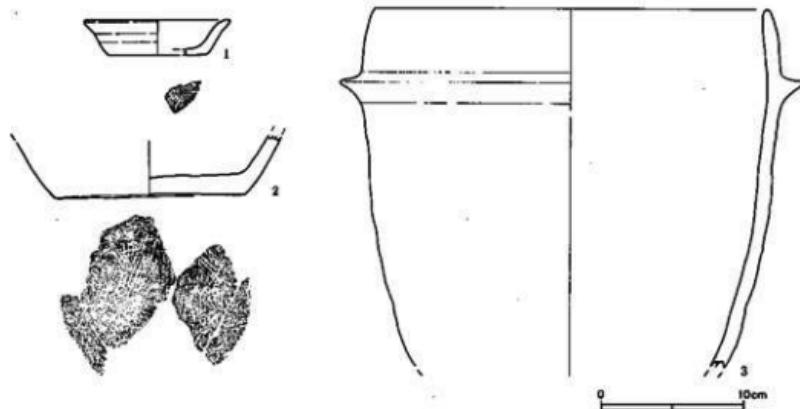
覆土は、2層からなる。I層は堅穴
住居の中央部にレンズ状に堆積する黒
褐色土（10YR3/2）径2~5mmのバミ
スを含む。II層はI層にロームの加わ
った暗褐色土である。



第41図 H-4号住居址実測図 (1:80)

H-4号住居層説明

- I層 黒褐色土(10YR3/2)
径2~5mmのバミスを含む。
- II層 暗褐色土(10YR3/3)
径2~5mmのバミス、ローム粒少混含。
- III層 灰白色土(2.5Y8/1)
灰層。
- IV層 明赤褐色土(5YR5/6)
焼土層。
- V層 構築土
焼土を多量に含む暗褐色土(5YR3/2)と
ロームを多量に含む褐色土(10YR4/4)と
黒色土(10YR2/1)のブロック



第42図 H-4号住居址出土遺物 (1:4)

第24表 H-4号住居址 出土土器観察表 (平安時代の土器)

部品 番号	器種	部位	法 量	器形の特徴	調 整	粘 土	色 調		出土 位置	備 考
							外 面	内 面		
1 (回)	小皿 (土)	口～ 底部	(9.9) 2.4 (6.8)	口縁部外反して開く。 平底。	内外面ロクロナデ。底部糸切り。	白色粒子 風化岩片	にふい青褐色 7.SYR 5/4	青色 10YR 4/6	H-4 IV区	
2 (回)	羽釜 (土)	底部	— 12.8	平底。	ナデ。	白色粒子 風化岩片	埋赤褐色 SYR 3/3	にふい赤褐色 SYR 4/4	H-4 I山区	
3 (回)	羽釜 (土)	口～ 胴部	— — —	まちがい。	ナデ。	白色粒子 風化岩片	埋赤褐色 SYR 3/3	にふい赤褐色 SYR 4/4	H-4 I山区	

遺 物 第42図

覆土中・床面上・ピット内から土師器片が多量に出土したが、器形推定できるものは少ない。器種は小皿・羽釜などがある。図示したものは3点である。

小皿1は口縁部が外反して開く平底品である。底部は糸切りがなされる。

2・3は羽釜。2は底部片、3は口～胴部の破片で直径27cmを測る。口縁下には貼り付けられた鈎が全周する。この他、ロクロ調整の要の胴部片が混入している。

時 期

以上の出土土器の特長から、本址は平安時代11世紀中頃に帰属する住居と考えられる。

(5) H-5号住居址

住居址 第43図

本址はE-4グリッドに位置する。

重複関係は持たない。

東西2.82m南北3.16mの隅丸長方形
プランを呈し、床面積は7.4m²を測る。
長軸方向はN-11°-Eを指す。

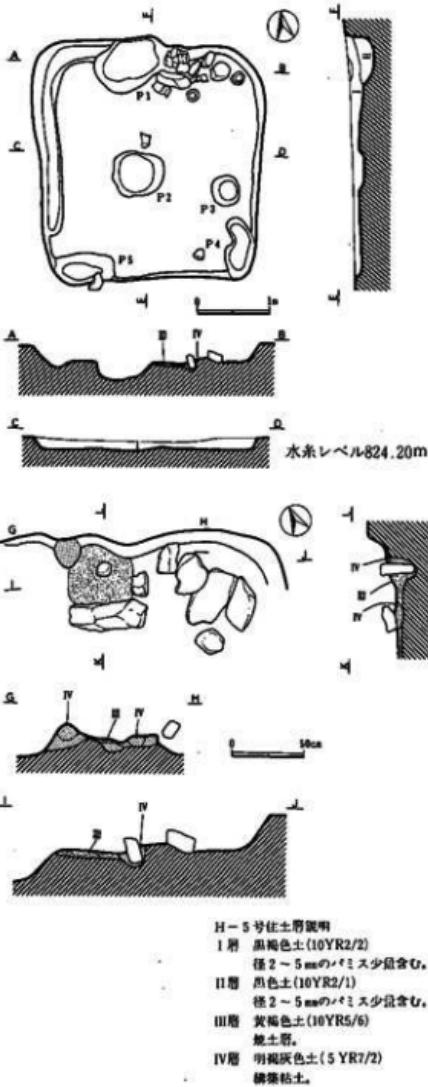
壁高は8cm~20cmを測り、北から南
へ向かうほどレベルを減じる。壁溝は
北壁の西側から西壁にかけて掘削され、
幅20cm以上をもつ太いものである。

床面は全面に貼床が施され、堅固で
概ね平坦な面を成す。

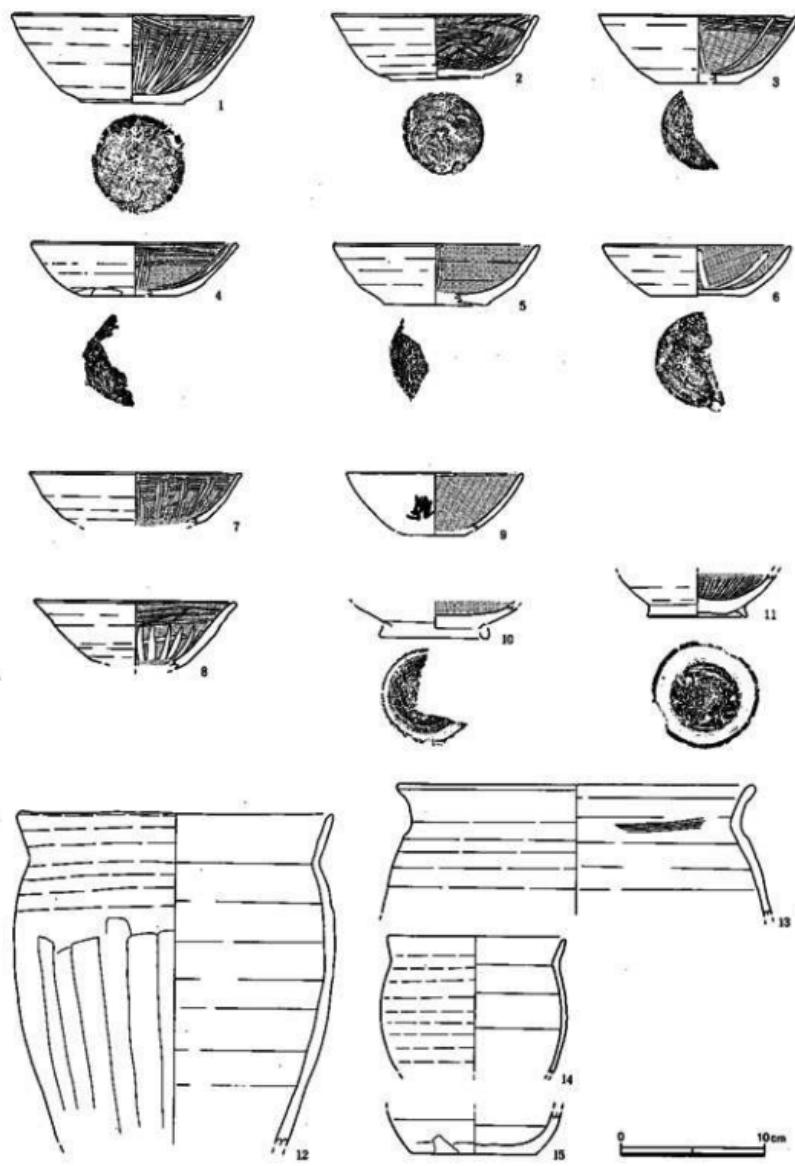
ピットは5個が検出された。主柱穴
に該当するものはない。カマド西脇に
あるP₁は大きなもので92×72cm、深さ
26cmを測る。カマドに付随する貯蔵穴
的なピットと考えられる。この他のピ
ットについては機能が明確でない。

カマドは北壁中央やや東寄りに付設
される。煙道部の北壁への切り込みは
ごくわずかである。崩壊・流出が著し
いため、旧状は把握できないが、袖と
天井部は主に黒褐色土(6層)と白色粘
土(5層)を用い、若干の軽石等の石
材で補強して成形したもので、器設部
には袖から袖へ細長い安山岩を渡して
いる。火床部は真っ赤に焼け込み、頻
繁な使用が明確である。

覆土は、おおむね黒褐色土I層から
なる。P₁に充填されるII層は更にきめ



第43図 H-5号住居址実測図



第44図 H-5号住居址出土遺物(土器) (1:4)

細かく黒色土となる。

遺物 第44・45図

覆土中・床面上・ピット内から土器器が出土している。出土量は割合多い。

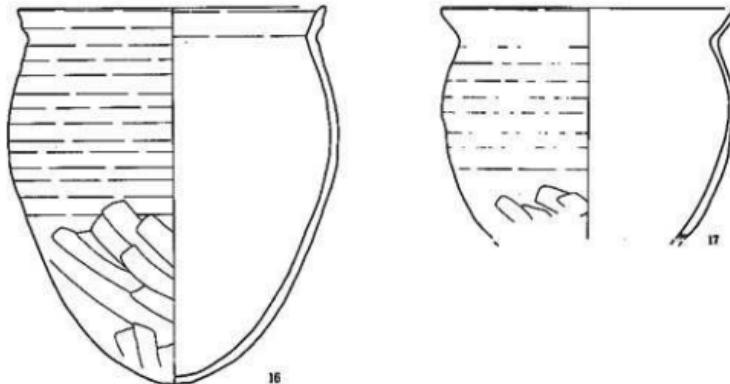
器種は壺・碗・甕などがある。壺1～9はいずれも平底の製品で、内面は黒色処理される。口縁部の直径は2～9が14cm内外でそろっているが、1は16.4cmと大振りである。また、内面調整は1・2・7・8は黒色処理の後、ヘラミガキが丁寧になされるのに対し、3・4・5・6は放射状の暗文が施されるにとどまる。意味不明の墨書きがされる9も小片のため、明らかでないがおそらく放射状暗文が施されるものであろう。底部は1・2・3・5が糸切りのまま未調整、4がヘラケズリされる。

碗はいずれも口縁部を欠くため、形態不明である。内面は黒色処理されたのち、丁寧なヘラミガキがなされる。

甕はいずれもロクロ調整される。12は口縁部にわずかな外稜を持つ受け口状を呈し、胴部中位上方から縱方向のヘラケズリが施される。13は口縁部が単純に外反する。14は口縁部がやや内湾気味に外反する小型品である。

時期

以上の出土土器から本址は9世紀末から10世紀初頭に帰属する住居と考えられる。



第45図 H-5号住居址出土遺物〈土器〉(1:4)

第25表 H-5号住居址 出土土器観察表〈平安時代の土器〉

件番	基種	部位	法 量	器形の特徴	調 整	胎 土	色 調		焼成 度	出土 位置	備考
							外 面	内 面			
1	平 (丸)	定形 (土)	16.4 7.0 6.0	口縁部は内側して開く。 内外面クロナダ。内面黑色処理の ち丁寧なヘラミガキ。底部赤切り。		白色粒子 風化岩石片	黒褐色 7.5YR 2/2	黑色 1.7/1	良	H-5	
2	平 (丸)	定形 (土)	(14.0) 4.4 (6.2)	口縁部は内側して開く。 内外面クロナダ。内面黑色処理の ち丁寧なヘラミガキ。底部赤切り。		白色粒子 風化岩石片	暗褐色 10YR 3/3	黒褐色 10YR 2/2	良	H-5 No.2	
3	平 (丸)	口ー 底部 (土)	(13.6) 4.5 (5.5)	口縁部は内側して開く。 内外面クロナダ。内面黑色処理の ち放射状暗文。底部赤切り。		白色粒子 風化岩石片	にじい褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 4/2	良	H-5 No.12	
4	平 (丸)	口ー 底部 (土)	(14.0) 3.6 (6.5)	口縁部は内側して開く。 内外面クロナダ。内面黑色処理の ち放射状暗文。底部ヘラケズリ。		白色粒子 風化岩石片	赤褐色 5YR 4/6	にじい赤褐色 5YR 4/3	良	H-5 No.8	
5	平 (丸)	口ー 底部 (土)	(14.0) 4.1 (7.1)	口縁部は内側して開く。 内外面クロナダ。内面黑色処理の ち放射状暗文。底部赤切り。		白色粒子 風化岩石片	にじい褐色 5YR 5/4	黑色 7.5YR 1.7/1	良	H-5 No.12	
6	平 (丸)	口ー 底部 (土)	(12.8) 3.3 (6.4)	口縁部は内側して開く。 内外面クロナダ。内面黑色処理の ち放射状暗文。底部ヘラケズリ。		白色粒子 風化岩石片	褐色 7.5YR 4/3	にじい褐色 7.5YR 5/4	良	H-5 カマド	
7	平 (丸)	口ー 体部 (土)	(14.4) — —	口縁部は内側して開き、 底部で外反する。 平底。		白色粒子 風化岩石片	褐色 10YR 3/2	黑色 7.5YR 1.7/1	良	H-5 P.1	
8	平 (丸)	口ー 体部 (土)	(13.9) — —	口縁部は内側して開き、 上位で若干外反する。 平底。		白色粒子 風化岩石片	褐色 7.5YR 4/4	黑色 7.5YR 2/1	良	H-5 No.12	
9	平 (丸)	口ー 体部 (土)	(12.0) — —	口縁部は内側して開く。 内外面クロナダ。内面黑色処理。		白色粒子 風化岩石片	にじい褐色 7.5YR 5/4	黑色 10YR 2/2	良	H-5 出雲あり。	
10	浅 (丸)	体ー 底部 (土)	— — 6.8	—	内外面クロナダ。内面黑色処理の ち丁寧なヘラミガキ。底部ナダ。	白色粒子 風化岩石片	褐色 7.5YR 7/6	黑色 1.7/1	良	H-5 No.7	
11	浅 (丸)	体部 (土)	— — —	—	内外面クロナダ。内面黑色処理の ち丁寧なヘラミガキ。底部ナダ。	白色粒子 風化岩石片	褐色 7.5YR 6/6	黑色 10YR 2/1	良	H-5 IIIIV区	
12	浅 (丸)	口ー 底部 (土)	21.4 — —	口縁部は外側をわずかに 残し、受け口状を呈する。 底部は上位で若干強張る。	内外面クロナダ。外側底部中位以下 ナダのヘラケズリ。	白色粒子 風化岩石片	明赤褐色 SYR 6/6	赤褐色 2.5YR 4/6	良	H-5 No.5, 9	
13	浅 (丸)	口ー 底部 (土)	(24.4) — —	口縁部は外反する。	内外面クロナダ。	白色粒子 風化岩石片	褐色 SYR 6/6	暗褐色 SYR 3/3	良	H-5 No.5	
14	浅 (丸)	口ー 底部 (土)	(12.2) — —	口縁部内側気味に外反 する。	内外面クロナダ。	白色粒子 風化岩石片	にじい赤褐色 2.5YR 4/4	暗褐色 SYR 3/2	良	H-5 II区	
15	浅 (丸)	口ー 底部 (土)	— — 8.4	—	内外面クロナダ。底辺周辺ヘラケズ リ。	白色粒子 風化岩石片	にじい赤褐色 SYR 4/4	褐色 7.5YR 4/3	良	H-5 II区	
16	浅 (丸)	口ー 底部 (土)	21.2 25.5	口縁部は外側気味に外 反し、底部は中位で少 なくらむ。	内外面クロナダ。外側脚部～底部は 斜め方向のヘラケズリ。	白色粒子 風化岩石片	暗褐色 10YR 3/3	灰褐色 7.5YR 4/2	良	H-5 No.4- 5-6-10	
17	浅 (丸)	口ー 底部 (土)	21.2 25.5	口縁部は内側気味に外 反し、底部は中位で少 なくらむ。	内外面クロナダ。外側脚部～底辺は 斜め方向のヘラケズリ。	白色粒子 風化岩石片	にじい黄褐色 10YR 6/4	黄褐色 10YR 7/3	良	H-5 No.3 I区	

(6) H-6号住居址

住居址 第46図

本址はE-4グリッドに位置する。重複關係は持たない。

東西2.76m南北2.88mの隅丸方形プランを呈し、床面積は7.1m²を測る。長軸方向はN-10°-Wを指す。

壁高は14cm~30cmを測り、北から南へ向かうほどレベルを減じる。壁溝は持たない。

床面は全面に貼床が施され、堅固で概ね平坦な面を成す。

ピットは2個が検出された。いずれも西壁下にあり、主柱穴に該当するものはない。南北のピットは径60~70cmと大型で、床面からの深さは23cmを測る。

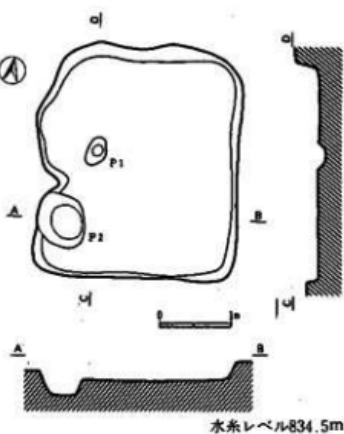
カマドは設置されていなかった。

遺物と時期 (第47図)

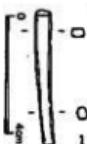
覆土中・床面上に土師器と鉄器が少量散在している。

土師器の器種は小皿・武骨な造りの甕・羽釜などがある。いずれも小破片のため図示し得たものはないが、11世紀中頃の土器セットと考えられる。したがって、本址はこの時期に帰属すると考えられる。また、鉄器は釘か鐵の基部分と考えられるもの(第47図)が出土している。

なお、本址は火處が欠如している点で下荒田遺跡内で検出されている同時期と考えられる住居とは異なる性格を考えなければならないが、ここではとりあえず「竪穴住居」として記載することにした。



第46図 H-6号住居址実測図



第47図 H-6号住居址出土遺物〈鉄器〉(1:2)

(7) H-7号住居址

住居址 第48図

本址はC-3グリッドに位置する。

重複関係は持たないが、南東部は擾乱されている。

東西3.72m南北2.84mの隅丸長方形プランを呈し、推定で床面積は9.4m²を測る。長軸方向はN-27°-Eを指す。

壁高は6cm~18cmを測り、床面からは緩い傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面は全面に貼床が施されているが、脆弱で凹凸も多い。

ピットは5個が検出された。主柱穴

に該当するものはないと思われる。カマド西脇にあるP₁H-5号住居址のものと同様カマドに付随するものであろう。この他のP₂₋₅の機能については良くわからない。

カマドは北壁中央に付設される。煙道部の北壁への切り込みはごくわずかである。崩壊過程で人為的に構築材をいすこかへ投棄したためか、カマドの残骸はほとんど残っていない。焼け込んだ火床面の中央には面取りされた軽石の支脚石が立てられていた。

覆土は、おおむねⅠ層黒色土(10YR2/1)からなる。

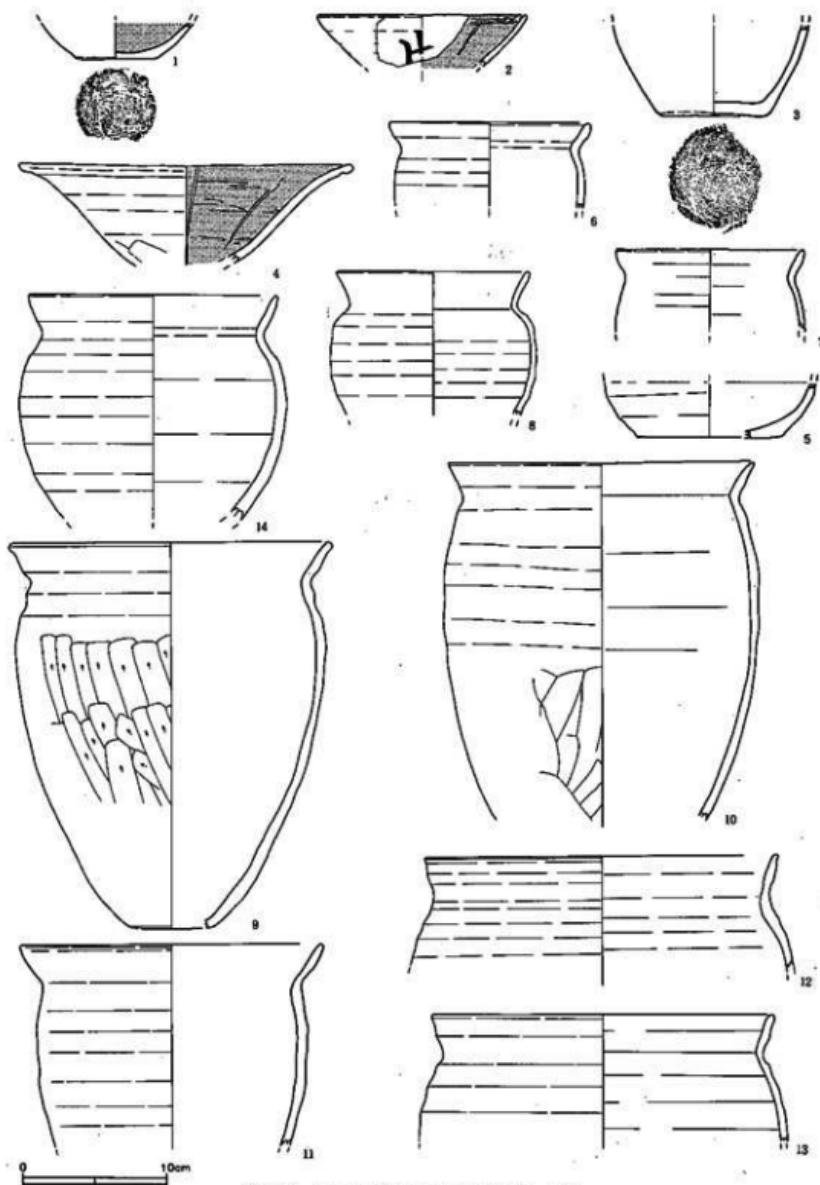
遺物 第49・50図

覆土中・床面上・ピット内から土師器片が多量に出土している。

土師器の器種には壺・鉢・甕がある。壺は全容を知り得るもののがなく、内面に黑色処理される平底品1・2がみられる程度である。

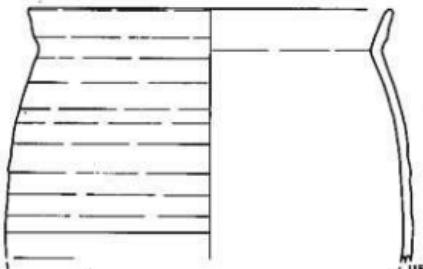
第26表 H-7号住居址 出土土器観察表(平安時代の土器)

査定 番号	器種	部位	法 蓋	器形の特徴	調 整	附 土	色 調		地 点	出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面			
1 (III) (土)	壺	体~ 底部	— (5.4)	平底。	内外面クロナナ。内面黑色処理。	白色粒子 風化岩石	褐色	黑褐色	H-7 Ⅱ No.2	良	
2 (III) (土)	壺	口 縁部	(14.2) — —	口縁部内側して聞く。	内外面クロナナ。内面黑色処理のみ ち波状暗文。	白色粒子 風化岩石	にじむ褐色	黑色	H-7 Ⅱ 1.7/1	良	伴存あり 田区



第49圖 H-7號住居址出土遺物 (1:4)

甕はいずれもロクロ調整である。口縁部の直径13cm前後の小型品6・7・8と、約17cmの中型品14は丈の低い寸胴な器形である。6・7・14は口縁部が外縁を持ち受け口状を呈するが、8は単純に外反する。直径20~25cmの大型品9~13はいずれも口縁部に外縁を持ち、胴部中位以下は9・10のようにヘラケズリが施されると考えられる。



第50図 H-7号住居址出土遺物 (1:4)

時期 以上の出土土器群から、本址は11世紀中頃に帰属する住居と考えられる。

3	甕 (田) (土)	縁~ 底部 7.2	平底。 内外面ロクロナデ。底部丸切り。	白色粒子 風化岩片	にじい黄褐色 10YR 6/3	にじい黄褐色 10YR 6/4	H-7 No.3 カマド 1区		
4	甕 (田) (土)	口~ 底部 (22.8) —	口縁外反して同く。	内外面ロクロナデ。内面墨色処理の ち雄々ヨコミガキと放射状擦文。外面 底盤下位へラケズリ。	白色粒子 風化岩片	褐色	黑色	H-7 カマド	
5	甕 (田) (土)	縁~ 底部 (9.8) —	平底。 内外面ロクロナデ。底部へラケズリ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 SYR 5/6	明褐色	良 H-7 1区		
6	甕 (田) (土)	口~ 底部 (13.6) —	口縁部は外縁をもち、 受け口状を呈する。	内外面ロクロナデ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 SYR 5/6	明赤褐色 2.5YR 5/6	H-7 カマド	
7	甕 (田) (土)	口~ 底部 (12.8) —	口縁部は外縁をもち、 受け口状を呈する。	内外面ロクロナデ。	白色粒子 風化岩片	灰褐色	にじい褐色 7.5YR 4/2	にじい褐色 7.5YR 5/4	H-7 カマド
8	甕 (田) (土)	口~ 底部 (13.0) —	口縁部は外反する。底 盤は上位で横くぼむ。	内外面ロクロナデ。	白色粒子 風化岩片	黒褐色	黒褐色	H-7 No.6 1区 カマド	
9	甕 (田) (土)	口~ 底部 (21.8) 26.4 (5.8)	口縁部は外縁をもち、 受け口状を呈する。底 盤は上位で横くぼむ。	内外面ロクロナデ。内面胴部ヨコナデ。 外面胴部上位以下へラケズリ。	白色粒子 風化岩片	にじい褐色 7.5YR 5/4	褐色	H-7 1区 カマド	
10	甕 (田) (土)	口~ 底部 (26.6) —	口縁部は外縁をもち、 受け口状を呈する。底 盤は横くふくらむ。	内外面ロクロナデ。外面胴部中位以下へ ラケズリ。	白色粒子 風化岩片	明褐色 2.5YR 5/6	明褐色 SYR 3/4	H-7 カマド	
11	甕 (田) (土)	口~ 底部 (26.6) —	口縁部は外縁が若干横 る。底盤は横くふくら む。	内外面ロクロナデ。	白色粒子 風化岩片	にじい赤褐色 SYR 5/4	にじい赤褐色 SYR 4/3	H-7 II区 カマド	
12	甕 (田) (土)	口~ 底部 (23.6) —	口縁部は外縁をもち、 受け口状を呈する。底 盤は横くふくらむ。	内外面ロクロナデ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 2.5YR 5/6	にじい赤褐色 SYR 5/4	H-7 I区 カマド	
13	甕 (田) (土)	口~ 底部 (24.4) —	口縁部は外縁をもち、 受け口状を呈する。底 盤は横くふくらむ。	内外面ロクロナデ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 SYR 5/6	にじい赤褐色 2.5YR 5/4	H-7 II区 カマド	
14	甕 (田) (土)	口~ 底部 (16.8) —	口縁部は外縁をもち、 受け口状を呈する。底 盤は球状にふくらむ。	内外面ロクロナデ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 SYR 5/6	にじい赤褐色 7.5YR 5/4	H-7 No.5	
15	甕 (田) (土)	口~ 底部 (24.8) —	口縁部は外縁をもち、 受け口状を呈する。底 盤は横くふくらむ。	内外面ロクロナデ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 SYR 5/6	にじい赤褐色 2.5YR 5/4	H-7 I区 カマド	

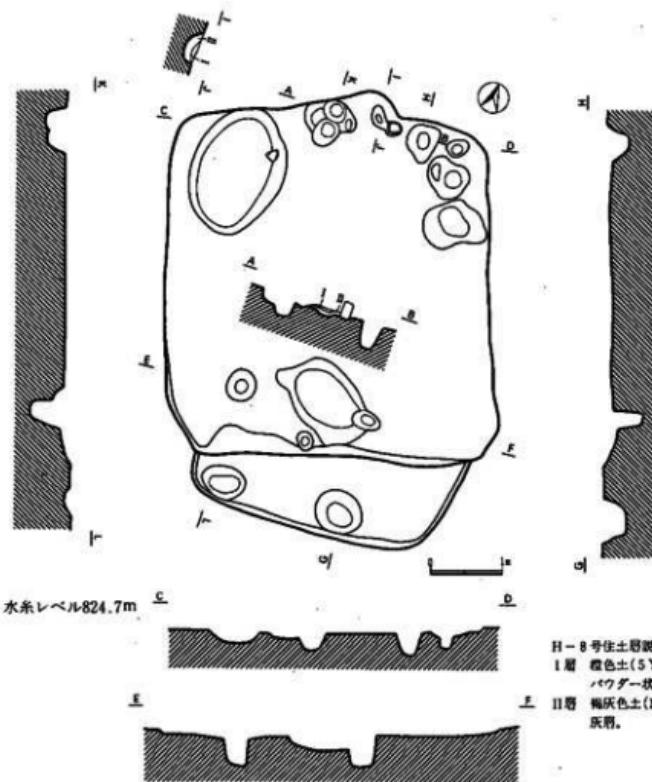
(8) H-8号住居址

住居址 第51図

本址はD-1グリッドに位置する。プラン内にD-9号土坑があるが、重複関係を持つものであるのか、住居に付属するものであるのかわからない。したがって、新旧関係もわからない。

東西4.44m南北4.68mの隅丸方形プランを呈し、床面積は20.4m²を測る。長軸方向はN-25°-Wを指す。

本址の上面は從前からかなり耕作が深くはいっていたため、擾乱が著しく、壁は南に若干残る程度で、壁高は10cm内外を測る。残っている壁体は堅固である。壁溝は持たないようだ。



第51図 H-8・Y-5号住居址実測図

床面も同様で、大方が削り取られてしまっている。このため第51図に示されているピットは大方が床下のものであろう。

カマドは北壁の中央に付設されているが、東側の袖石が残るほかは完全に崩壊しているため、旧状は明らかでない。

覆土は、黒色土（I層10YR1.7/1）が確認された。

遺物 第52・53図

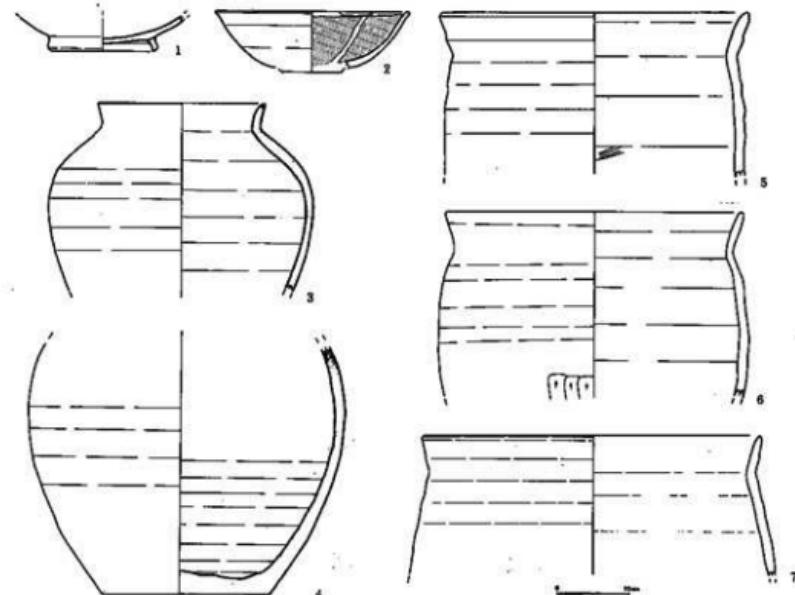
覆土中・床面上・ピット内から土器が少量出土している。土器の種類には灰釉陶器・土師器がある。

灰釉陶器の器種には皿1があり東濃系光ヶ丘1号窯式期の製品である。

須恵器の器種には長頸壺3があり、胴部上位以下を欠損している。

土師器の器種には壺・甕がある。壺2は平底で内面に黒色処理が施される。処理の後、放射状の暗文が加えられている。

甕4～6はいずれもロクロ調整である。口縁部の直径20cm前後の大型品で、口縁部が外縁をも



第52図 H-8号住居址出土遺物〈土器〉(1:4)

第27表 H-8号住居址 出土土器観察表(平安時代の土器)

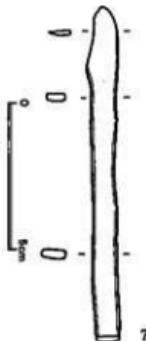
探査 番号	器種	部位	法 身	器形の特徴	調 整	胎 土	色 調		地成 分	出土 位置	備 考
							外 面	内 面			
1 (火)	罐	体～ 底部	— — 7.0	高台盤三日月状。	内外面ロクロナダ。	焼過されて いる	灰黄色	暗灰黄色	H-8	火	
2 (火) (上)	平 口～ 底部	[13.0] — —	口縁部は内側で開き、 周囲は外反する。	内外面ロクロナダ。内面黑色処理の ち放射状突起。	白色粒子 風化岩片	にぶい赤褐色 STR 5/4	暗褐色	H-8	火	カマド	
3 (火) (下)	直脚盆	脚～ 底部	— — (11.4)	脚部は瘤球状。	内外面ロクロナダ。底部へラケズリ。	白色、黑色 粒子	褐色	暗灰色	H-8	火	カマド
4 (火) (土)	甕	口～ 脚部	[21.0] — —	口縁部は外傾をもち、受 け口状を呈する。脚部は ほとんどふくらまない。	内外面ロクロナダ。	白色粒子 風化岩片	にぶい赤褐色 STR 5/4	STR 4/3	H-8	火	カマド
5 (火) (土)	甕	口～ 脚部	29.4 — —	口縁部は外傾はほとん どのこらず、脚部は軽 くふくらむ。	内外面ロクロナダ。外面脚部下位へラ ケズリ。	白色粒子 風化岩片	赤褐色	赤褐色	H-8	火	
6 (火) (土)	甕	口～ 脚部	[23.0] — —	口縁部は外傾を持ち、 受け口状を呈する。脚 部は軽くふくらむ。	内外面ロクロナダ。	白色粒子 風化岩片	明赤褐色 STR 5/4	にぶい赤褐色 STR 5/4	H-8	火	カマド

ち、受け口状を呈する。

鉄器は鉄鎌とも考えられる7がある。

時 期

以上の出土土器群から、本址は9世紀後半から10世紀中頃に帰属する住居と考えられる。



第53図 H-8号住居址出土遺物(鐵器)(1:2)

4 土坑とその他の遺構

(1) D-1~14号土坑

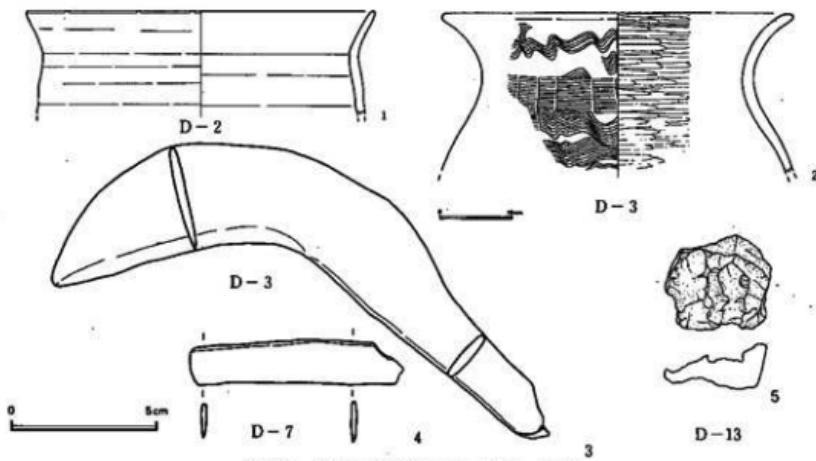
遺構・遺物 第54図~第56図

本遺跡からは14基の土坑が検出された。これらは調査区の北半分、すなわち弥生・平安時代の竪穴住居址群が集中的に分布するそばに存在する。このことから、土坑の多くは3世紀・10世紀・11世紀の集落に付随する蓋然性が高いものが多いと判断される。しかし、土坑内の出土土器中には若干の縄文中・後期土器が混ざっているので土坑の時間的位置付けにはなお、慎重でなければならない。

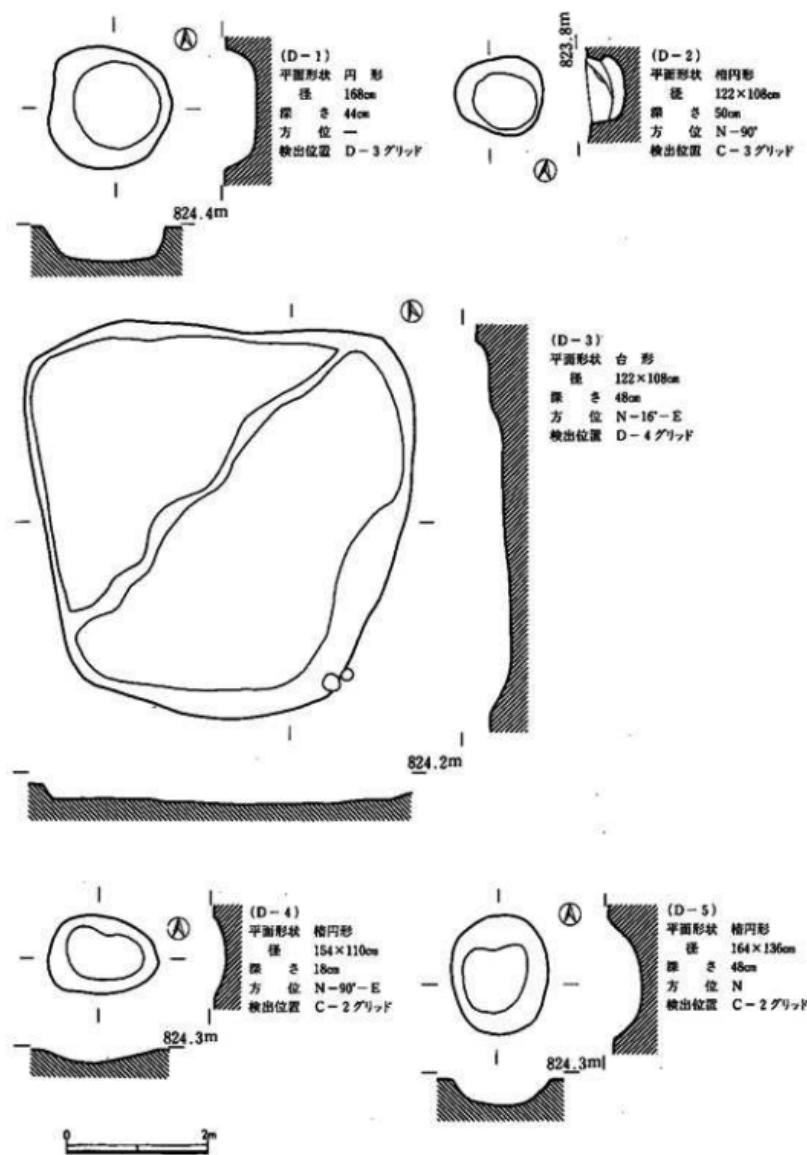
(2) M-1号溝状遺構

遺構 第3図参照

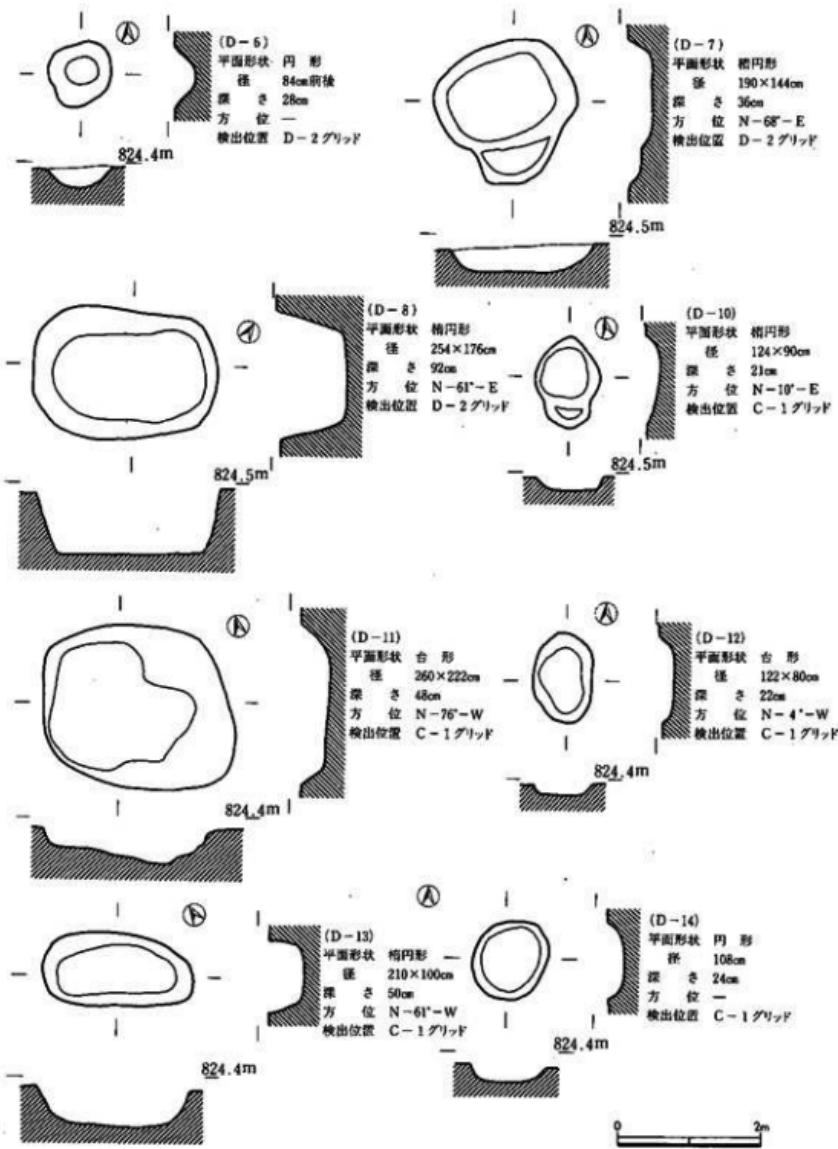
本址はD-2グリッドから検出された。H-2号住居址北西隅付近から台地縁辺へ長さ13mにわたって伸びる溝状遺構で、検出部分の中央部西側が特に壅み、60cm程度の深さをもつ。平均的な溝幅は50cm前後であるが、深く壅む箇所は2mと幅広くなる。第10~20図に示した縄文時代早期の土器はこの壅みから出土した。



第54図 土坑出土遺物（土器、鐵器、石器）



第55図 D-1～5号土坑実測図



第56図 D-6～14号土坑実測図

IV

總 括

1 下荒田遺跡早期第Ⅰ群土器について

中沢道彦

下荒田遺跡調査の成果として、早期第Ⅰ群土器と分類したおそらく田戸上層式に後続しうる沈線施文を主とする土器群の良好な資料が検出された点が挙げられる。本稿では中部高地の該期の土器研究の動向に簡単に触れた後、下荒田遺跡早期第Ⅰ群を田戸上層式に後続する土器群と位置づけた根拠について述べ、そこから派生する問題点、今後の課題の整理をはかりたい。

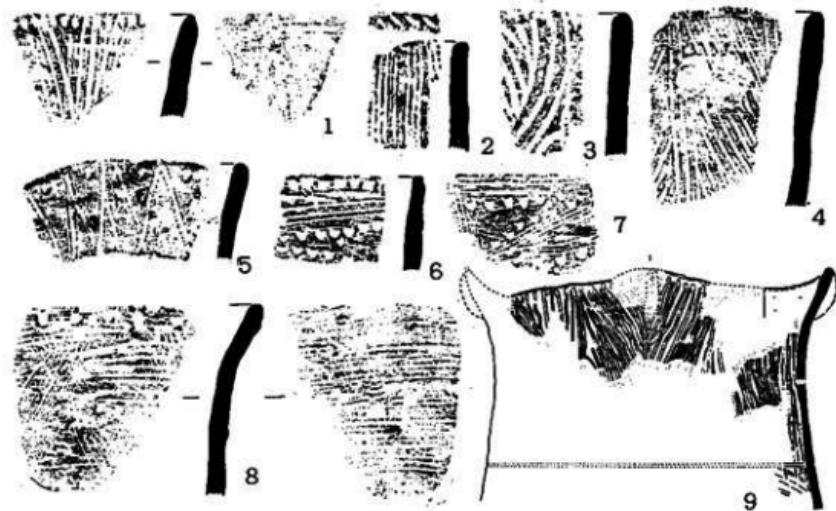
関東地方で1980年代前半において早期末の編年構築とあいまってその存否が論議されていた子母口式については、その後、その研究史の再検討作業、標本資料の提示、新資料の蓄積などの研究動向からその存在のみならず、その型式内容もある程度確認されるに至った。また最近では金子直行氏などの論稿に代表されるように、田戸上層式から子母口式、野島式にかけての型式変遷が東北地方の該期土器型式との相互影響関係までを踏まえて論じられている。

一方、中部高地においては該期の研究は停滞の観もあった。前述の1980年代前半の早期末の編年構築の際にそれまで中部高地の子母口式併行とされた絶条体圧痕文土器の大半は早期末の土器として位置づけられたが、その動向の中で特筆すべきは小林秀夫による茅野市判ノ木山西遺跡出土資料の分析である。

判ノ木山西遺跡の報告において小林は「判ノ木山遺跡早期第3類」「早期第4類」と分類した範また板状工具で内外面条痕調整され、範状工具や竹管などで沈線や刺突が施される土器群（第57図）などを「子母口式、野島式」併行に位置づけ、その根拠として口縁部の刺突、擦痕調整などを挙げた。阿部芳郎らによる山梨県古屋敷遺跡の調査により、その報告で「古屋敷遺跡早期第IV群」と分類された有段、尖底、縄文地文の土器や断面外削状の無文土器などが中部高地における野島式併行の土器として問題提起された今日では、「判ノ木山遺跡早期第3類・第4類」が野島式まで併行するかについては疑問の余地もあるが、口縁部の刺突に注目された小林の視点は子母口式の最近の研究動向を鑑みるに極めて先見の明のある指摘と評価されるべきであろう。

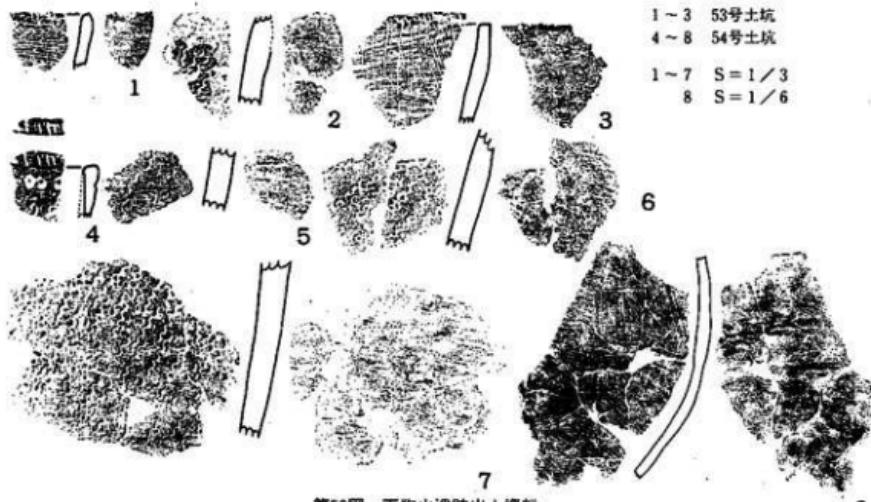
小林の見解も從来決して評価されていた訳ではなく、「判ノ木山遺跡早期第3類・第4類」を早期に位置づける見解もあり、これまでその見解がわかっていた。しかし茅野市天狗山遺跡第53号、第54号土坑では「判ノ木山遺跡早期第3類・第4類」が田戸上層式の系統をひく貝殻腹縁が押圧された土器と共に共存した（第58図）。報告ではこれらを早期末としてあつかっているが、貝殻腹縁が押圧された土器は胎土、色調が中部高地の田戸上層式に類似し、纖維を多量に含む早期末の貝殻腹縁が押圧された土器とはそれらを異にする。田戸上層式、もしくは沈線が施されずに貝殻

腹縁のみが押圧される点を積極的に評価すれば型式学的に田戸上層式直後の資料と評価すべきであろう。それに共伴する「判ノ木山遺跡早期第3類・第4類」もそれに近似した時期の資料と現状では考えうる。



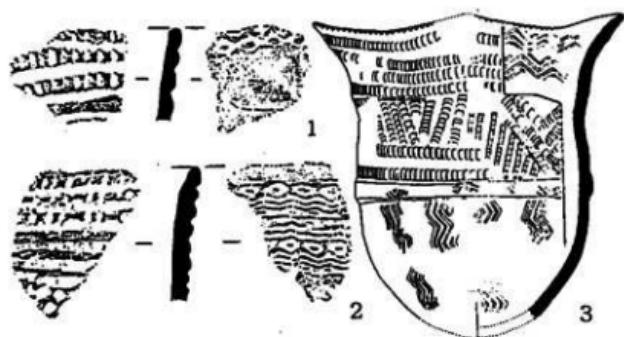
第57図 判ノ木山西遺跡早期第3類 1~8 S=2/5
9

1~3 53号土坑
4~8 54号土坑
1~7 S=1/3
8 S=1/6



第58図 天狗山遺跡出土資料

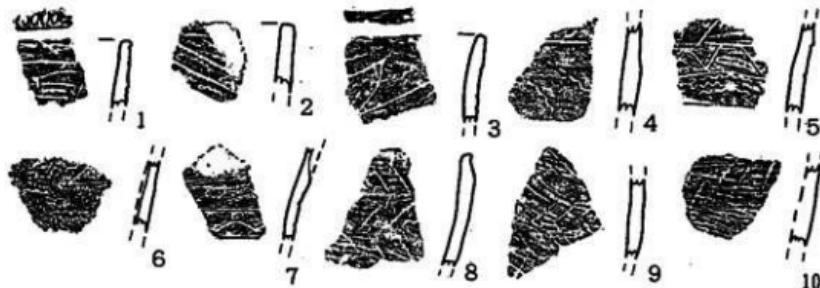
8



第59図 相木式土器

他方、中部高地における該期の土器編年研究の課題として所謂相木式（第59図）の問題も留意すべき課題であろう。所謂相木式は御代田町と同じ佐久地方の北相木村柄原岩蔵遺跡出土資料を基準に設定された土器型式であるが、長野県内では南信地方に主として分布し、類似資料は岐阜県九合洞穴遺跡、向畠遺跡など東海地方でも確認される。また近畿の穗谷式とも所謂相木式は類似し、その概念規定も今後の資料蓄積如何ではその再編成を余儀なくされるであろうが、現状では所謂相木式では半截竹管による押引文が目立つようである。穗谷式の研究動向は守屋豊人によると、高山寺式に包括、もしくは併行させる見解と高山寺式に後続させる見解に分かれるようであるが、所謂相木式について宮下健司は岐阜県向畠遺跡の層位差出土例を根拠に高山寺式に後続させる見解を示している。高山寺式は長野県内においては南信地方で主体的に分布するが、この時期、北信・東信地方では田戸上層式が主体的に分布する。これは御代田町塚田遺跡の調査で筆者も確認した事項であるが、所謂相木式が高山寺式に後続するとするならばその編年的位置づけも田戸上層式後半以降のものとなろう。ちなみに茅野市判ノ木山西遺跡では僅か数点はあるが、所謂相木式が「判ノ木山遺跡早期第3類・第4類」と地点、層位を違えずに検出されている。

さて、これまで中部高地の田戸上層式以降、子母口式に併行しうる土器群についての研究動向、その見通しについて簡単に触れた。しかし、下荒田遺跡出土の早期第I群土器については「判ノ木山西遺跡早期第3類・第4類」や所謂相木式とその様相を異にする。「判ノ木山遺跡早期第3類」と類似する資料は数点のみである。また御代田町塚田遺跡出土の田戸上層式（第60図）とも様相を異にする。また出土状況の面では包含層出土が主であり、積極的に一括資料と評価できるものではない。しかし今回、報告において早期第I群と分類し、田戸上層式に後続する土器群とあえて仮説として位置づけた。以下、下荒田遺跡早期第I群の内容を再確認した後にその編年的位置



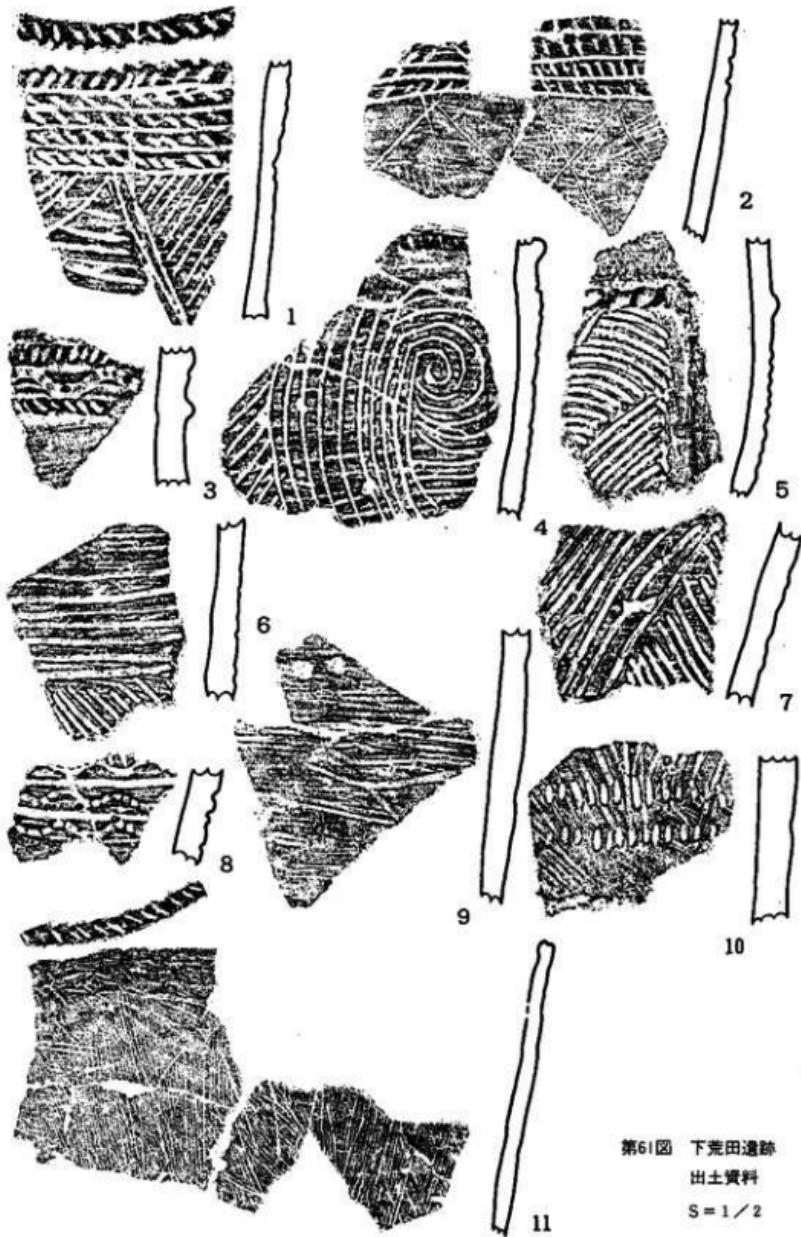
第60図 塚田遺跡出土資料

づけを行った根拠を述べる。

本遺跡早期第Ⅰ群についてはM-1やH-3に多く分布するが、包含層出土が主である。便宜的ながらも以下のとおり1類から8類に分類した(第61図)。

- 1類 口縁部に横方向数条の平行沈線、平行沈線間には連続刺突が施されるものを一括した。その下部に幾何学的な集合沈線、格子目状の沈線等が施されるものもある(第61図1・2)。
- 2類 口縁部横方向の隆帯に連続刺突が施されるものを一括した。2条の隆帯間に押引沈線が施されるもの、隆帯の下部に集合沈線が施されるものもある(同3・4)。
- 3類 縦方向、横方向の隆帯による区画内に集合沈線などが施されるものを一括した(同5)。
- 4類 沈線が施されるものを一括した。1~3類の破片の可能性も高いものも含む(同6・7)。
- 5類 押引沈線が施されるものを一括した(同8)。
- 6類 刺突が施されるものを一括した(同9)。
- 7類 刺突と沈線が施されるものを一括した(同10)。
- 8類 短沈線が施されるものを一括した(同11)。

本遺跡では鶴ヶ島台式、早期末、前期の資料も検出され、早期第Ⅰ群土器とも包含層出土であり、早期第Ⅰ群土器の出土状況に関する一括性も保証されている訳ではない。しかし本群を構成する1類から8類を概観する限り、各類で共通する属性を有する部分をもつ。例えば1類の口縁部の平行沈線間の連続刺突(第61図1・2)と2類の口縁部の隆帯上の連続刺突(第61図3)とでは同じ装飾効果をもつものと考え得るし、1類、2類の連続刺突の下部の集合沈線(第61図1~4)は3類の集合沈線、4類の集合沈線(第61図5~7)と共通する。2類の2条の隆帯間に小波状の押引沈線が施されるもの(第61図3)は5類でも平行沈線間に小波状の押引沈線が施さ



第61図 下荒田遺跡

出土資料

S = 1 / 2

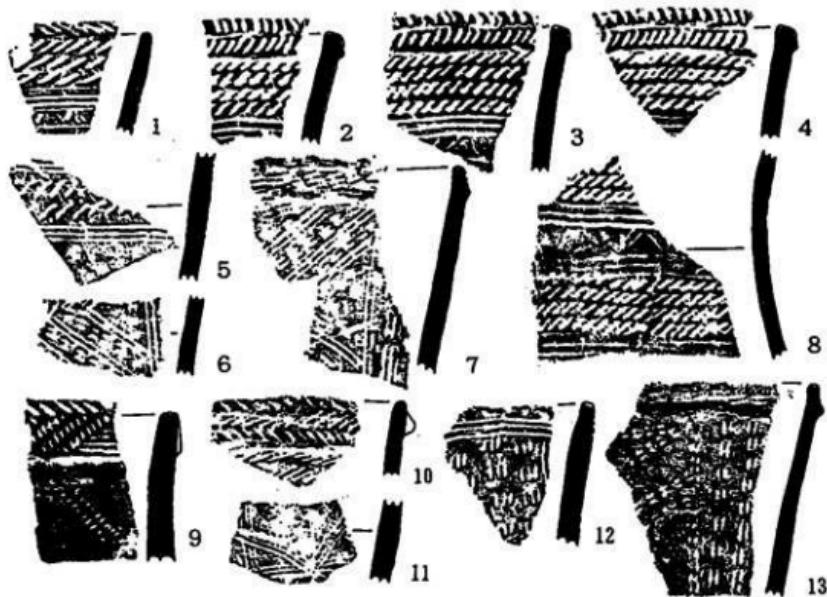
れるもの（第61図8）と関係があろう。また6類と7類では刺突で共通するし、その刺突手法は5類の押引沈線の手法や8類の短沈線の手法と近似するといえる。かつ1類から8類とも胎土に繊維を含み、外面は条痕調整などがなされ、内面は条痕調整、条痕調整の後にナテ調整などがなされる。このように1類から8類は各類でその諸属性の面で共通し、相互影響関係が認められるといえる。ここに1類から8類が極めて同時性の高い資料として本遺跡早期第I群土器と括り、指定する根拠がある。では本群の位置づけを如何に考えるべきか。

田戸上層式の良好の資料が検出された御代田町塚田遺跡の報告で筆者は、同じ佐久地方の望月町新水遺跡での状況をも踏まえ、長野県内の東・北信地方では田戸上層式が主体的に分布し、その特徴として1~2mm前後の幅の原体による沈線、貝殻腹縁による押圧、外面条痕調整、胎土には繊維を微量に含む点などを指摘した。しかし、塚田遺跡出土の田戸上層式と本遺跡早期第I群土器とではその様相を異なる。本群が田戸上層式の系統をひく土器である点は想像に難くないが、両遺跡の距離関係を考えるに地域差・類型・系列差でこの事象を考える余地はない。塚田遺跡出土の田戸上層式と本群については、現状ではそこに型式学的な連続性を説明できる部分は少ないが、まずは時期差を検討する必要があろう。では本群の諸属性からその時期比定の手掛かりとなり得る部分について、周辺地域での研究成果をも踏まえて検討する。

まず1類の口縁部に横方向数条の平行沈線、平行沈線間には連続刺突が施されるものであるが、連続刺突はペン先状工具で斜方向になされる。口端部と外面1列目の連続刺突では刺突の方向を異にし、また外面の連続刺突では1列目と2列目以下とで方向を異にするもの（第61図1）、同一列内で方向を異にするもの（第61図2）もある。外面の斜方向の連続刺突は基本的に下から上になされるが、1列目と2列目以下で方向を違える例では1列目は上から下に、2列目以下は下から上になされる。土器扱いで列により製作者が土器を扱う位置を異にすると推定される。

さて1類については長野県内の既出資料では良好な類似資料が見当たらない。県外であえて類似資料を確認するならば、栃木県出流原小学校内遺跡（第62図）、茨城県石山神遺跡出土資料などが挙げられる。それらの資料と1類を比較すると、前者が角頭状工具で横から刺突されるのに対し、後者では前述の如くペン先状工具で下から上に、また上から下に刺突される。また胎土、色調も異なり、繊維も本類の方が多く含まれる。出流原小学校内遺跡、石山神遺跡出土資料は東南北部や新潟地方に分布する常世式、もしくは「常世1式直後」とされる土器からの影響が予想される。また、金子直行はこれらの資料について田戸上層式以降、子母口式までの位置づけの中でも考えられている。⁽¹⁾

2類の口縁部、横方向の隆帯に連続刺突が施されるものについては、1類の平行沈線間に連続刺突のものと意匠が共通する点は前述のとおりである。隆帯については塚田遺跡出土の田戸上層



第62図 出流原小学校内出土資料

式では確認されず、課題として残した属性である。ただし田戸上層式の特徴として、その型式設定の際に「太い隆線文様が見られる」と指摘された属性であり、2類のそれも田戸上層式からの系統を彷彿させる。また2類の隆帯間の小波状の沈線、隆帯下部の集合沈線、また3類の集合沈線、4類、5類、7類の小波状の沈線も同様である。

4類では事実記載第11図28の幅1mm前後の細沈線の土器が注目される。細沈線の土器は関東地方では田戸上層式に組成する他、子母口式でも組成する。

7類の第61図10の資料は二列の連続刺突による区画の上部に縦方向、斜方向に沈線が施される。刺突や沈線は同一原体のヘラ状工具でなされる。文様構成、ヘラ状工具による施文の点では「判ノ木山西遺跡早期第3類・第4類」と類似する。胎土では第61図10が纖維を含むのに対し、「判ノ木山西遺跡早期第3類・第4類」では金雲母を多量に含むなどの差異はあるが、「判ノ木山西遺跡早期第3類・第4類」の影響をうけた土器と認識すべき資料であろう。

さてこれまで1類から8類についてその同時性の可能性を確認した上で、各類で認識しうる田戸上層式からの系統、またそれらが田戸上層式以降に位置づけられる根拠について触れた。では

更に1類から8類全体、つまり早期第I群土器で指摘しうる属性について触れる。特筆すべきは内面条痕調整と胎土における繊維含入である。本遺跡早期第I群土器では内外面に条痕調整、条痕調整の後にナデ調整、またナデ調整される。塙田遺跡出土の田戸上層式では外面条痕調整は顕著であったが、内面条痕調整は確認されなかった。一方、本遺跡早期第I群土器では内面条痕調整が確認される。内面条痕調整は後続型式との連続性を考慮すると、より後出する属性と考えるべきであろう。また胎土の面では、塙田遺跡出土の田戸上層式では繊維が微量に含まれるが、本遺跡早期第I群土器では繊維の含有量が増加する。これも後続型式との連続性を考慮すると、より後出する属性とすべきであろう。内面条痕調整や胎土における繊維含有の面でも、少なくとも塙田遺跡出土の田戸上層式よりも下荒田遺跡早期第I群土器が新しくなる点は肯定できよう。

以上の根拠より筆者は本遺跡早期第I群土器が田戸上層式に後続する土器群と指定した。では最後にそれにより今後派生する問題、今後の課題について簡単に触れたい。

まずは県内における本遺跡早期第I群土器に直接対比できる資料の確認であるが、現状では本群1類から8類のようなまとまりをもつ資料はない。また周辺地域における意匠などが類似する資料については先述のとおりであるが、その影響関係については今後の検討課題といえよう。ただし県内の既出資料を報告書などで確認する限り、北相木村柄原岩蔭遺跡第20層、塩尻市堂ノ前遺跡などで数片ながらも直接対比可能な資料が認められる。それらは從来、中部高地の田戸下層式などと扱われていたようである。筆者自身は資料未実見のためそれ以上は言及できないが、もし下荒田遺跡早期第I群土器の編年的位置づけが今回の仮説どおりならば、中部高地の縄文時代早期の土器編年研究の再編成を行う必要がでてこよう。いずれにせよ既出資料の丹念な再検討作業が急務となる。

さて本群の編年位置づけでは大いに御代田町塙田遺跡出土の田戸上層式との比較検討の結果を参考とした。本群を塙田遺跡の田戸上層式に後続させた見解の根拠は前述のとおりであるが、ここで問題となるのは塙田遺跡出土の田戸上層式と本群との関係である。最大の問題点は本群が田戸上層式の系統をひく部分をもつにもかかわらず、塙田遺跡例と本群とでは型式学的な連続性が認められない点である。塙田遺跡例では幅1~2mmの細い原体による簡略かつ幾何学的な意匠の沈線と貝殻腹縁による押圧が特徴的で、また隆線を欠く。外面条痕調整のみで、胎土には繊維を微量に含む(第60図)。一方、本群では角頭状工具やペン先状工具で平行沈線間の連続刺突、隆帶上の連続刺突、幾何学的もしくは曲線的な意匠の集合沈線などが特徴的で、貝殻腹縁による押圧手法を欠く。外面のみならず、内面にも条痕調整がなされ、胎土の繊維の量も増加する(第61図)。

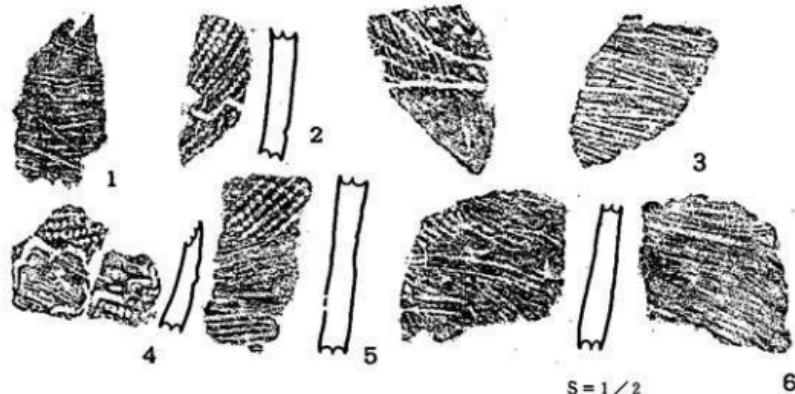
まず本群の沈線の意匠や隆帯についてであるが、塙田遺跡例からの変化で成立したとは考えられない。平行沈線間の連続刺突では東北南部を含めた関東北部からの影響、隆帶や幾何学的や曲

線的な意匠の集合沈線では関東方面からの影響など、他地域からの影響関係を想定する必要がある。この具体的な検討は今後の課題となろう。

また貝殻腹縁による押圧をもつ土器を本群が欠く点は留意すべき点である。前述の如く、筆者は塚田遺跡出土資料の考察で茅野市天狗山遺跡第53号、第54号土坑では「判ノ木山遺跡早期第3類・第4類」が田戸上層式の系統をひく貝殻腹縁が押圧された土器と共伴した点（第58図）を評価し、田戸上層式以降の諏訪地方の土器様相の見通しを簡単に触れた。天狗山遺跡出土の貝殻腹縁が押圧される土器は塚田遺跡出土の田戸上層式に胎土、色調が類似し、型式学的にもその連続性を追うことができる。一方、塚田遺跡から近い距離にある本遺跡では貝殻腹縁が押圧される土器を欠く。これは現状の資料蓄積では何ともいえないが、今後の留意事項としたい。

なお現状においては、本群と塚田遺跡例との比較で後続型式との連続性をも斟酌すれば、型式学よりも下位レベルの諸属性の面では内面条痕調整の発生、胎土の纖維含有量の増加が確認される点ではその連続性が確認できる。これは本群を塚田遺跡例に後続させる見解に至った根拠であり、前述のとおりである。

また本群では塚田遺跡出土の田戸上層式では確認できなかった縄文施文の土器が僅かながらも確認された（第63図）。下荒田遺跡早期第IV群の中の縄文施文の土器も胎土、色調などから第I群に組成するものと思われる。筆者は塚田遺跡の考察で「古屋敷遺跡早期第IV群」、「塚田遺跡早期第III群」の成立母胎を神奈川県夏島貝塚の「夏島IV式土器IV f」、田戸遺跡の「田戸遺跡第III群第10類第1種土器」などの田戸上層式に組成する縄文施文の尖底深鉢に求め、中部高地の田戸上層式に組成する縄文施文の土器の存在の有無、子母口式併行期における縄文施文の土器の存在の有



第63図 下荒田遺跡早期縄文施文土器

無については検討課題とした。本群における縄文施文の土器の存在は断片的なものながらもその課題に答えるものであり、田戸上層式から野島式併行期にかけての縄文施文の伝統の連続性の理解に手掛かりを与えるものとなろう。ただいずれにせよ断片的な資料に尽きるため、今後、更なる前後型式をも含めて該期の土器型式における縄文施文手法を注視する必要があろう。

註

- (1) 金子直行は田戸上層式と野島式との間に、城ノ台北段階、子母口段階、「木の根A式」段階とする3段階の変遷過程を想定され、子母口式については神奈川県子母口貝塚出土資料を基準に考え、城ノ台北段階を田戸上層式系統の要素を強く継承している点を評価して子母口式と分離して考えられている。
- (2) 隆帯や幾何学的または曲線的な意匠の集合沈線は田戸上層式に後続する土器にみられる属性とするよりも、田戸上層式でも塚田遺跡例以外の類型で確認される属性である点は事実である。しかし前述のとおり、下荒田遺跡早期第I群の1類から8類までは同時期の可能性が高い点、また1類の連続判別手法は周辺地域の研究動向を警覺する限り、田戸上層式以降に位置づけられる可能性が高い点を今回は重視した。ただし、いずれにせよ隆帯や幾何学的または曲線的な意匠の集合沈線の成立については検討課題としたい。

主要参考文献

- 阿部芳郎他 1989 『半蔵窪遺跡発掘調査報告書』半蔵窪遺跡調査団
阿部芳郎他 1990 『古屋敷遺跡発掘調査報告書』富士吉田市史編纂室・古屋敷遺跡調査団
飯塚博和・毒島正明 1987 『千葉県野田市丸山遺跡』野田市遺跡調査会
上野修正 1990 『石山神遺跡』茨城県教育財団
金子直行他 1992 『田戸貝塚資料』奈良国立文化財研究所
金子直行他 1992 『子母口貝塚資料 大口坂貝塚資料』奈良国立文化財研究所
金子直行 1993 「子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討 細隆起線文土器の出自と系譜を中心として」『研究紀要』10 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
金子直行 1994 「貝殻沈線文系土器群終末期の様相 一吹切沢式と子母口式の関係について」『縄文時代』5 縄文時代文化研究会
群馬県考古学研究所他 1988 「第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題」
小林秀夫他 1981 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3』長野県教育委員会
小林康男・百瀬忠幸他 1985 「堂の前・福沢・青木沢」塩尻市教育委員会
小山岳夫・堤隆・中沢道彦他 1994 「塚田遺跡」御代田町教育委員会

- 近藤尚義・百瀬忠幸他 1988 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書」2
- 近藤尚義他 1992 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1」
- 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料 第一巻下」
- 杉原莊介・芹沢長介 1957 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」
- 芳賀英一 1994 「東北横断自動車道遺跡調査報告25」 福島県文化センター他
- 福島邦男 1981 「新水」 望月町教育委員会
- 毒島正明 1983 「子母口式土器研究の検討」『土曜考古』7 土曜考古学会
- 馬目順一 1982 「竹之内遺跡」 いわき市教育委員会
- 百瀬一郎 1993 「天狗山遺跡」 茅野市教育委員会
- 百瀬忠幸他 1991 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2」
- 守屋豊人 1994 「穂谷式土器」 「縄文時代研究事典」 東京堂出版
- 宮下健司 1988 「2 縄文早期の土器」『長野県史 考古資料編 全一巻(四)』
- 矢島俊雄 1984 「出流原小学校内遺跡発掘調査報告書」 佐野市教育委員会
- 山内清男 1932 「縄紋土器の起源」『ドルメン』1-5

2 下荒田遺跡における弥生時代末期の集落

下荒田遺跡では、弥生時代の竪穴住居址が5軒検出された。ここから出土した土器群はおおむね单一時期の範囲でとらえることができるため、ほぼ同時期に併存していたと考えられる。また、⁽¹⁾土器様相は先に報告された細田遺跡の弥生集落出土の土器群と近似し、佐久地方の弥生土器編年では最終段階、東海地方では元屋敷式古段階、畿内地方では鐘向3式に併行すると考えられる。以上の前提を踏まえ、集落構成について若干の考察を行っておこう。

下荒田遺跡は北方に若干伸びていることから、当弥生時代集落跡ももう少し拡大されるとも考えられるが、いずれにしても最小単位に近い小集落であったようだ。検出された竪穴住居址は横円を描くように立ち並び、軒の方向が直交するY-1号住居址を除くと概ね統一されている。整然とした村落の景観が想像される。

各竪穴住居址の属性については第28表にまとめられたとおりで、佐久地方において過去に調査された数多い弥生時代後期の竪穴住居址の属性とはほぼ一致する。なお、最大規模をもつY-3号竪穴住居址は東隣の細田遺跡例と同様に意図的に焼却された状況を呈している点が興味深い。

今回は紙幅の都合で細かな分析を行う余裕がないが、隣の細田遺跡の弥生集落とは相互に密接

第28表 下荒田遺跡弥生住居一覧表

遺構名	検出位置	形態	長軸	短軸	床面積	長軸方位	炉	備考
Y-1住	D-3グリッド	隅丸長方形	5.24m	4.32m	21.2m ²	N-97°E	地床炉+縁石	
Y-2住	C-2グリッド	隅丸長方形	4.84m	4.20m	19.4m ²	N-5°W	地床炉+縁石	
Y-3住	E-2グリッド	隅丸長方形	6.24m	4.70m	28.6m ²	N-8°E	地床炉+縁石	焼失住居
Y-4住	C-2グリッド	隅丸長方形	5.76m	3.74m	20.5m ²	N-3°W	地床炉+縁石	
Y-5住	D-1グリッド	—	—	—	—	—	—	H-軒こわされる

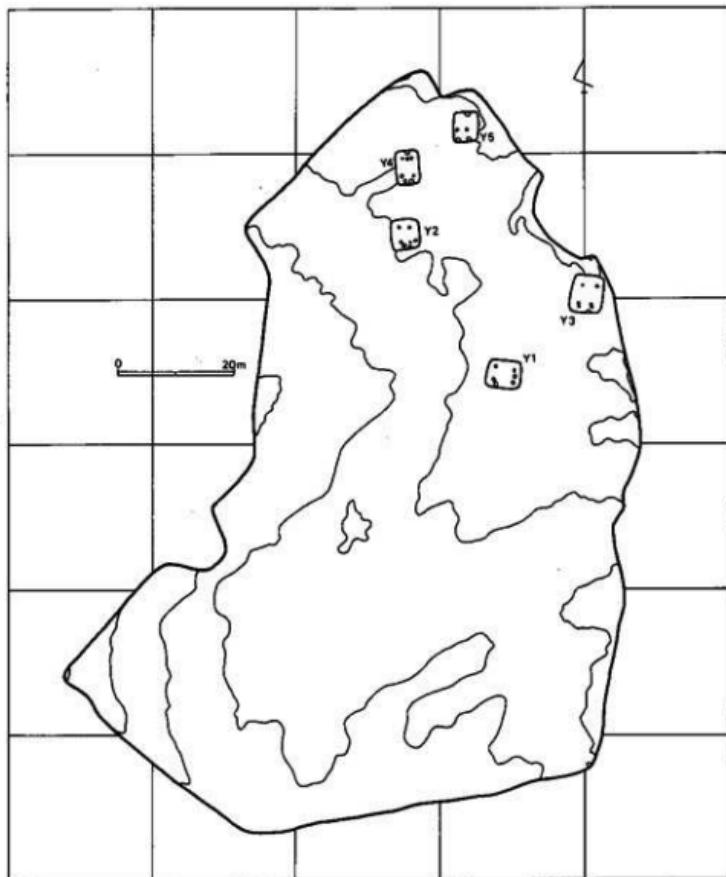
第29表 下荒田遺跡平安住居一覧表

遺構名	検出位置	形態	長軸	短軸	床面積	長軸方位	竪位置	備考
H-1住	D-3グリッド	方形	4.88m	4.52m	21.8m ²	真北	南東隅	
H-2住	D-3グリッド	隅丸 方形	4.14m	3.76m	14.6m ²	N-6°W	北壁中央	
H-3住	C-3グリッド	隅丸 方形	4.44m	4.28m	18.7m ²	N-7°W	北壁中央	
H-4住	D-4グリッド	隅丸長方形	3.30m	2.86m	8.6m ²	N-1°W	南東隅	
H-5住	E-4グリッド	隅丸 方形	3.16m	2.82m	7.4m ²	N-11°E	北壁中央	
H-6住	E-4グリッド	隅丸 方形	2.88m	2.76m	7.1m ²	N-10°W	なし	
H-7住	C-3グリッド	隅丸長方形	3.72m	2.84m	(9.4)m ²	N-24°E	北壁中央	
H-8住	D-1グリッド	隅丸長方形	4.68m	4.44m	20.4m ²	N-17°W	北壁中央	

な関連をもっていたことは自明である。また、この二つの集落がどんな形で統合され、次代の古墳時代初頭塚田遺跡の集落生成に至ったのか、この過程については機会を改めて考察することにしたい。

註

- (1) 御代田町教育委員会 1993 「細田遺跡」
- (2) 佐久考古学会 1990 「赤い土器を追う」



第64図 下堀田遺跡の弥生集落 (1 : 1.000)

3 律令体制崩壊期における山麓集落の出現

塩野西遺跡群では本下荒田遺跡をはじめ、川原田⁽¹⁾・城之腰⁽²⁾・閑屋・中屋際・東荒神・西荒神の7遺跡から平安時代の小集落跡が発見された。これら浅間山麓の高燥な台地上に点々と分布する小集落群は9世紀後葉に出現し、10世紀前葉以後消滅するせいぜい3時期程度の変遷しか考えられない短期存続の集落で、再び集落の出現をみるのは約100年余の歳月を隔てた11世紀代である。本稿では稻作出現の弥生時代以降には居住地としての利用頻度の低かった当地に忽然と集落が出現した意味を考える。

(1) 時間的位置付け

まず、各遺跡の平安時代集落跡から出土した土器群を分析し、時間的前後関係を把握する。また、佐久地方における当該期の土器研究成果との整合も図る。

まず、塩野西遺跡群内では、先に報告された川原田遺跡の平安時代集落で3時期にわたる出土土器の変遷が考えられている。その概要は以下の通りである。

第Ⅰ段階

食膳具は須恵器坏・高台付坏と土師器坏・高台付坏で量は土師器が凌駕する。土師器の内面はともに黒色処理され、丁寧またはやや雜にヘラミガキされる。

また、煮沸具は「コ」の字状に屈曲する口縁部で器内外面のヘラケズリにより薄く仕上げられる、非ロクロ調整のいわゆる「武藏型」の甌が主体で、ロクロ調整のいわゆる「北信型」の甌は少ない。灰釉陶器は認められなかったが光ヶ丘1号窯式併行の製品が伴う可能性がある。

第Ⅱ段階

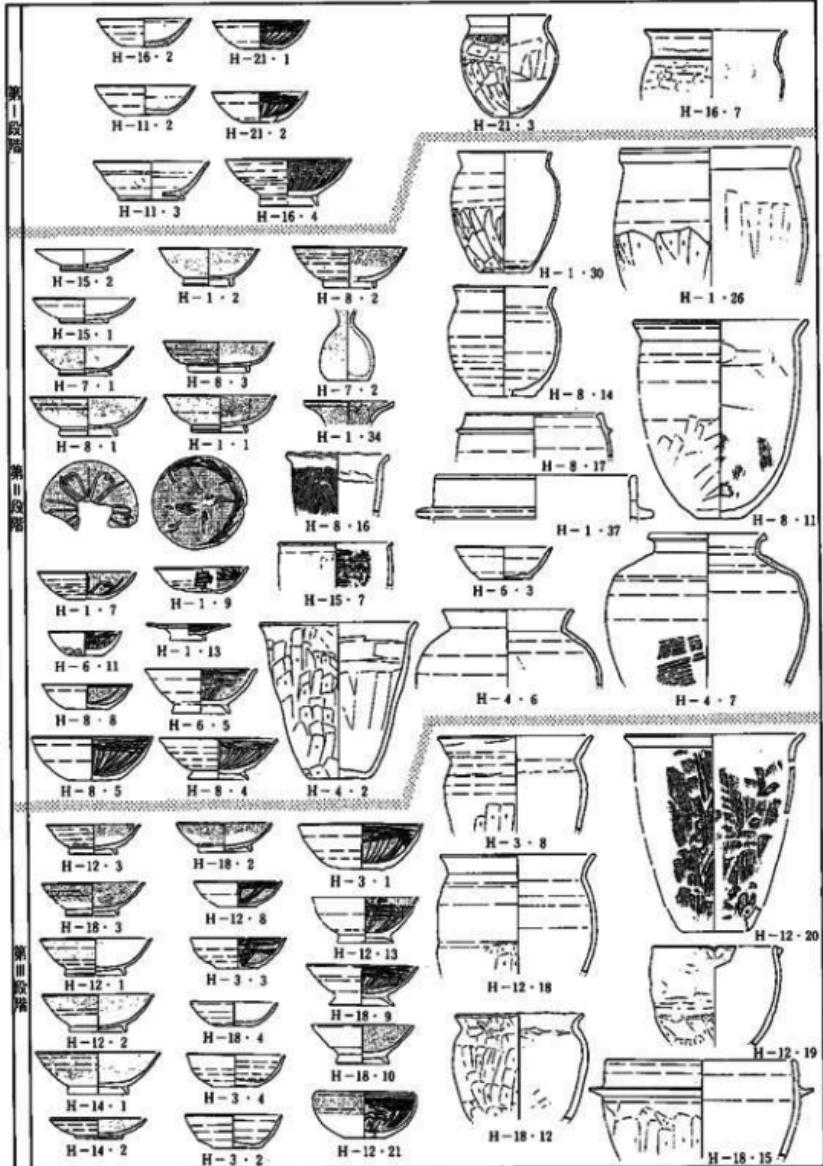
食膳具は須恵器がほぼ消失。土師器坏・高台付坏に推定年代9世紀後半と目される東濃産光ヶ丘1号窯式から大原2号窯式や尾北産篠岡4号窯式期の皿・碗などが共存する。土師器内面は黒色処理ののち、ヘラミガキが雜なものや、暗文を付す程度の簡略化が図られている。

煮沸具はロクロ調整の「北信型」の甌が主流となる。一方、「武藏型」の甌が基本的に消失し、非ロクロ調整の甌は小型品や深鉢形の特異形態が目立つ程度になる。

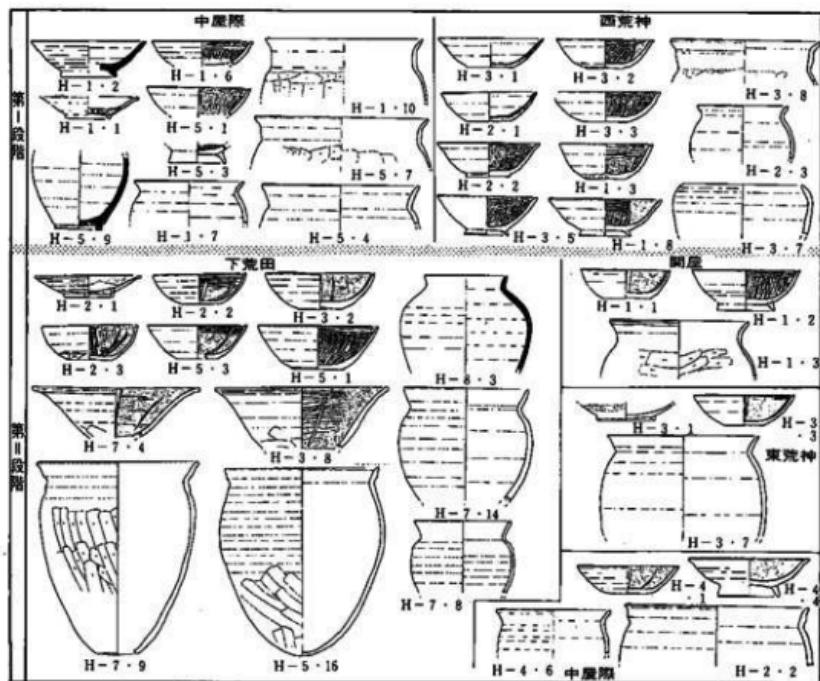
第Ⅲ段階

器種組成は第Ⅱ段階と基本的に変わらないが、食膳具の土師器坏・高台付坏内面に黒色処理、ミガキなどまったくせず、未調整のものがあらわれる。これらは若干小型化の様相もみせる。

以上が基本的な変遷で、佐久地方における平安時代土器の変遷案と対比すると、第Ⅰ段階は御



第65図 川原田遺跡平安時代土器の変遷 (1 : 8) (境1993より)



第66図 下荒田・東荒神・西荒神・関屋・中屋際遺跡の平安時代土器の変遷(1:8)(小山1995より)

第30表 塩野西遺跡群平安時代集落の変遷

年 代	段 階	遺跡と該当遺構						
		川原田	城之原	下荒田	東荒神	西荒神	関屋	中屋際
9世紀	第IV四半期	H-5-11-13-16-17	H-1		+	H-1-2-3		H-1-5
10世紀	第I四半期	H-1-4-6-7-8-15-19	H-2	H-2-3-5-7-8	H-1-2-3	+	H-1-2	H-2-3-4
10世紀	第II四半期	H-2-3-9-10-12-14-18		+	+	+	+	+

⁽⁵⁾ 代田町根岸遺跡の第IV段階併行、佐久市栗毛坂遺跡群の8段階、第II段階は根岸遺跡の第V段階、栗毛坂遺跡群の9段階、第III段階は栗毛坂遺跡の10段階には併行する。その年代は、出土灰陶陶器と貨幣の共伴状況から第I段階が9世紀第IV四半期、第II段階が10世紀第I、第III段階が10世紀第II四半期頃と推定される。

塩野西遺跡群に存在していた平安時代集落群は、下荒田遺跡の11世紀の集落を除き、おむねこの第I～III段階の間に営まれたものである。これらを時期別に取りまとめてみると第30表のようになる。

第I段階の集落跡は中屋際・西荒神・城之腰遺跡、第II段階は下荒田・城之腰・中屋際・東荒神・閑屋遺跡が該当する。第III段階は川原田遺跡以外では明瞭な集落跡が確認されていない。

塩野西遺跡群総体でみても創成期の第I段階に比べ、第II段階に至り集落数が漸増していることをみてとれる。また、時期を跨いで存続しているのは、川原田・城之腰・中屋際遺跡で他は単発的な集落である。その中でも存続期間、集落規模の大きさだけみても、川原田遺跡は他を圧倒している。

(2) 佐久平北部における集落の様相

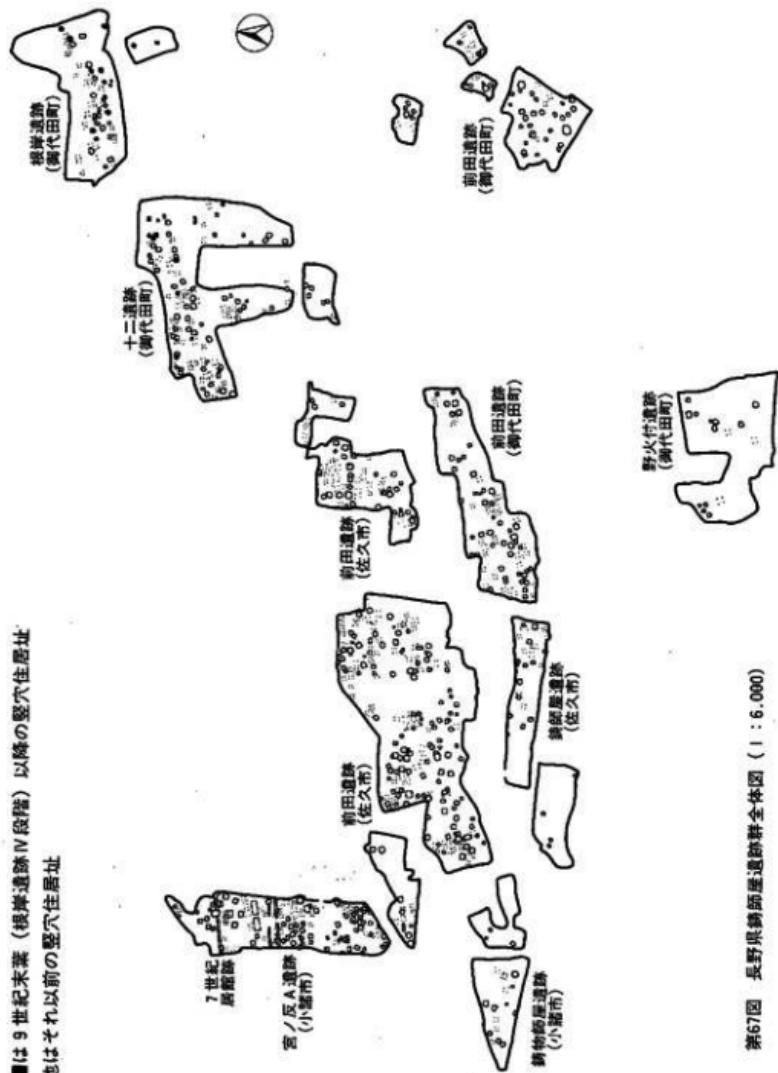
塩野西遺跡群のような山麓に集落が進出し始めた頃、同じ浅間山麓末端部にあたる佐久平北部の盆地平坦部やほかの山間部では集落構成にどのような動きがあったのであろうか。

まず、御代田町御代田・佐久市小田井・小諸市御影に跨って合計11ha以上にも及ぶ広大な発掘調査が断続的になされ、巨大な古代集落の存在が明らかになっている鉢師屋遺跡群の状況を見てみることにしよう。

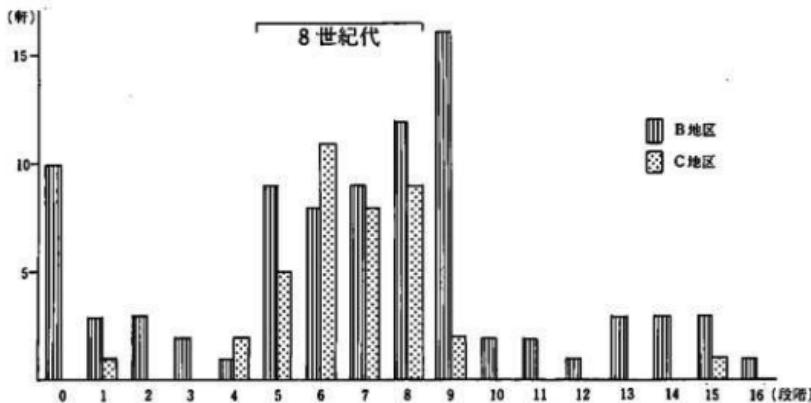
当遺跡群の東西範囲は今もってなお正確に確認されていないが、地理的環境からみて平成5年度に発掘調査された宮ノ反A遺跡はその北端部と推測され、7世紀後半以降に築造された方形にめぐら溝をもつ居館跡がみつかっている。鉢師屋遺跡群はこの頃から8世紀初頭にかけて最盛期を迎える、以後、徐々に規模を縮小しながら、律令政治の終焉にあたる10世紀初頭（前述の根岸遺跡V期併行）をもって集落の営みを終結している。第67図をみると明らかのように塩野西遺跡群に短期的な集落造営が行われていた9世紀末葉～10世紀初頭に至ると、それまで過密なほどにすべての台地上に割換していた竪穴住居や掘立柱建物址群が、北東隅の一部にまとまりがあるほかは、広大な台地に2軒存在するに過ぎなくなる。明らかにこの集落が衰退していることを示すものであろう。

また、佐久市長土呂の栗毛坂遺跡群では、第68図のように8世紀初頭と目される5段階から9世紀初頭の9段階までの間に竪穴住居数の急激な増加が認められ、それ以降になると激減することが確認されている。

■は9世紀末葉（銀鱗遺跡IV段階）以前の堅穴住居址
△はそれ以前の堅穴住居址



第67図 長野県鍋領屋遺跡群全体図 (1:6,000)



第68図 栗毛坂遺跡の住居址段階別軒数（寺島ほか1991を一部加筆）

このほかにも浅間山麓末端部、佐久平北部の細長く展開する台地上には小諸市中原・関口B遺跡、佐久市長土呂・芝宮・岩村田遺跡群など創始期・終焉期に若干のずれはみられるものの律令体制期にピークを示す大集落跡が軒を連ねるように分布している。そしてたいがいの遺跡が体制崩壊に前後する時期になると、前述の鍋師屋・栗毛坂遺跡群と同様に開散とした集落の状況を呈する点で一致しているのである。この傾向は時代が新しくなるほど拍車がかかり、11世紀の集落分布はかなり希薄、12世紀では皆無に近い状況となる。以上の発展から衰退の図式は全県的にもほぼ共通するようである。

一方、長野県から群馬県へ通じる八風山西麓の狭隘な谷間、標高850mを越える佐久市香坂地区では、律令体制崩壊期にいたると塩野西遺跡群と同様に小集落の開拓が活発になり、盆地平坦部とは逆の傾向を示す。これらは西赤塚・東赤塚・曲尾¹⁰・兵士山遺跡などで一時期5軒にも満たない集落の存在が確認されたことにより判明した。

(3) 時代背景から山麓集落出現の意味を考える

次に集落がこのような状況になるに至った時代を概観してみよう。

9~10世紀は日本列島に天災が頻発した時期で、信濃でも承和8年(841)、仁和3~4年(887~888)に相次いで大地震に見舞われた。この災害復旧が困難を極めていた仁和4年5月8日、原因不明の山津波から千曲川があふれて大洪水が発生し、佐久・小県・更科・埴科・高井・水内の6郡に壊滅的な被害が与えられた。ただでさえ、平安京造営や蝦夷征伐などの国家政策に

ともなう過重な租税徴収や労役に喘いでいた農民たちには壊滅的な打撃で、困窮は極まりその多くが流民化した。律令制度の強制力により計画的に編成されたと言われる当時の農村から農民は逃散し、変わって新しい村が形成されていくことになる。

信濃の場合、当時国府が置かれた筑摩郡（松本盆地）に中央貴族、有力寺社など中央権力の影響下にある初期莊園が2、3認められるが、荒田や未開発原野の開墾の多くは各地の有力者に当たる郡司や零細な一般農民によって行われていたのが実情のようだ。¹⁹

塩野西遺跡群で発掘された7つの平安時代集落はちょうどこの頃に形成された。前述のように律令体制解体に伴う集落の山間部への拡散は、佐久平に限定される現象でなく、長野県のほぼ全域に共通することのようである。そしてこの現象が起きた背景には列島規模の政治的な動きや自然災害が色濃く作用していたことが想定されるのである。

前節で述べたように佐久盆地平坦部において律令体制のもとに形成された巨大な古代集落群の急激な衰退を鑑みると、塩野西遺跡群や佐久市香坂に進出した山麓や山間部の諸遺跡の小集落には、窮屈した農民が逃げ込んでいたことを積極的に考慮しなければならない。また、開拓の主導権の所在が、郡司などの地方有力者にあったのか、零細な農民の集合体にあったのかここでは結論が出ないが、今後の性格究明につなげるため、可能な限り想定しておこう。

本遺跡群中で最大規模の集落は川原田遺跡で、存続期間も他に比べ長い。また、遺構・遺物には方形区画溝や全国的に類例の少ない火焚斗、「大平寺・大内寺」と墨書きされた土師器、朱墨の転用硯などほかの遺跡の集落跡からは出土しなかった、寺院の存在を想定させる特殊な内容も具備していた。また、それに加えて川原田遺跡の隣には古い歴史をもつ古刹真楽寺が存在し、平安時代には山岳仏教が流行していたことなどを勘案して、当地に名前の残らなかった山寺の存在が想定されている。²⁰ 塩野西遺跡群に点々と展開された小集落群は、度重なる天災に物心両面にわたり打ちのめされ、逃亡した律令農民たちが心の換り所として、山岳信仰の場に集まり生じた開拓村であったのかもしれない。この集落経営も冷涼な不安定な生産基盤のためか、長くは続かず、人々はいざこへか去っていった。そして、この地に再び集落の形成をみるのは、1年契約で耕作を請け負う有力農民「田堵」が出現する11世紀なのである。この集落跡は本下荒田遺跡において確認されている。

註

- (1) 御代田町教育委員会 1993 「川原田遺跡—平安・中世編一」
- (2) 御代田町教育委員会 1992 「城之腰遺跡」
- (3) 御代田町教育委員会 1995 「東荒神・西荒神・下大宮・閑屋・中屋際遺跡」
- (4) 堀 隆 1993 「1総括 平安時代の土器様相」『川原田遺跡—平安・中世編一』 御代田

町教育委員会

- (5) 堤 隆 1989 「1根岸遺跡における土器様相」「根岸遺跡」 御代田町教育委員会
- (6) 寺島俊郎ほか 1991「第18節 5 分析 (1)古墳時代末から平安時代の遺物」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2」 鋒長野県埋蔵文化財センター
- (7) 御代田町教育委員会 1986 『野火付遺跡』 1987 『前田遺跡』 1988 『十二遺跡』
1989 『根岸遺跡』
- 佐久市教育委員会 1985 『鎧師屋遺跡』 1988 『鎧師屋遺跡II』 1989 『前田遺跡
(第I・II・III次)』
- 小諸市教育委員会 1988 『鎧物師屋』
- 鋲長野県埋蔵文化財センター 1993 「4前田遺跡 5宮ノ反A遺跡」「長野県埋蔵文化財
センター一年報10」 以上の成果である。
- (8) 鋲長野県埋蔵文化財センター 1993 「5宮ノ反A遺跡」「長野県埋蔵文化財センター一年報
10」
- (9) 鋲長野県埋蔵文化財センター 1992 「2中原遺跡群」「長野県埋蔵文化財センター一年報9」
- (10) 小諸市教育委員会 1991 「関口A・関口B(第二次)・下柏原」
- (11) 佐久埋蔵文化財調査センター 1990 「聖原遺跡I・II」「年報1」 平成元年より発掘開
始された長土呂遺跡群聖原遺跡は平成元年より6年まで継続して調査が行われ、律令期を中心とする竪穴住居址・掘立柱建物址とともに検出数1000軒に達しようとしている。
- (12) 鋲長野県埋蔵文化財センター 1992 「1芝宮遺跡群」「長野県埋蔵文化財センター一年報9」
- (13) 未報告だが岩村田遺跡群上ノ城(昭和47年調査)・西八日町遺跡(昭和58年調査)で古墳時
代後期から平安時代の過密集落跡が発見されている。
- (14) 寺島俊郎ほか 1991 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2」 鋲長野県埋蔵文化
財センター
- (15) 昭和54年度佐久市教育委員会により発掘調査。
- (16) 牛山佳幸 「第三章 第四節 奈良時代の村落生活」 井原今朝男 「第五章 第三節 平
安時代の村落と生活」「長野県史通史編 第一巻 原始・古代」 長野県を参照。
- (17) 前掲註 (1)

V

写真図版



1. 3遺跡空中写真



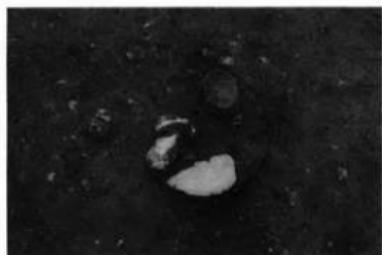
1. 空中北方よりみた下荒田遺跡



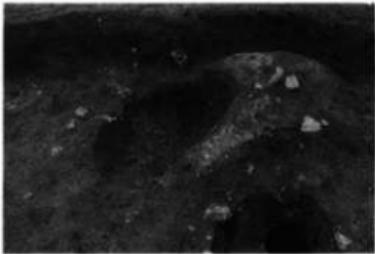
2. 下荒田遺跡全景



1. Y 1号住居址（西方より）



2. 炉

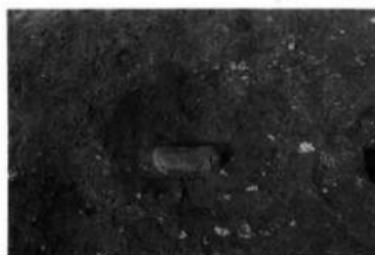


3. 貯藏穴？

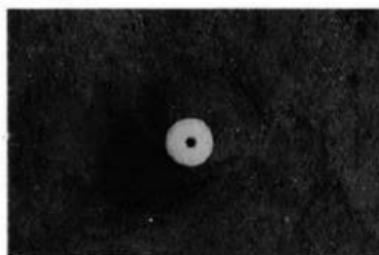
Y-1号住居址



1. 壁穴住居址全景（南方より）



2. 炉



3. 紡錘車出土状態



4. 土器の出土状態

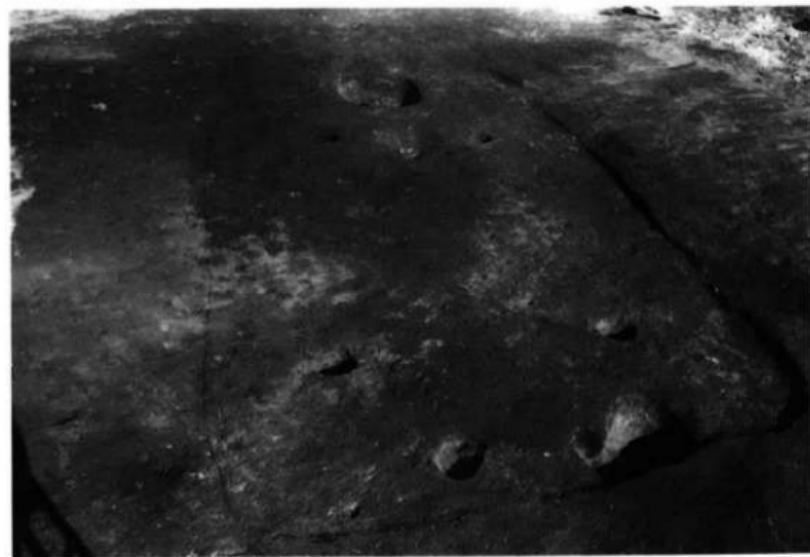


5. 土器の出土状態

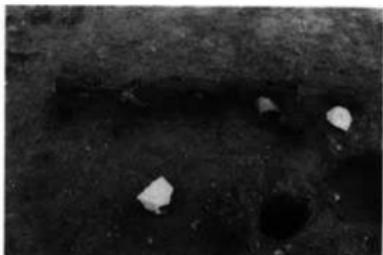
Y-2号住居址



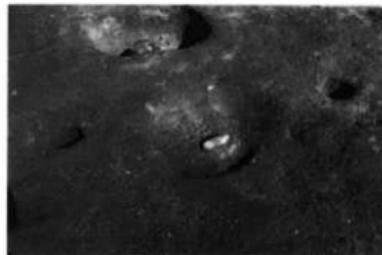
1. Y-3号住居址（南方より）



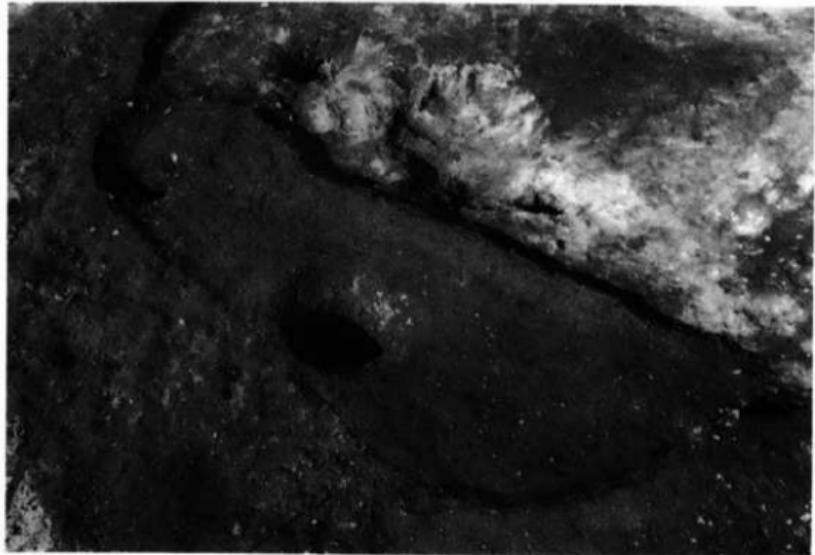
2. Y-4号住居址（南方より）



1. Y-3号住居址炭化材出土状態



2. Y-4号住居址の炉



3. Y-5号住居址（南方より）

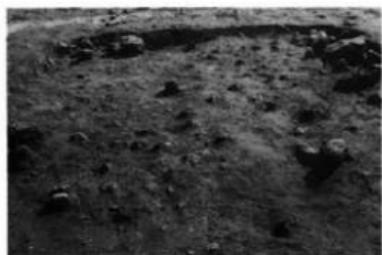


1. 全景（礫・遺物出土状態）



2. 全景（完掘）

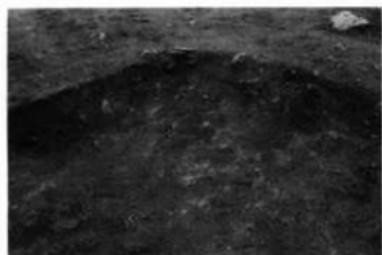
H-1号住居址



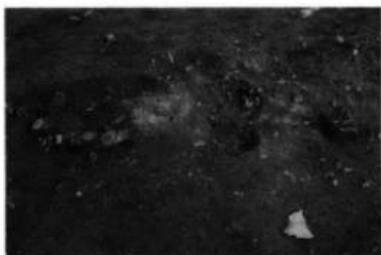
1. H-1号住居址遺物・礫出土状況



2. H-1号住居址の崩壊したカマド



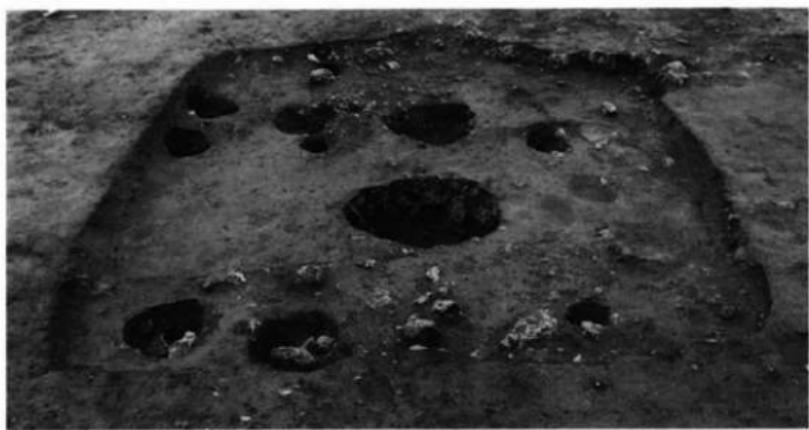
3. H-1号住居址カマド残痕



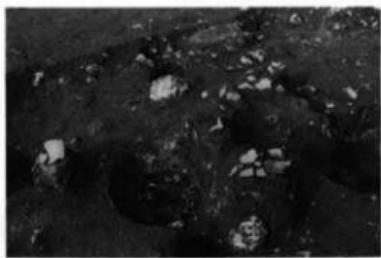
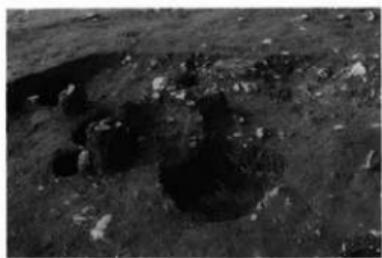
4. H-2号住居址カマド残痕



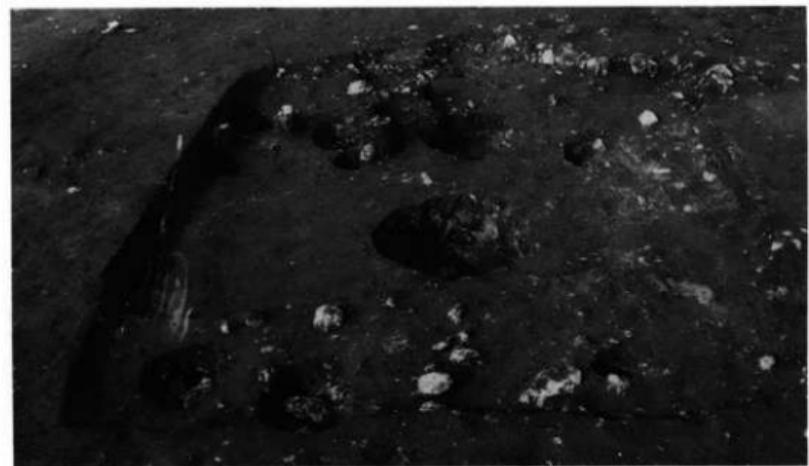
5. H-2号住居址（南方より）



1. 完 摂



2. 遺物出土状況



3. H-3号住居址（南方より）



1. カマド崩壊状況



2. 完成

H-4号住居址



1. カマド崩壊状況



2. カマド崩壊状況



3. カマド



4. カマド

H-4号住居址



5. カマド付近遺物出土状況



6. カマド残痕

H-5号住居址



1. 遺物出土狀況

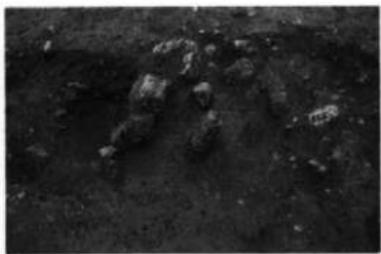
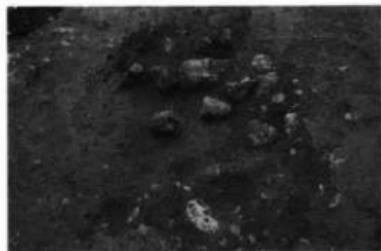


2. 完 整

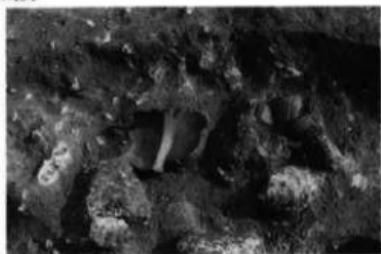
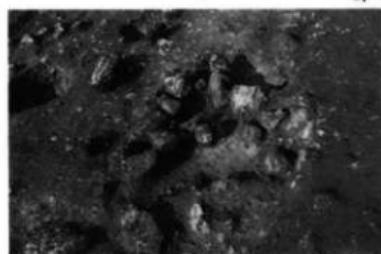
H-5号住居址



1. H-6号住居址（南方より）



2. カマド残痕



3. カマド崩壊状況

H-7号住居址



1. 完掘（南方より）

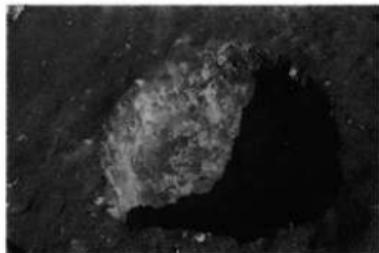


2. カマド崩壊状況

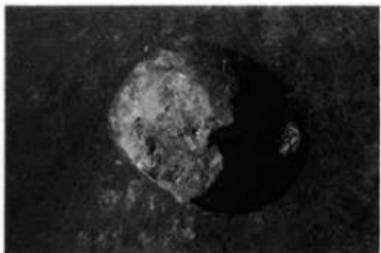
H-7号住居址



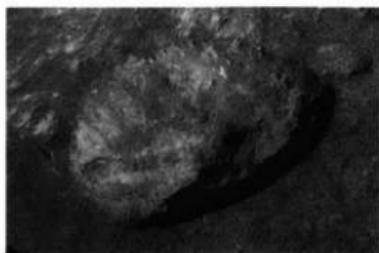
1. H-8号住居址（南方より）



2. D-1号土坑



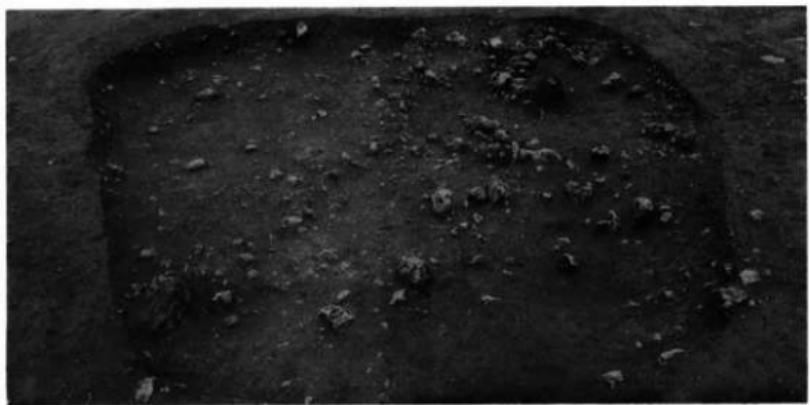
3. D-4号土坑



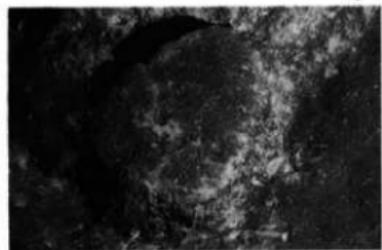
4. D-5号土坑



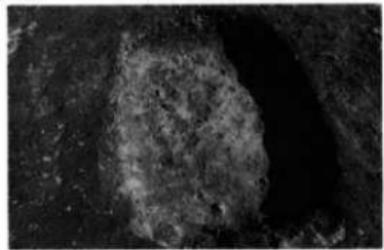
5. D-6号土坑



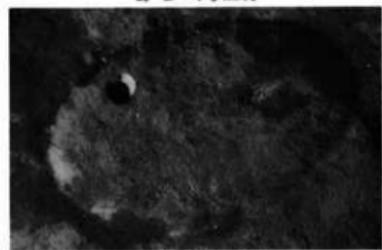
1. D-3号土坑



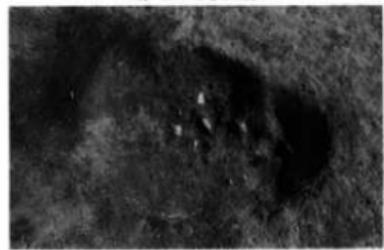
2. D-7号土坑



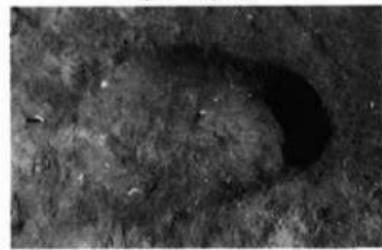
3. D-8号土坑



4. D-9号土坑



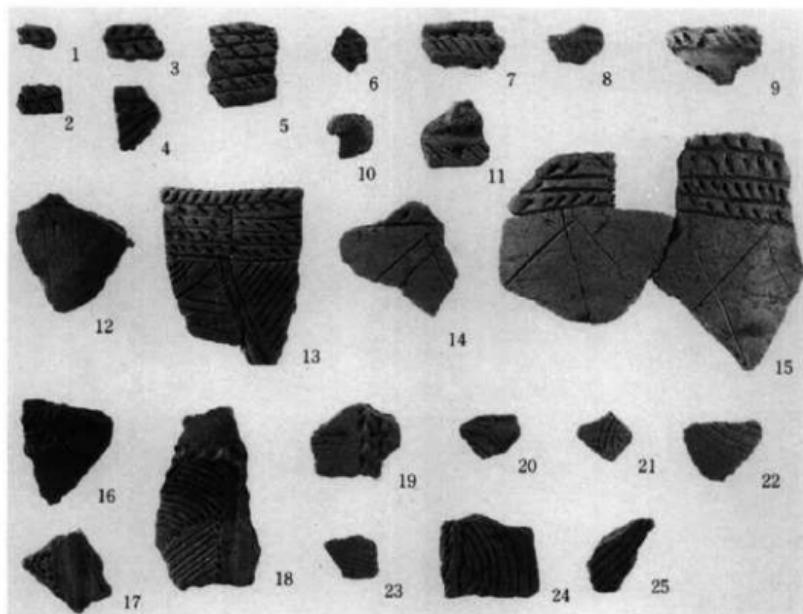
5. D-10号土坑



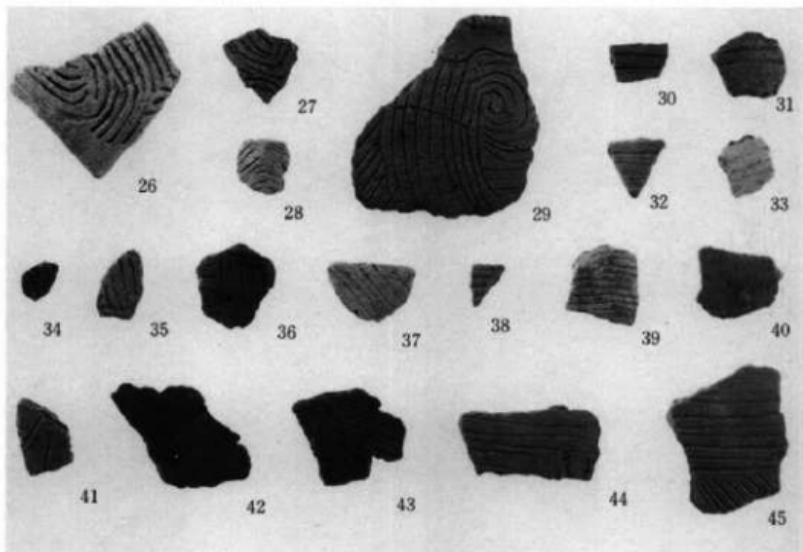
6. D-12号土坑



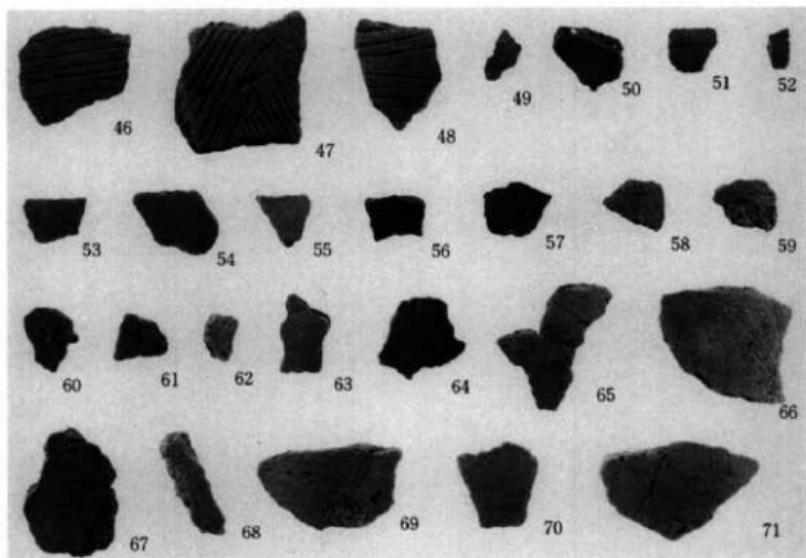
7. D-13号土坑



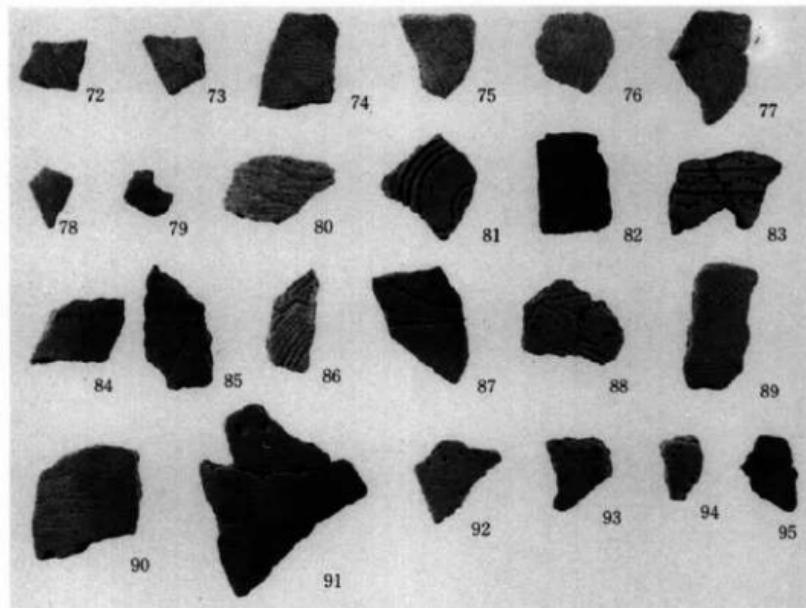
1. 早期第Ⅰ群土器 (1:3)



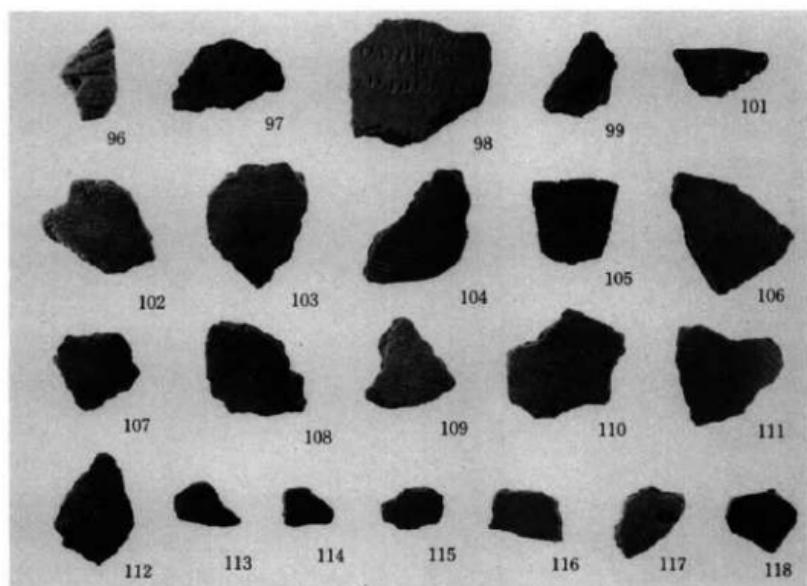
2. 早期第Ⅰ群土器 (1:3)



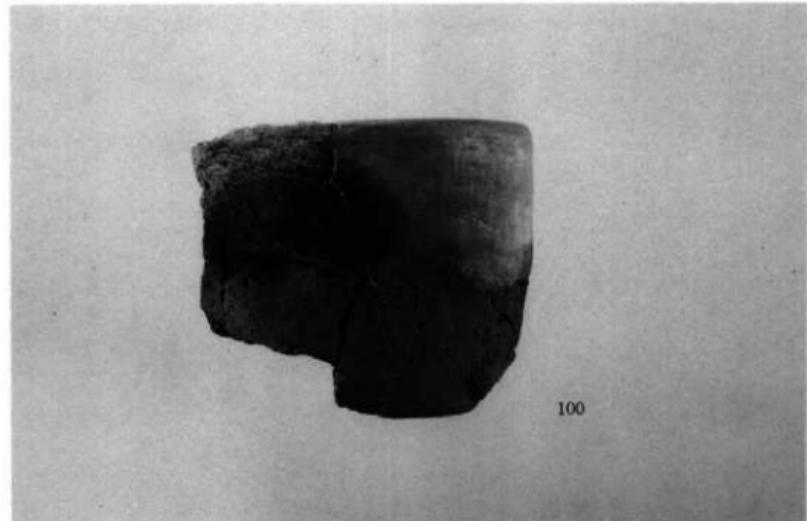
1. 早期第Ⅰ群土器 (1:3)



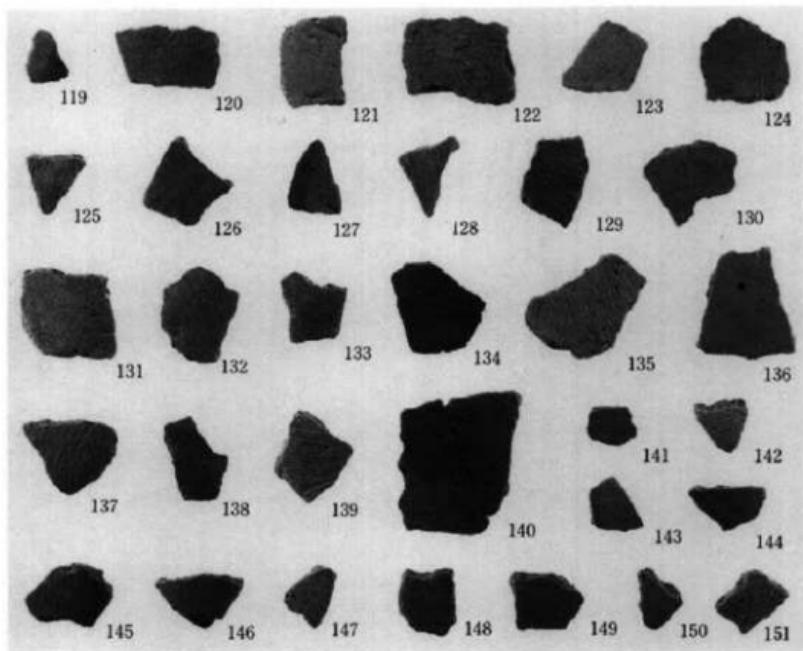
2. 早期第Ⅰ群 (72~88·91~95)、第Ⅳ群 (90·91) 土器 (1:3)



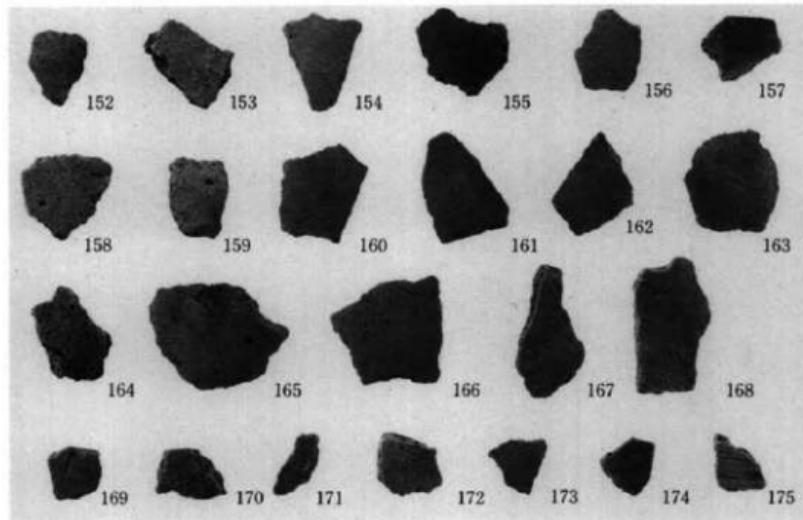
1. 早期第Ⅰ群(96~99)、第Ⅳ群(101~118)土器(1:3)



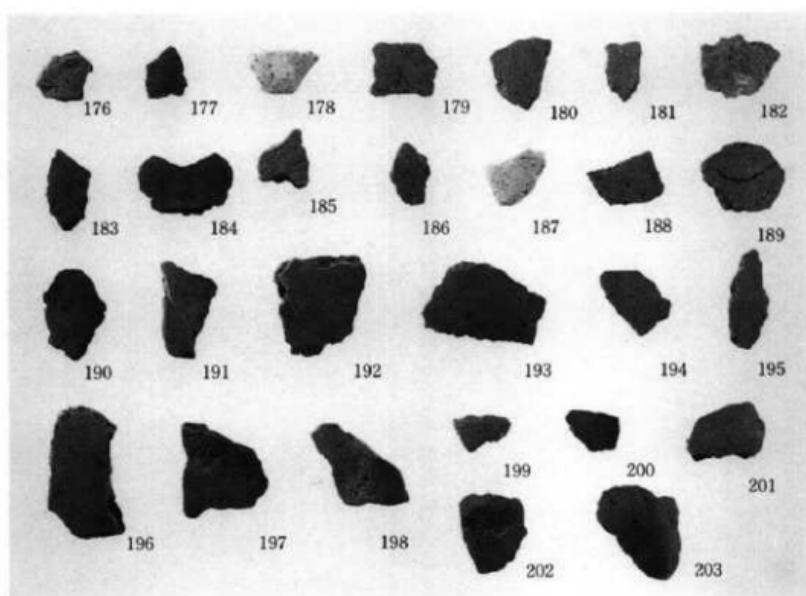
2. 早期第Ⅰ群土器(1:3)



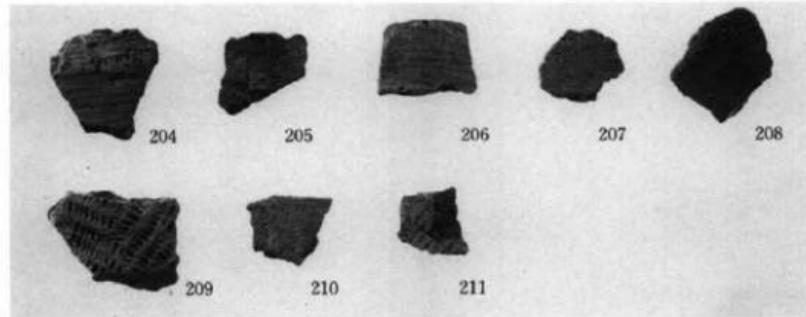
1. 早期第IV群土器 (1 : 3)



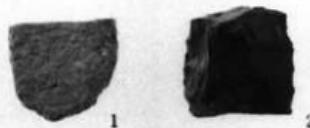
2. 早期第IV群土器 (1 : 3)



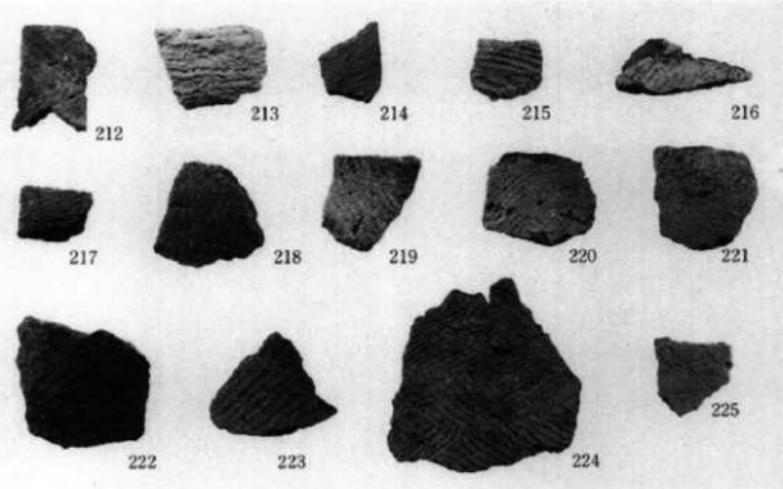
1. 早期第IV群土器 (1 : 3)



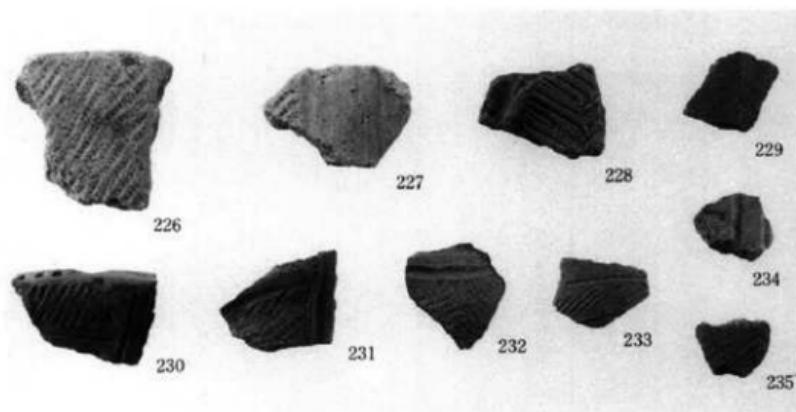
2. 早期第II・III群土器 (1 : 3)



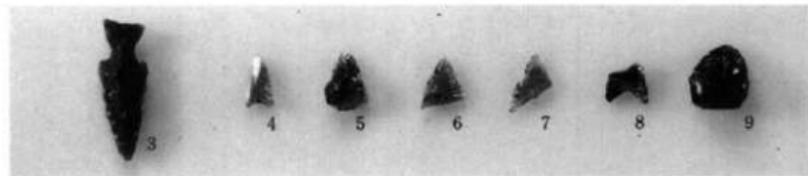
3. 綱文時代の石器 (1 : 3)



1. 繩文時代前期の土器 (1 : 3)



2. 繩文時代中・後期の土器 (1 : 3)



3. 繩文時代の石器 (1 : 2)



1



5



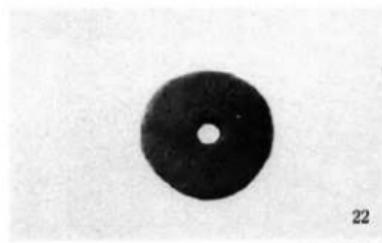
2



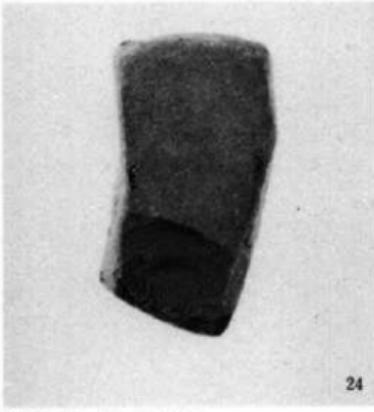
3



4



22



24

Y-1号住居址出土遺物 (1~5 1:4)

(22 1:2)

(24 1:3)



1



2

Y-2號住居址出土遺物 (1 : 4)



4



1



3

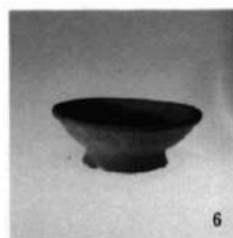
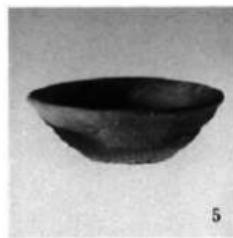


2

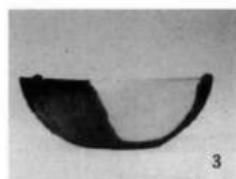
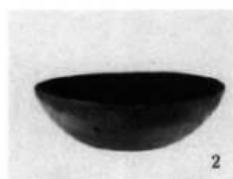
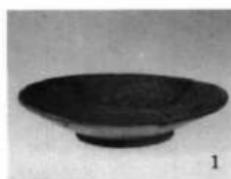


4

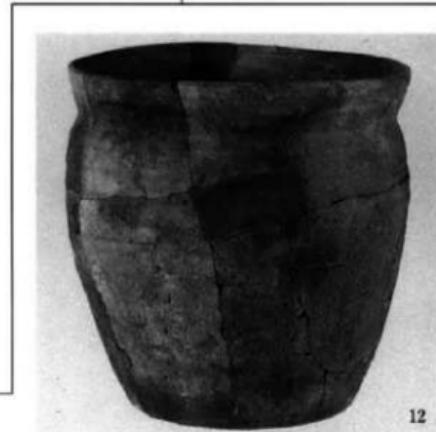
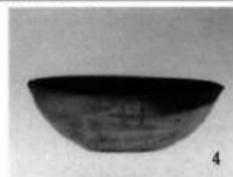
Y-3號住居址出土遺物 (1 : 4)



H-1號住居址出土遺物 (1:4)



H-2號住居址出土遺物 (1:4)



H-5號住居址出土遺物 (1:4)



16



17

H-5号住居址出土遺物 (1:4)



9



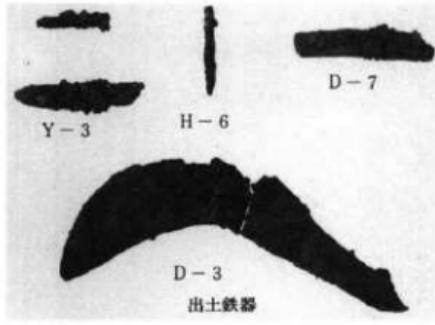
10

H-7号住居址出土遺物 (1:4)



3

H-8号住居址出土遺物 (1:4)



D-3

出土鐵器

報告書抄録

ふりがな	しもあらたいせき
書名	下荒田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第20集
編著者名	小山岳夫
編集機関	御代田町教育委員会
所在地	〒389-02 長野県北佐久郡御代田町大字御代田2464-2 TEL0267(32)3111
発行年月日	1995年 3月24日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'."	東経 °'."	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下荒田遺跡	御代田町 大字塙野 字下荒田		1,323	36° 19° 30°	138° 29° 13°	平成3年 5月21日 ~11月12日	8,168	県営圃場 整備

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下荒田	集落跡	弥生後期 平安中期 後期	竪穴住居址 5軒 土坑 竪穴住居址 5軒 竪穴住居址 3軒	弥生土器 鉄器 土師器・灰陶陶器 土師器・灰陶陶器	佐久平最高地点の弥生時代の農耕集落の発見。律令社会崩壊に連動した高地の再開発を示唆する平安時代の小集落の存在。

御代田町の埋蔵文化財発掘調査報告書

- 第1集 御代田町教育委員会 1975 『馬瀬口下原古墳群』
第2集 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
第3集 御代田町教育委員会 1985 『宮平遺跡』—造構編—
第4集 御代田町教育委員会 1986 『大沼遺跡』
第5集 御代田町教育委員会 1987 『前田遺跡』
第6集 御代田町教育委員会 1988 『十二遺跡』
第7集 御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』
第8集 御代田町教育委員会 1989 『広畠遺跡』
第9集 御代田町教育委員会 1990 『聖原II遺跡』
第10集 御代田町教育委員会 1991 『川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書』
第11集 御代田町教育委員会 1992 『城之腰遺跡』
第12集 御代田町教育委員会 1992 『細田・下弥堂・塙田・下荒田遺跡発掘調査概要報告書』
第13集 御代田町教育委員会 1993 『川原田遺跡—平安・中世編—』
第14集 御代田町教育委員会 1993 『細田遺跡』
第15集 御代田町教育委員会 1993 『池沢遺跡発掘調査概要報告書』
第16集 御代田町教育委員会 1993 『西駒込・東二ッ石・湧玉遺跡』
第17集 御代田町教育委員会 1994 『下弥堂遺跡』
第18集 御代田町教育委員会 1994 『塙田遺跡』
第19集 御代田町教育委員会 1994 『前藤部・聖原II・清水平・上屋敷・湧玉遺跡』
第20集 御代田町教育委員会 1995 『下荒田遺跡』
-

下 荒 田 遺 跡

長野県北佐久郡御代田町下荒田遺跡発掘調査報告書

1995年3月24日 発行

編 集 御代田町教育委員会
発 行 御代田町教育委員会
印 刷 ほおづき書籍株式会社
